

令和4年度 館長講座

第2回講座

縄文時代の高瀬山遺跡

令和4年7月10日（日）

会場 山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館研修室

縄文時代の高瀬山遺跡

はじめに

高瀬山遺跡で縄文土器や石器が出土することは、大分前から知られていた。1965年に石囲炉が発見され、これが契機となって柏倉亮吉氏によって発掘調査が行われ、縄文時代前期・中期・晩期の遺物が出土する遺跡であることが判明した（柏倉 1966）。

その後、高瀬山B遺跡の調査で縄文時代中期の土坑が検出され、盛んに石器製作をしていることも明かとなったが、縄文時代の集落として調査されたのは1994年に始まる東北横断自動車道酒田線の建設に伴う高瀬山1期地区の発掘調査であった。その後、SA地区、HO1期地区・3期地区の調査でも、集落跡が調査された。

1期地区では縄文時代前期後葉の環状集落跡が検出され、中期後葉大木9式期・10式期の竪穴住居跡等の遺構が検出され、縄文時代早期の土器も出土した。

1996・97年のサービスエリアの建設予定地（SA地区）でも中期末葉の竪穴住居跡や土坑が検出された。

1997年に始まる最上川ふるさと公園の建設に伴う発掘調査（HO地区1期）では縄文時代前期中葉の土器が出土し、中期中葉の住居跡、中期後葉の集落、後期中葉の集落、後期から晩期の水場遺構が検出され、それぞれの時期の土器や石器が多数出土し、後期初頭の土器も出土した。

2008～2010年の高瀬山HO地区3期調査では幅の狭いトレンチ調査が主であったが縄文時代中期初頭、中期後葉、後期前葉の遺構と遺物が検出され前期後葉の土器も出土した。

1 早期の土器について

(1) 1期調査区

竪穴住居跡や土坑などの遺構覆土内のほかに、段丘面の包含層から縄文時代早期の土器が出土した。ほとんどが土器片数量は少ない。

第1群土器 爪形状刺突文土器（図1-1・2）

1類：へら状工具による連続刺突による文様帯を構成する。（1）

金雲母を多量に含む。

2類：爪先による施文、固く焼成もよい。

第2群土器 縄文系土器（図1-3）

口縁部の破片資料が1点ある。やや外反し、口縁下に、垂下する単節縄文の施された土器である。両面ともにナデが施され平滑に仕上げられている。

第3群土器 沈線文系土器（図1-4・5・6・7）

1類：口縁部に並行する細い沈線が2段に押し引かれ、その間に斜方向に3条の沈線が施される。（図1-4）

2類：竹管状工具による波状沈線と同じ工具による連続刺突により文様が構成する。器厚は薄いものの、焼成はよく、固く仕上げられている。（図1-5）

3類：棒状工具による刺突が見られるもの。（図1-6）

4類：棒状工具による沈線と間隔をもった連続刺突が配置されるもの。（図1-7）

第4群土器 貝殻沈線文系土器（図1-8～17）

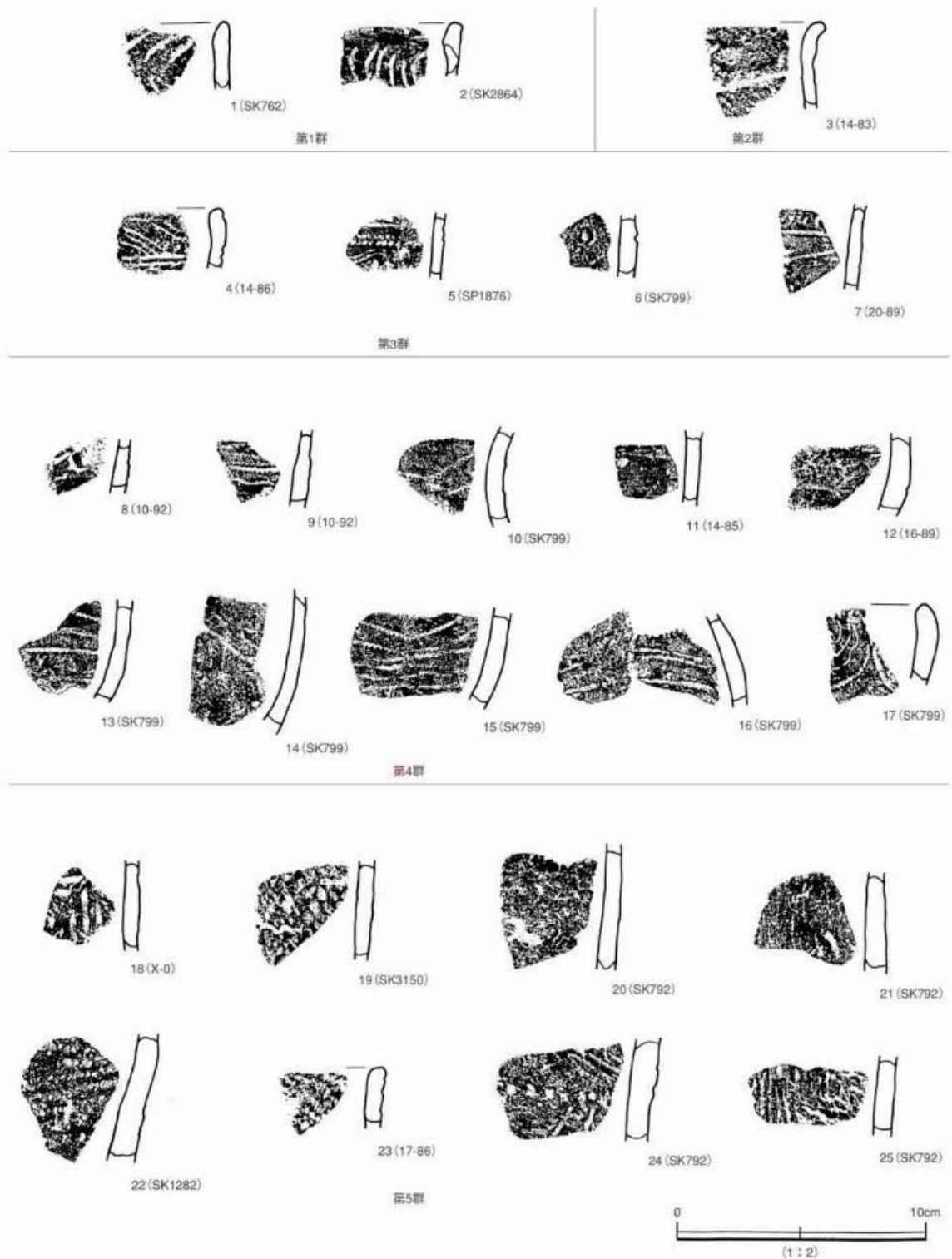


図1 1期調査区の早期の土器

図示した貝殻沈線文の認められる土器片は、すべて同一個体とみられ、赤褐色の色調に細砂を含み、ややろい状態である。17は口縁部で、曲線状に貝殻の腹縁による圧痕が巡る。他は胴部の破片で、曲面をもつものがある。貝殻腹縁の文様は横方向から斜め方向に展開しているのがわかる。これらの土器はSK799からまとめて出土していること、胎土や色調から同一

個体の資料と考えられる。

第5群土器 条痕文系土器 (図1-18~25)

1類：表裏に条痕が見られるもの。(18・25)

条痕は、溝幅1mm前後の細い条で、貝殻の腹部分の押引による施文と見られる。繊維質を含む。

2類：表面に条痕のほかに刺突や沈線が見られるもの。繊維質を含む。(24)

棒状工具による横方向の刺突や斜め方向への沈線が認められる。

3類：表面は無文ながら、裏面に条痕が施されるもの。繊維質を含む。(20・21)

4類：表面は単節の縄文、裏面に条痕が施されるもの。繊維質を含む。(19・22)

縄文条痕土器 (23)

1~4群は縄文時代早期中葉の沈線や貝殻腹縁圧痕で文様が施される田戸上層式の仲間、第5群土器は早期後葉の貝殻条痕文土器と考えられる。

(2) HO1期調査区

12区の奈良末~平安時代初頭の竪穴住居跡から早期後葉の条痕文土器の破片が1点出土している。



図2 HO1期の土器

3 HO1期調査区の前期中葉の土器について

1区の遺構外で前期中葉大木2b式の土器片が出土した。同一個体の可能性が高い。

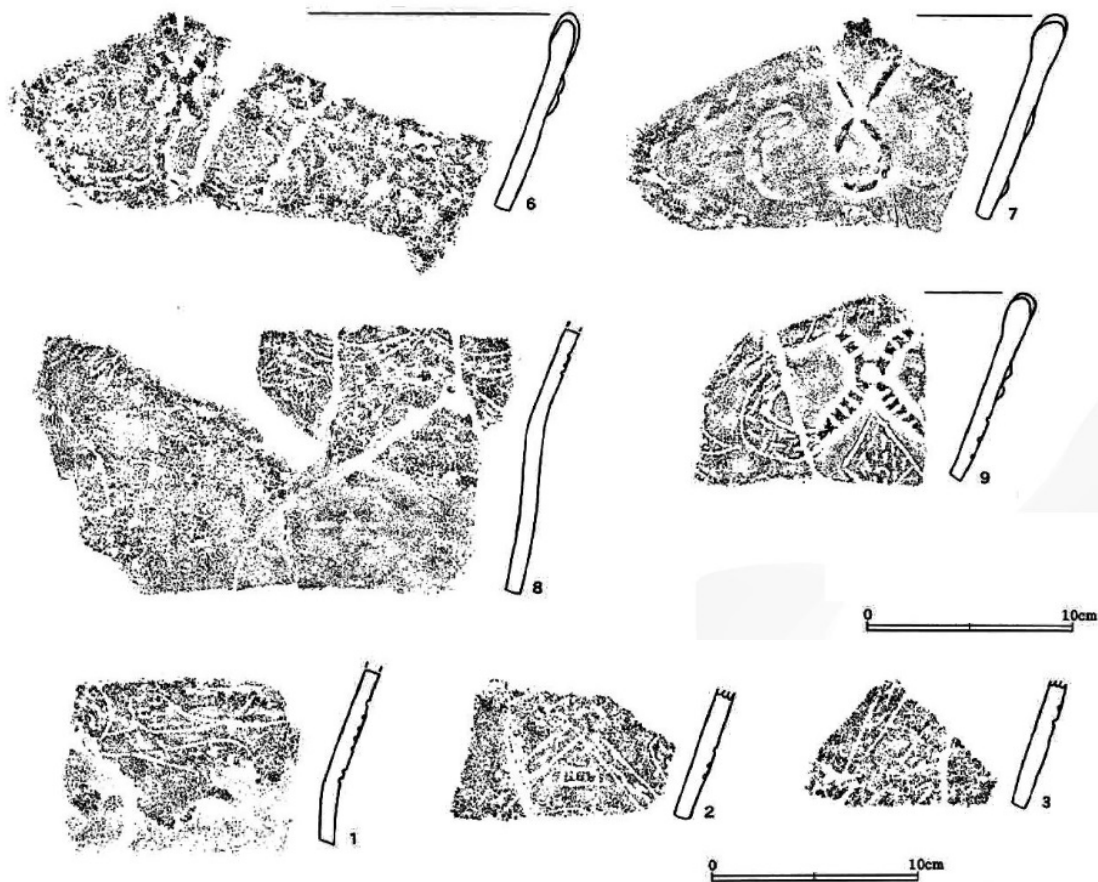


図3 HO1期1区の前期中葉の土器

4 1 期調査区の前期後葉の遺構と遺物

(1) 前期の遺構

縄文時代前期の遺構は大型住居跡、竪穴住居跡、焼け面を囲むピット群、フラスコ状土坑、墓壇、陥し穴、その他の土坑、溝状遺構・土器捨て場（遺物包含層）などからなる。

これらの遺構のほとんどは中位段丘に集中している。中位段丘でも特に7・8区とした段丘西側部分に直径120mの環状集落を形成している。中位段丘の平坦面は、縄文時代集落の東側に4区→1区→6区と続いているが、縄文時代の陥し穴やフラスコ状土坑は数基検出されるものの、住居跡は検出されていない。

環状集落には大型住居跡と通常規模の住居跡がある。環状集落の中央部、直径60mの範囲には住居跡など大型遺構は構築されない。円形・長方形の土坑が多数検出されるものの、周辺部に比べ遺構密度は非常に低い。その内側の直径30mの範囲ではさらに遺構の希薄な地区となる。中央広場とみられる。中央広場から竪穴住居群周辺では、直径・長径が1m前後～2m、深さ40～60cmの土坑が多数検出されている。

竪穴住居群は標準的な住居跡37軒と大型住居跡12軒が検出された。標準的な規模の住居跡は3～4mの円形・隅丸方形・楕円形がある。これらの住居跡の中で、まとまった遺物が出土した住居跡には3.88×3mの隅丸方形のST822、6×5.8mの円形のST3202、6×5m程の隅丸方形のST4063、4×5m程のST4064などがある。

大型住居には20mを超えるものが3軒、15m前後のものが9軒ある。これらの中で、長径23.5m、短径5.5m程のST1341からは多量の土器や石器が出土し、長径が17m程の重複するST3301～3303や長径が17.4m短径が5～6mを測るST4168でも多くの土器や石器が出土した。

住居跡として確認されていないが、大型柱穴が約5m間隔で、SK1201土坑周辺とST3703住居跡の北側付近などで検出されている。大型住居の一部である可能性が考えられる。

平成14年度の寒河江市教委が実施した7区北側に隣接する地区の調査では、20mを超える縄文時代前期末葉の大型住居が1軒検出されており、縄文時代前期集落が環状に展開していることが確認されている。

土坑は大小様々な形態がみられる。フラスコ状の断面の土坑は1m未満から2mのものまである。また、底面に溝を有するもの、溝の両端にピットを配置するもの等、多種多彩である。規模の大きさから住居跡とした中にも、底面に溝を有するものは大型土坑であった可能性もある。

完掘時には上端が崩落してしまい、平面図ではフラスコ状が明確でなくなった土坑も多い。また、直径・長軸1m以下の小型の土坑でもフラスコ状を呈するものが多数みられる。隅丸長方形の土坑も多数検出され墓壇群と貯蔵穴群に別れるものとみられる。これらの土坑の分布は、ほとんどが7・8区に集中する。

陥し穴は中位段丘東側の6・3・1区の東側で数基が検出されている。低位段丘では調査区西端の2区で1基が検出されている。

溝状遺構（SG810河跡）が環状集落の中央部を南北に縦断する、また、1区東側ではSD5が検出されている。

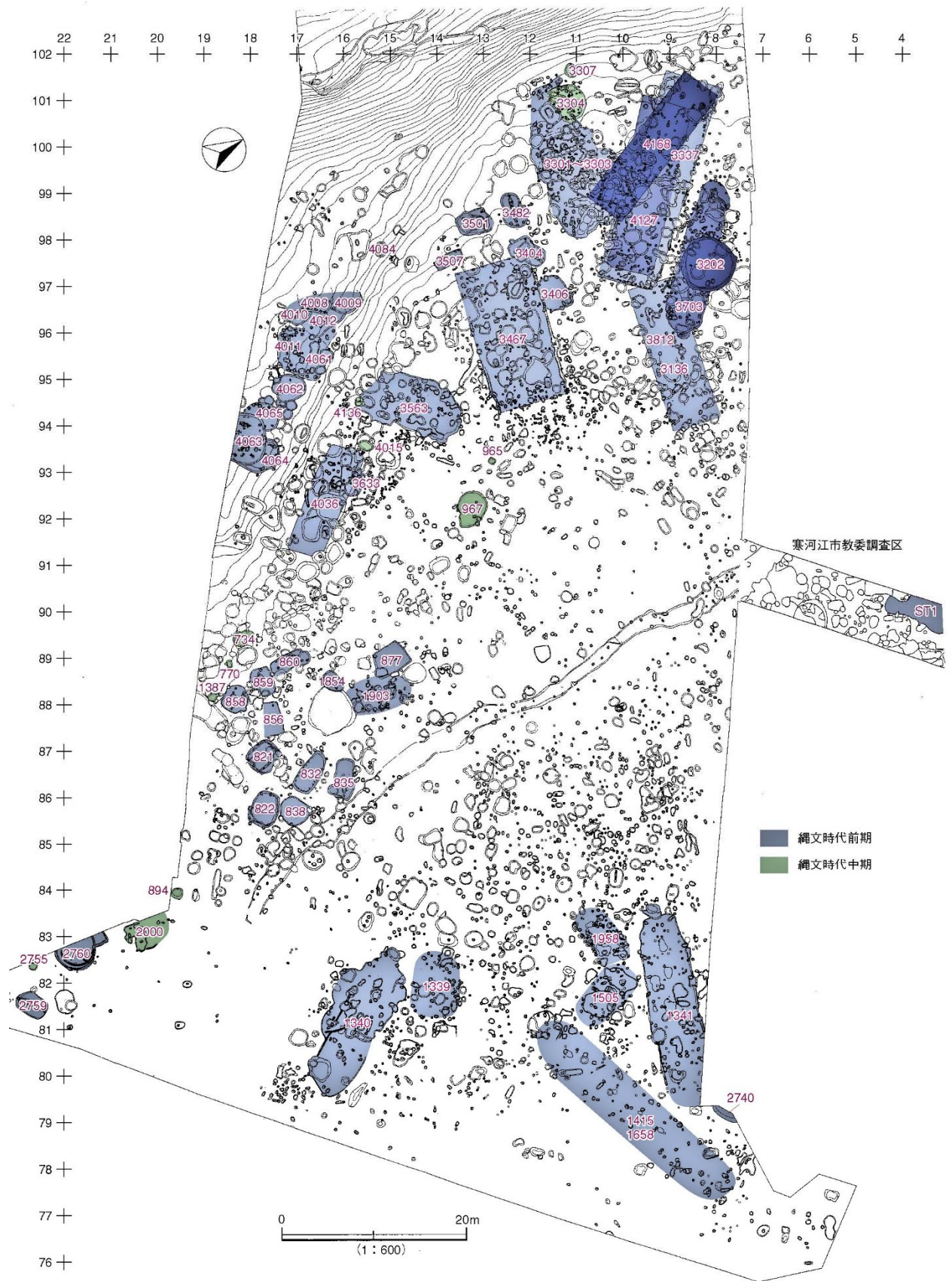


図4 1期調査区の縄文時代の遺構

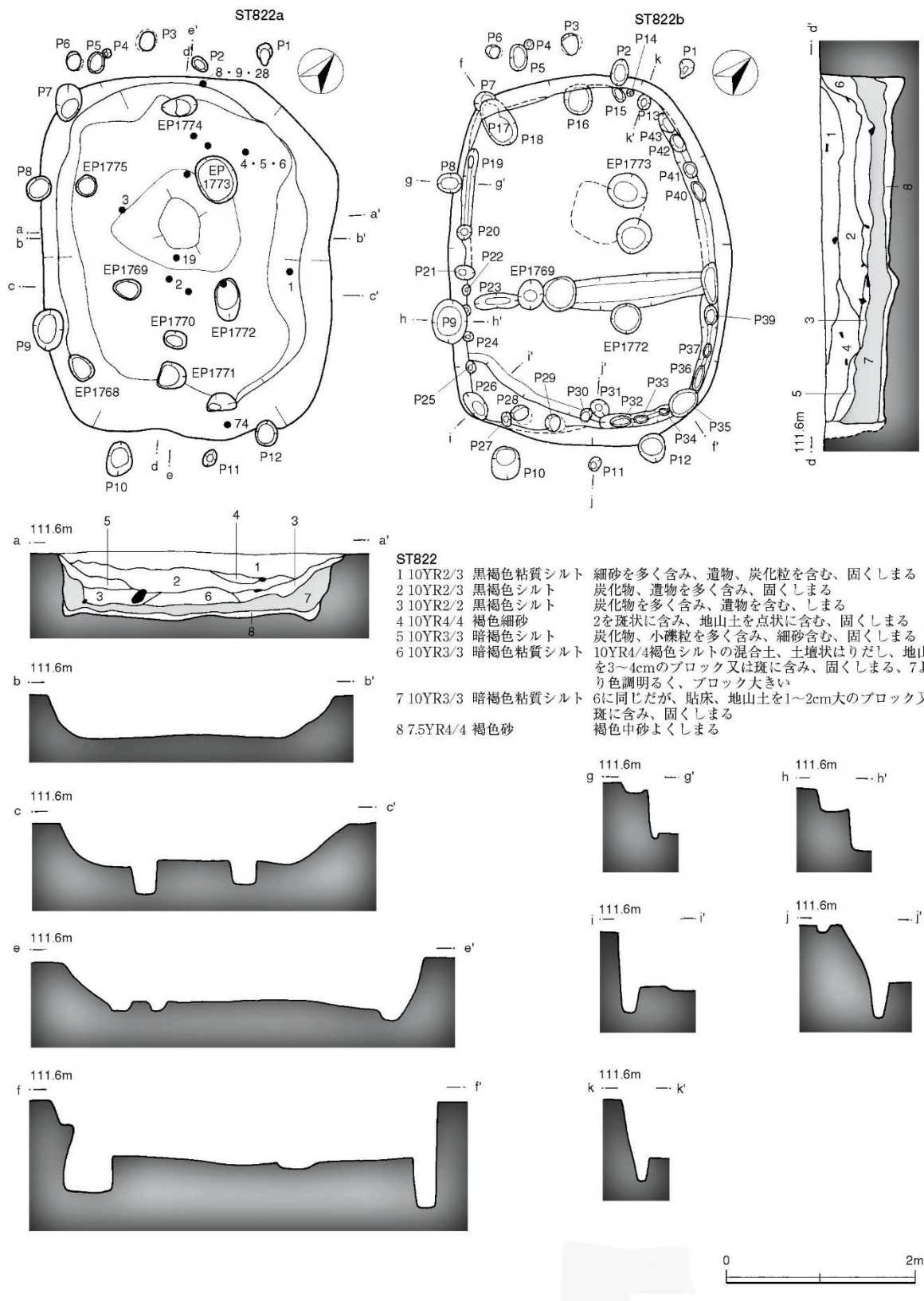


図5 1期調査区 ST822 平面・断面図

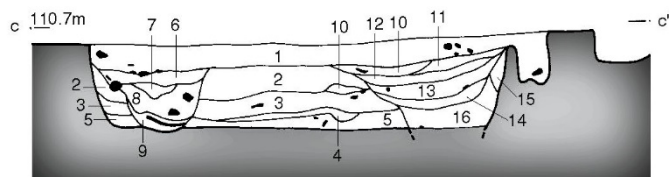
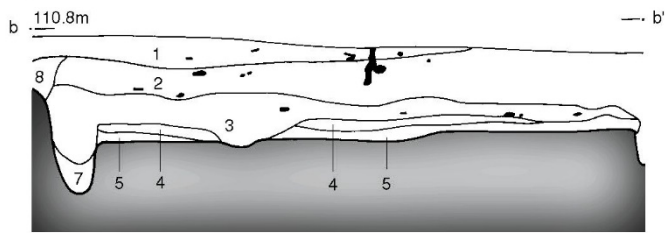
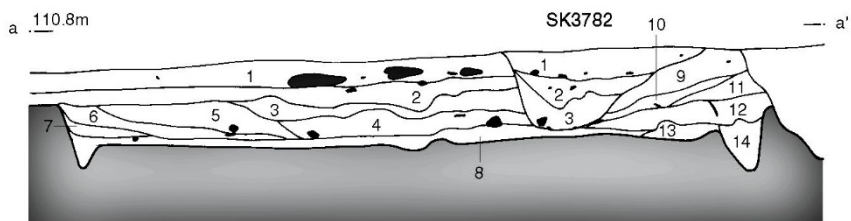
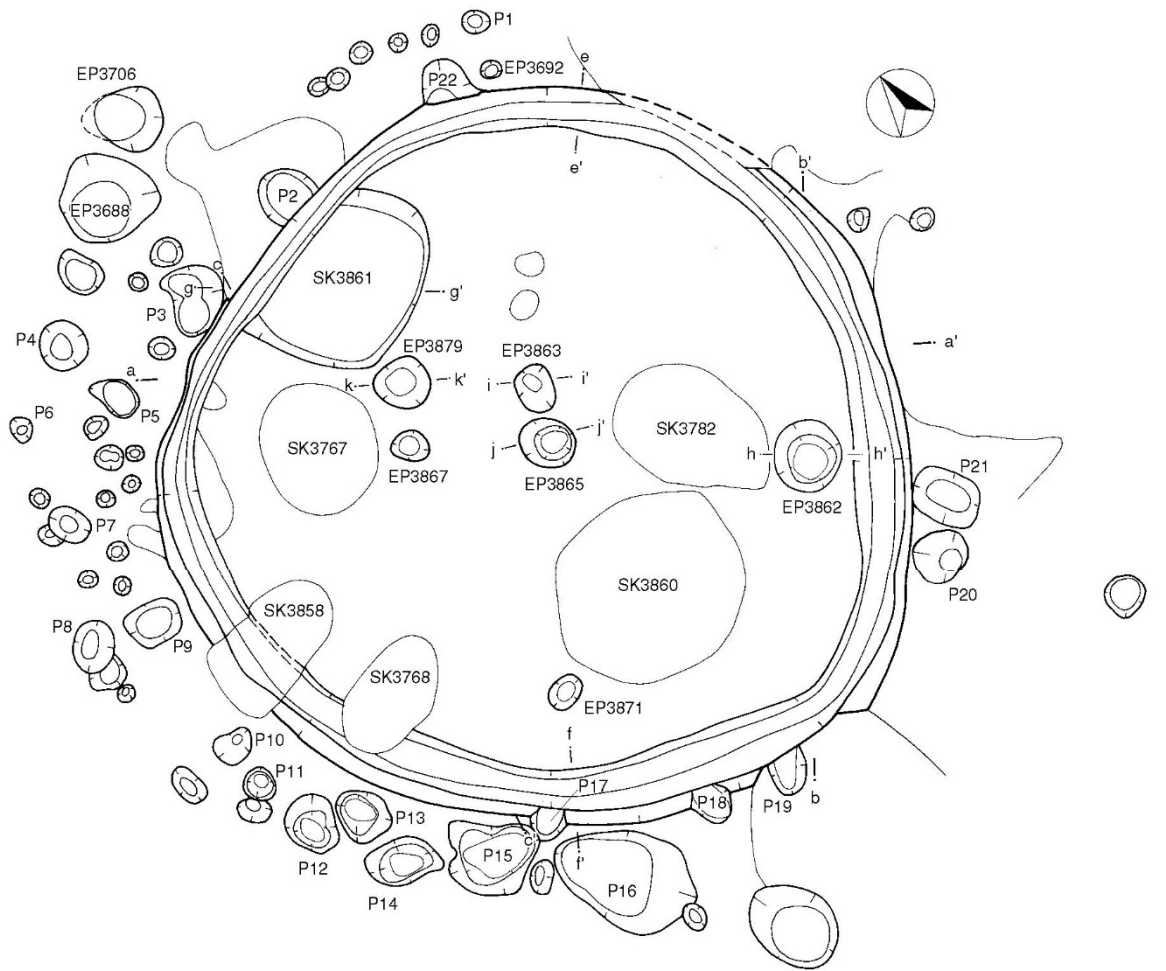
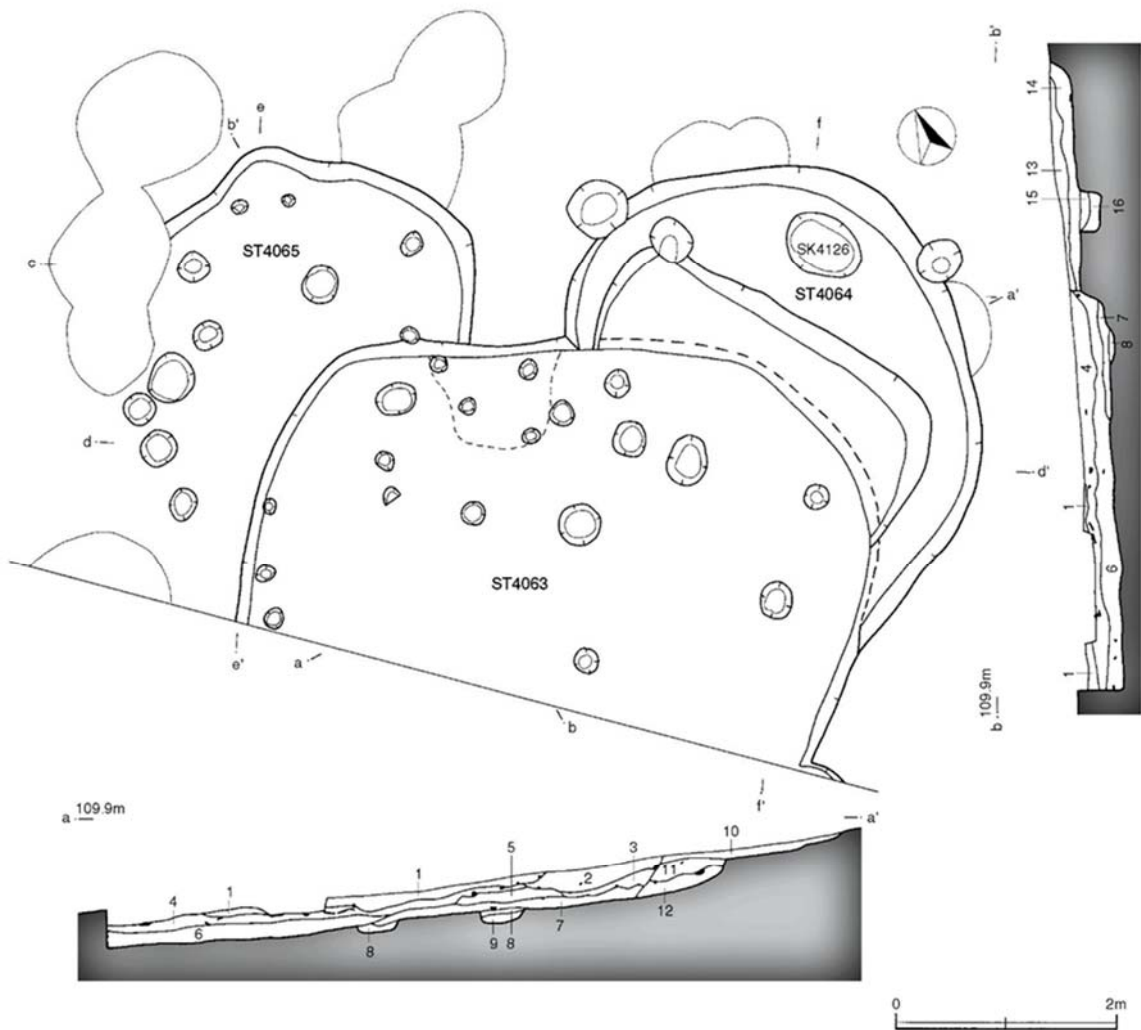


图6 1期調査区 ST3204 平面・断面図



- ST4063**
- | | | |
|---|----------------------|---|
| 1 | 10YR3/3 暗褐色シルト質粘土 | 若干の炭化粒子と白色風化礫微粒が混じり、やや固くしまっている |
| 2 | 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト質粘土 | 小礫（径2~4cm）と黒色、黄褐色粘土ブロックや炭化粒子が多量に混じり、やや柔らかい |
| 3 | 10YR3/2 黒褐色シルト質粘土 | 小礫（径1~3cm）と黄褐色粘土ブロックや炭化粒子を多量に混じり柔らかい、2と近似する |
| 4 | 10YR3/4 暗褐色シルト質粘土 | 炭化粒子、黄褐色粘土粒を多量に含み、やや柔らかい |
| 5 | 10YR3/2 黒褐色シルト質粘土 | 4と近似するが、白色風化礫粒を多量に混じる |
| 6 | 10YR2/3 黒褐色シルト質粘土 | 炭化粒子、白色風化礫粒多量に含み、やや柔らかくなっている |
| 7 | 10YR3/2 黒褐色シルト質粘土 | 6に近似しているが、若干の黒色、黄褐色粘土粒が混じる |
| 8 | 10YR3/1 黒褐色シルト質粘土 | 多量の炭化粒子を多量に含み、柔らかい |
| 9 | 10YR4/4 褐色シルト質粘土 | 黄褐色粘土粒や炭化粒子を含み、柔らかい |
- ST4064**
- | | | |
|----|----------------------|---|
| 10 | 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト質粘土 | 黄褐色粒子微粒や炭化粒子を多量に含み、固くしまっている |
| 11 | 10YR4/4 褐色シルト質粘土 | 炭化粒子、黄褐色粘土ブロックや黄褐色粘土ブロックが多量に混じり固くしまっている |
| 12 | 10YR3/2 黒褐色シルト質粘土 | 炭化粒子、白色風化礫粒を多量に混じり、柔らかい（自然堆積） |
- ST4065**
- | | | |
|----|-------------------|--------------------------------|
| 13 | 10YR4/4 褐色シルト質粘土 | 炭化粒子、黄褐色粘土粒、白色風化礫粒を多量に含み、固くしまる |
| 14 | 10YR2/3 黒褐色シルト質粘土 | 炭化粒子、白色風化礫粒を含みやや固くなる |
| 15 | 10YR3/1 黒褐色シルト質粘土 | 炭化粒子を多量に含み、柔らかい |
| 16 | 10YR3/2 黒褐色シルト質粘土 | 炭化、黄褐色、黒色粘土粒を含み、柔らかい |

図7 1期調査区S T4063・4064他平面・断面図

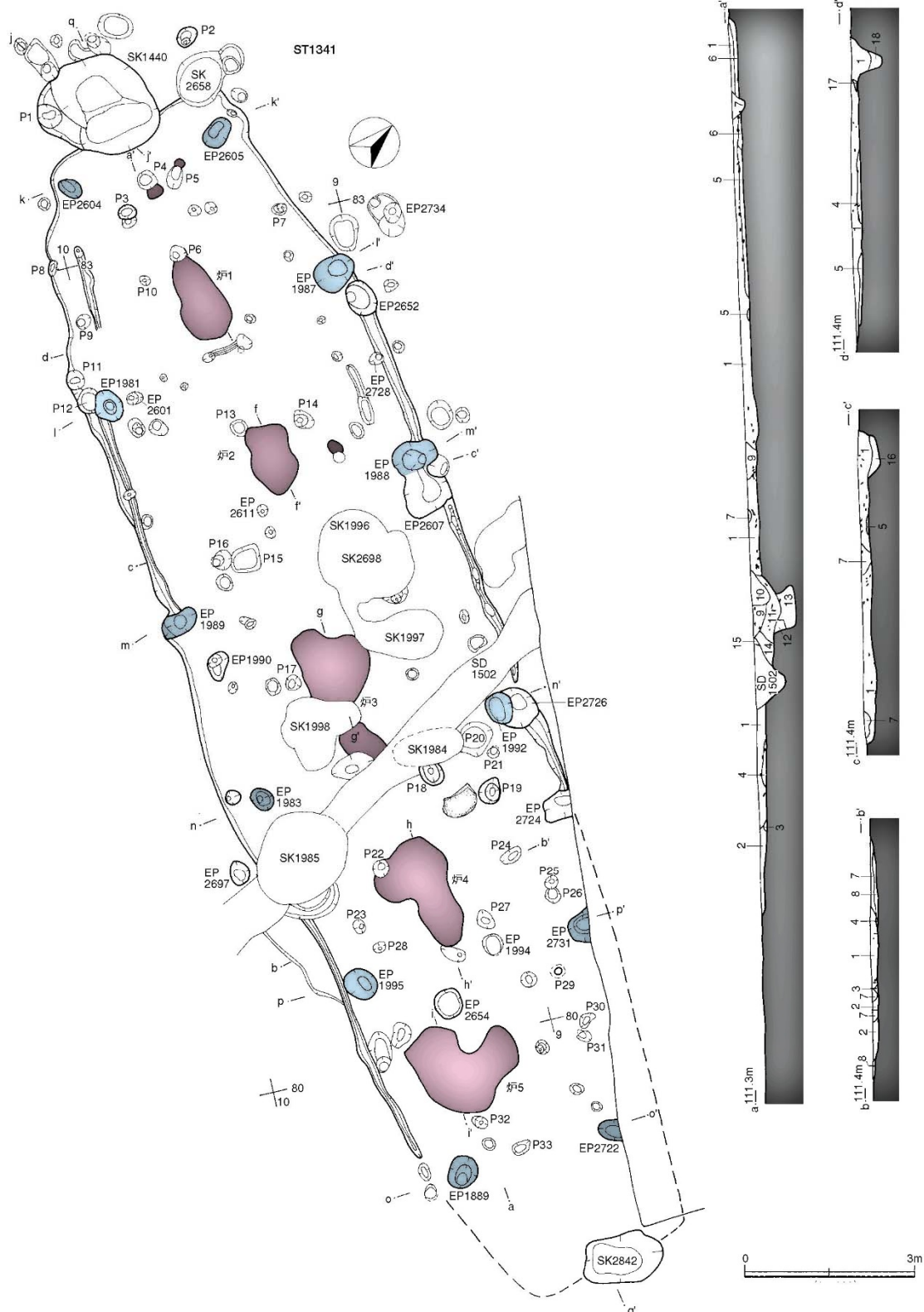


図8 1期調査区ST1341平面・断面図

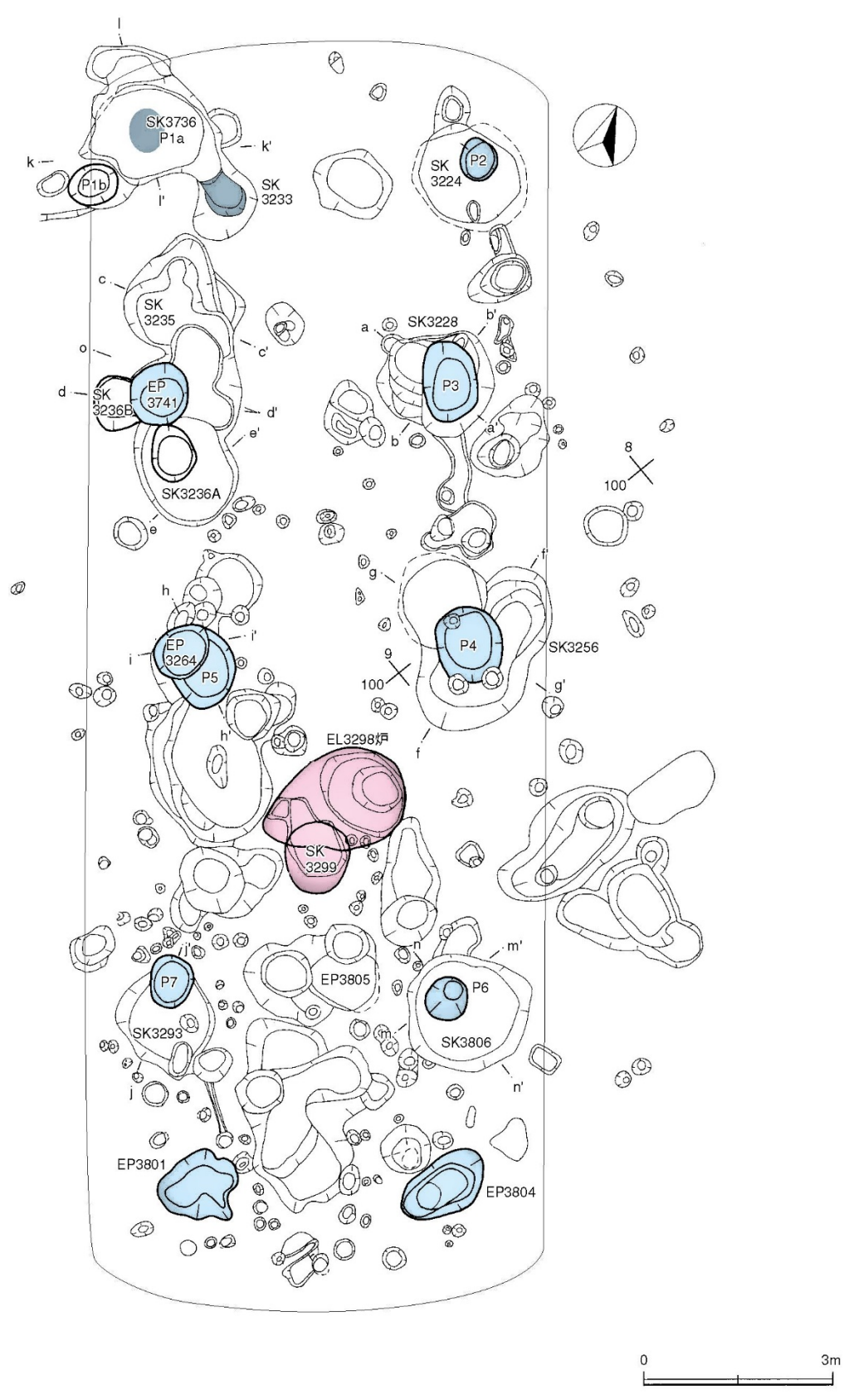


図9 1期調査区S T4168 平面・断面図

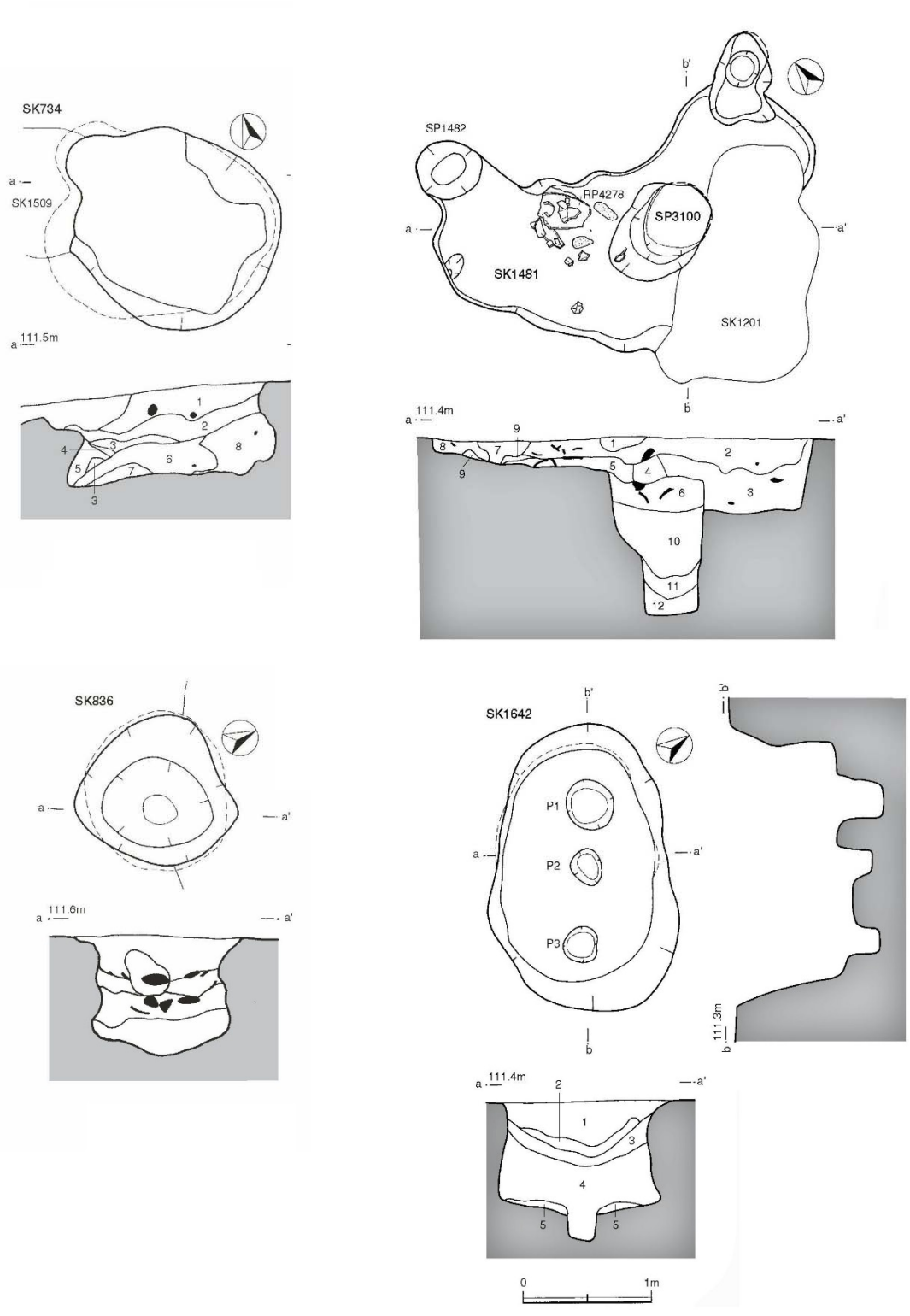


図10 1期調査区の主な土坑と陥穴

(2) 前期の土器

高瀬山遺跡の前期の土器については小林圭一氏による優れた論考(小林 2014)があるので、以下それを引用する。なお、大木 5a 式の土器片 1 点が H 03 期地区で出土している。

最上川中流域に当たる山形盆地の中で、発掘調査された前期末葉の集落は寒河江市高瀬山遺跡に限られる(齊藤・須賀井 2005)。同遺跡は山形盆地西端の最上川左岸の河成段丘に立地する、大木 6 式期を主体とした環状集落である(図 4)。

遺構は直径 120m の範囲内に住居群が配置され、その内側に上坑群が形成され、更に中央の直径 30m の範囲は遺構密度が希薄となっており、円環状の「重帯構造」が看取される。集落は大木 5b~6 式期に形成されており、竪穴住居は 3~5 m の標準的な住居(円形・楕円形・隅丸方形) 37 棟と、長軸 15~20m 超の大型住居 12 棟が検出されている。大型住居の多くは主軸を放射状にして配列されるが、主軸が円周方向を向く例もあり、大型住居同士の重複も認められる。小型住居には壁柱穴を巡らすものや不規則な柱穴のものがあり、地床炉を持つ例は少なく、床面中央の溝状の掘り込みを特徴とする。また斜面部の住居を除くと小型住居同士の切り合いは少なく、大型住居に切られる例が見受けられる。高瀬山遺跡は山形県内における大型住居を主体とした集落の初現となるもので、中期に連なる構成であると考えられている。

高瀬山遺跡では大木 5b 式~6 式 3 期にかけて、遺構単位で多くの土器が出土している。特に大型住居跡である ST1341 は他の時期の混在もあるが、大木 6 式 2 期を主体とした良好なままとまりであることを今村氏が指摘している(今村 2006c: 65 頁)。

大木 5b 式 高瀬山遺跡では大木 5b 式に相当する土器が多数認められる。口縁部が緩やかに外傾した朝顔形(図 11-1・4・7) や、頸部が弱く括れ口縁部が外反しか器形(2・3・6・8・9) が多く、後者には波状縁(2・3) も存し、平縁では幅広の低い突起を配した例(6・8) が見受けられる。文様は頸部や胴上部の細かなジグザグ貼付文が特徴となるが、沈線の例(3・7・8) もあり、ジグザグが全周せずアクセントとして弧線が挿入されたり(8・9)、文様が途絶した例(3) も存しており、その他に上下に対向した弧線(5) も見られる。今村氏は本型式

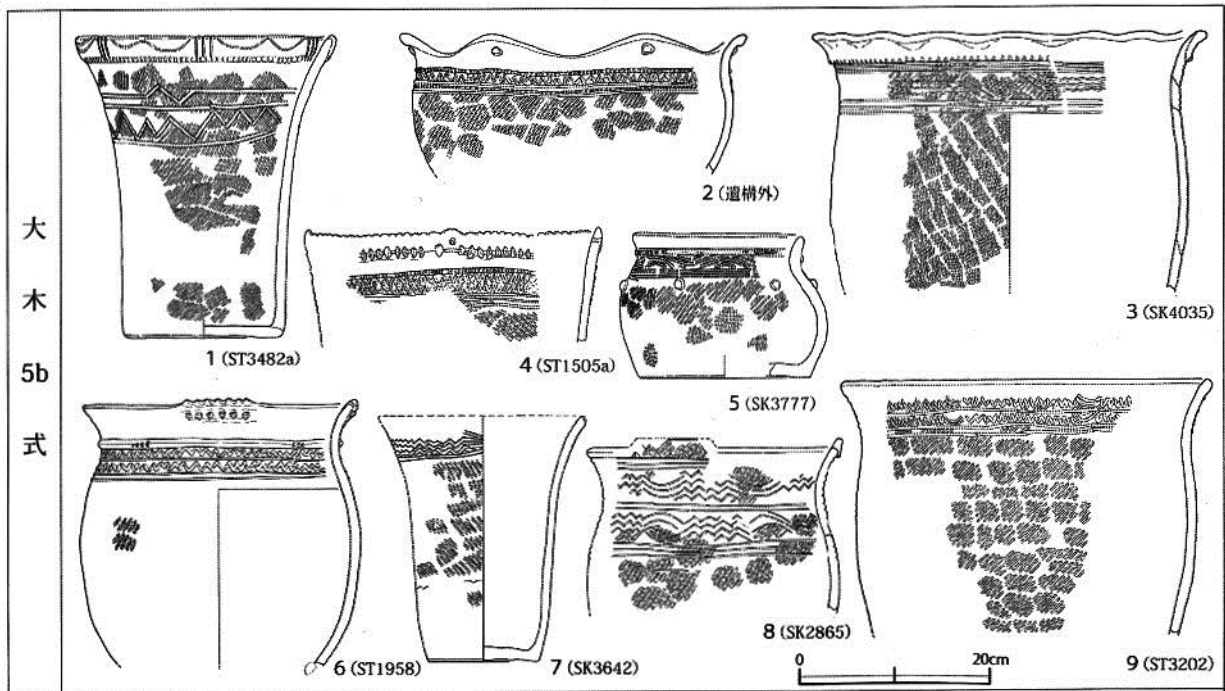


図 11 1 期調査区の大木 5 b 式土器

の特徴として、頸部の文様は上限を刻みのある浮線文1本、下限を刻みのない細い浮線文1ないし数本で画した例が多いことを上げている（今村 2006c:39 頁）が、2・4～6がこれに該当する。なお1は放射性炭素年代測定が実施され、前記したように妥当性の高い測定値が得られている（ $4830\pm 40^{14}\text{CBP}$ 、 $5020\pm 50^{14}\text{CBP}$ ）。

大木6式1期 大木6式1期として図12-10～20を図示したが、15は大木5b式、16は大木6式2期に比定され、不適切な提示となっている。

1期の一括性の高いまとまりとして、ST822が上げられる。調査区南東の小型の隅丸方形の住居跡収88×3m)で、10～12は球胴形、13・14は長胴形で、12は床面近くで、その他は床面より10～40cm程浮いた状態で出土した。球胴形の口縁部は幅が狭く厚く作出され、10は短沈線列と縦位の貼付文、11は8単位の波状縁で双頭の波頂部直下に凹円を配し、その間が短沈線で刻まれており、双頭波状の初現的様相を呈する。13は4単位の波状縁で、幅狭の口縁部は弧状の隆行文様で構成され、胴部は半截竹管による乱雑なジグザグ文が横位に施される。14は8単位の波状縁で、口縁部は半截竹管による3本の結節沈線文と頸部は2本のジグザグ文が巡らされ、胴部にはLRを地文に格子目の沈線文が認められる。「胴部における沈線の交叉は大木6式のもっとも初期に多く見られる文様」（今村 2006c:40 頁）と指摘されており、1期に位置づけられる。

15は円形住居跡であるST3202から出土したが、胴部から底部への移行が緩やかな器形で、2の系統にある球胴形として本型式で図示した。しかし大木5b式の公算が強い。口縁部が波状縁に沿った無文の肥厚帯で、波頂部直下に円孔が穿たれ、更にその直下にボタン状貼付文が付される。頸部の文様は上限を刻みのある1本の浮線文、下限を刻みのない細い2本の浮線文で画し、その間に2本単位の縦位と上下に対向した弧状の貼付文が展開しており、大木5b式の特徴を具備している。16は大木6式2期の結節浮線文の球胴形土器であるが、15と同じST3202から出土したことから併せて提示した。しかし同遺構（住内土坑SK3767）からは大木5b式(9)も出土しており、一括性には問題があろう。

17・18は調査区東側のフラスコ状土坑SK1281から出土した。17は無文の幅広の肥厚帯を持った球胴形で、胴部から底部への移行が緩やかな器形である。肥厚帯の上下両端が刻まれ、波頂

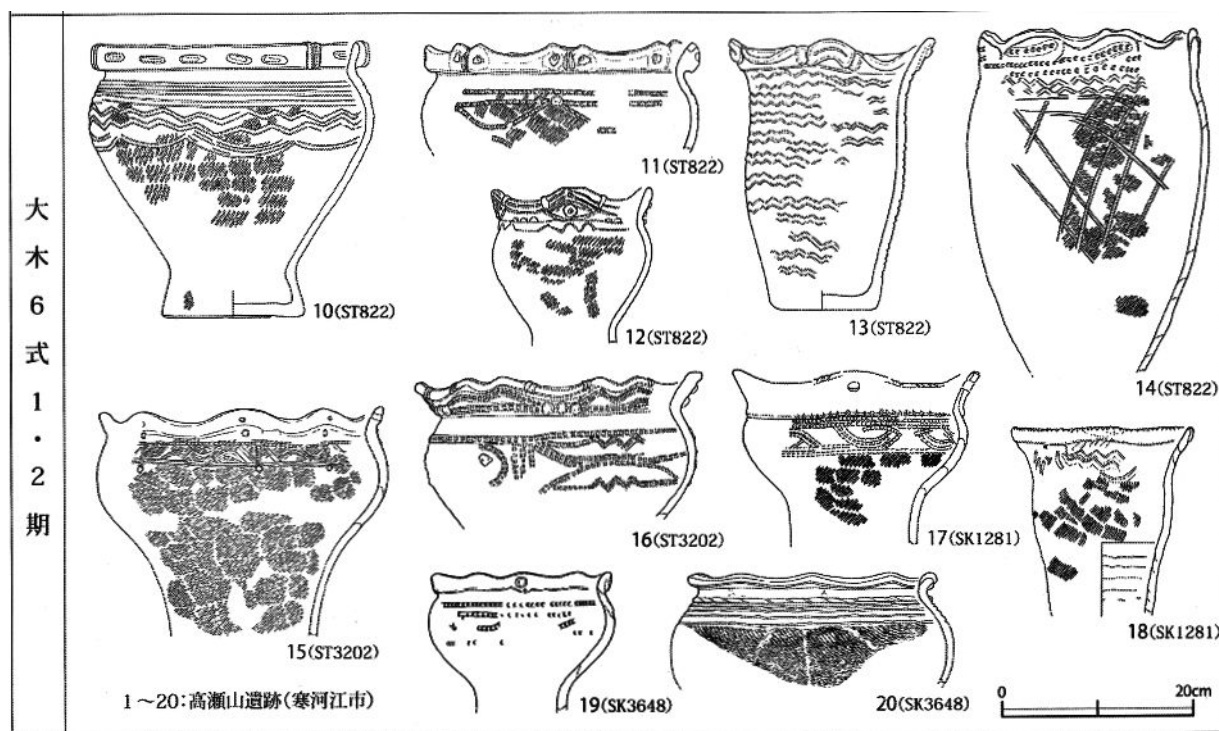


図12 1期調査区の大木6式1・2期の土器

部直下に円孔が穿たれ、括れ部直下の幅の狭い文様帯は結節沈線による弧状の文様で構成されるが、渦巻文様の原形となるものであろう。18は胴上部が僅かに張り出し頸部で括れ、口縁部が外傾した深鉢で、複合口縁の上端が刻まれ、頸部に棒状工具によるジグザグや弧線の文様が施される。

19・20は調査区中央南側の土坑SK3648から出土した。共に口縁部は緩い波状縁で幅狭の肥厚帯となり、頸部で強く外折し、胴部は球状に膨らみ、緩やかに底部へ移行する。19は口縁部に凹円を配し、括れ部直下に結節沈線で区画線と弧状の文様が配される。20は括れ部に刻み隆起線、その直下に平行沈線を巡らせる。

大木6式2期 大木6式2期はST1341が基準資料となる。球胴形と長胴形の分化がより明瞭となり、後者の口縁には双頭波状が発達する。今村氏は2期として本遺跡の球胴形4点(図13-21~24)と長胴形5点(26・28~31)を図示している(今村2006Cc:10・14図)。

21~25は2期の球胴形土器である。口縁に肥厚帯を有し、頸部が強く外折し、胴部が張り出し脚台状部へ移行する器形が多く、底部近くが縮約して再び開く例(24)も見られる。胴部文様帯は胴上部の幅狭の区画帯内に、結節沈線(21~23)や結節浮線(24・25)による文様で構成されるが、上端の区画線は浮線(または隆起線)となる例が多い(21・22・24・25)。口縁部は幅狭で文様はあまり発達せず、凹線や隆起線で構成され、緩い波状縁(23・24)も見られる。21・23には口縁に沿って隆起線と凹線が巡らされ、途中つまみ状の縦長突起が配される。25は胴部が球状に張り出し、胴部文様帯に結節浮線による渦巻とジグザグの文様が展開しており、3期に比定される可能性も否定できない。しかし31と同じ住居跡から出土し、また立体的な双頭波状口縁で構成されることから同期に位置づけた。双頭波状の隆起線を縁取るように結節浮線文が施され、その間にも2列の結節沈線が充填され繁縷となる。双頭波状間は棒状工具で縦に刻まれ、口唇部

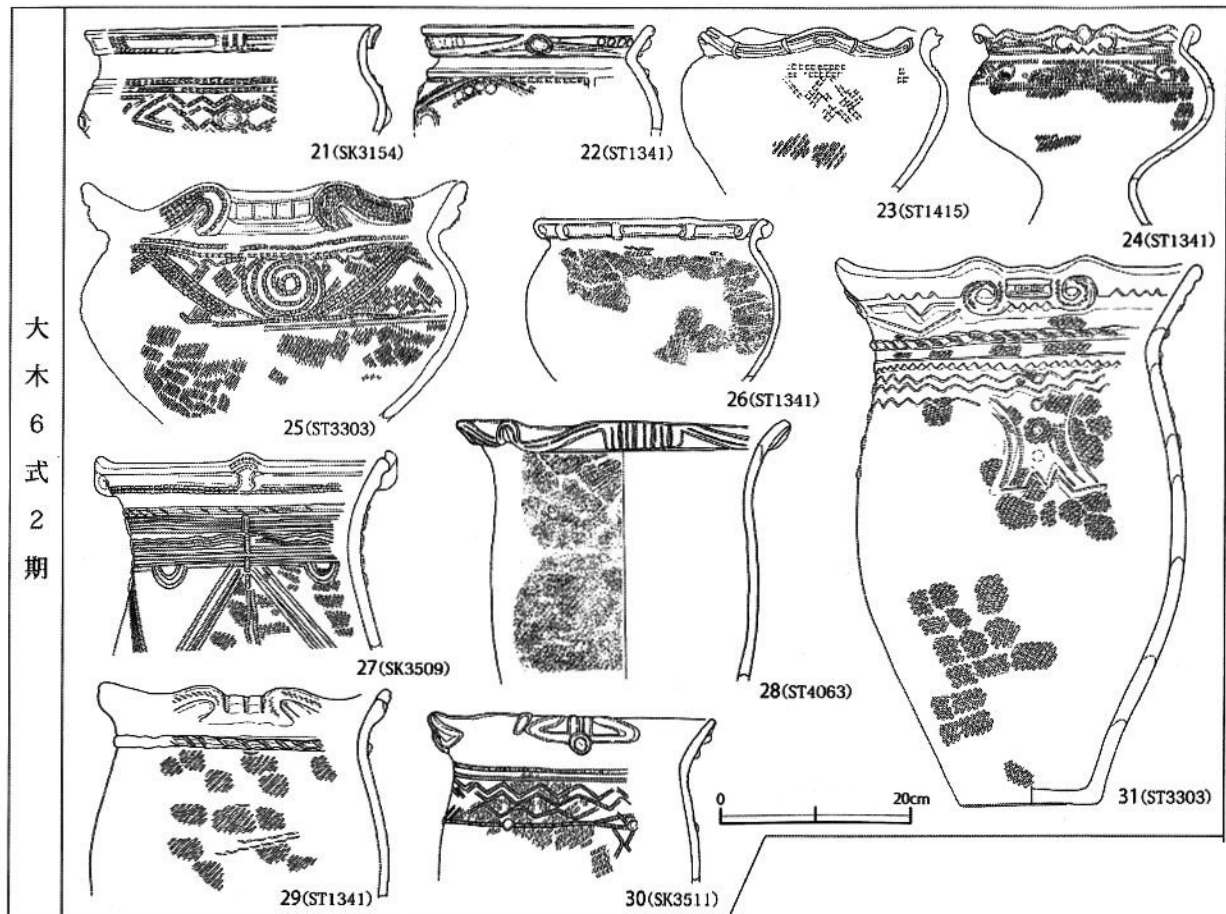


図13 1期調査区の大木6式2期の土器

には縦の貼付文が付される。

26～31は2期の長胴形土器である。双頭波状は2期に発達するが、29・31はその典型となり、隆起線と凹線で構成された26・27の口縁部は、球胴形(21)と共通する。また口縁部文様の隆起線の中心線に沿って撚糸を押しつけたもの(28・29)が、山形と会津方面に特徴的に見られる(今村 2006c:51頁)。長胴形の頸部文様帯には刻み隆起線が見られるが、その直下に水平の平行線やジグザグ文を巡らす例(27・30・31)も存する。胴部文様を欠いた土器がほとんどで、文様を有する27・30・31は例外的である。

高瀬山遺跡では2期の球胴形土器が思いの外多く認められる。上記したように口縁部が厚手で文様帯幅が狭く、胴上部の狭い区画内には結節浮線や結節沈線による文様が展開するが、その数量は3期を凌駕するようにも窺われる。本来浮線系球胴形土器は3期を象徴する器種類型であるが、同遺跡には前駆的資料が集中していることになる。筆者の型式同定に問題があることも否めないが、多数存するのは日本海側内陸部における球胴形の主導権を握っていた可能性が考えられる。また長胴形土器についても同様で、2期の方が多く見受けられる。なお28が出土したST4063は、ST1341と共に大木6式2期の良好なまとまりとなる。

大木6式3期 今村氏は大木6式3期として、本遺跡の球胴形2点(32・33)と長胴形2点(35・36)を図示している(今村 2006c:11・14図)。

32～34は3期の球胴形土器である。口縁部は上下幅が広がり、胴部は大きく球状に膨らみ、球胴部から合状部へ直角に近く折れ曲がり、下を小さな脚合状の部分が支える器形が多い。口縁部

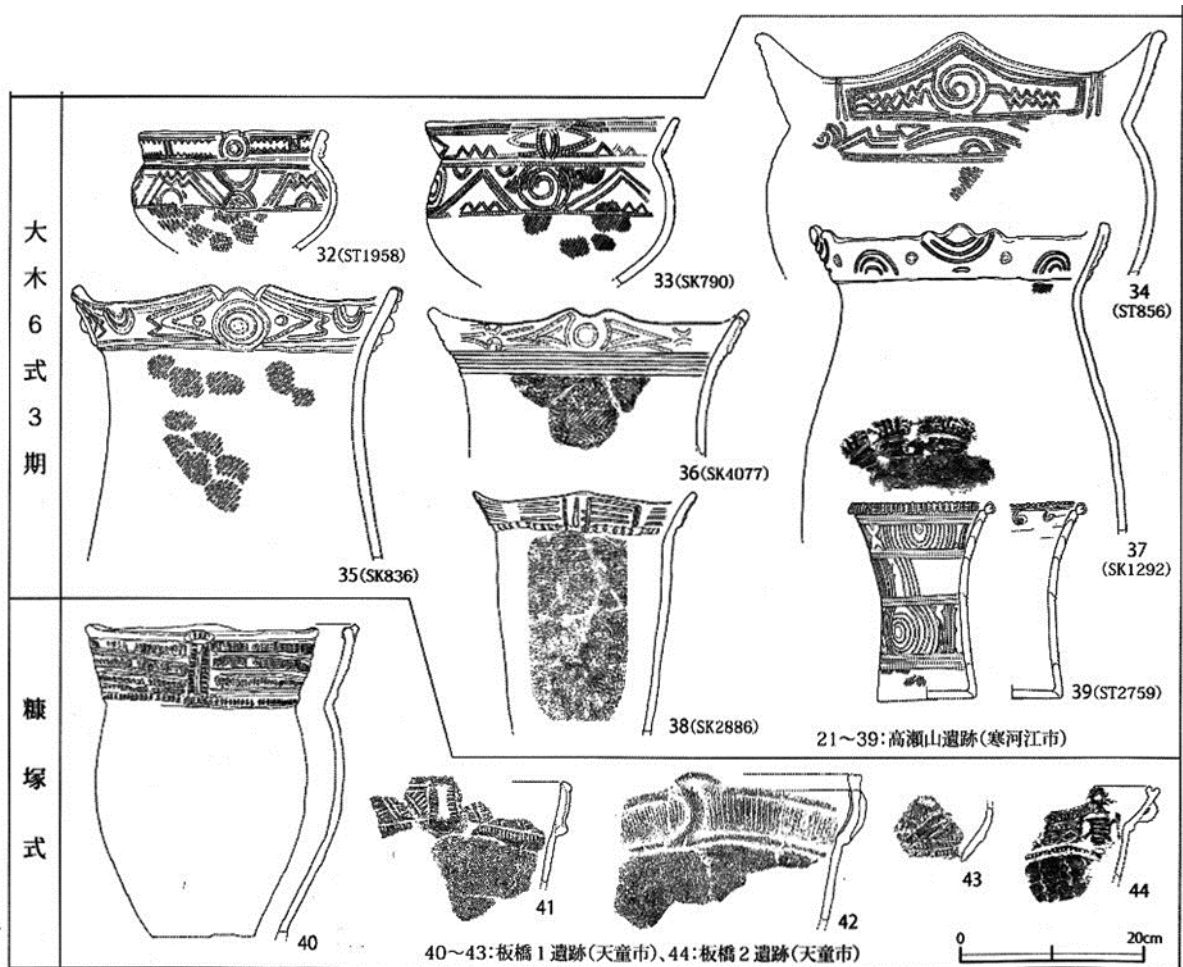


図14 1期調査区の大木6式3期の土器他

には三角形刻文 (32) や結節浮線によるジグザグ文 (33・34)、胴上部も結節沈線 (32) や結節浮線による文様 (33・34) が展開し、文様帯の幅が広がるため、線の間には余裕のある空間が配置される (32・33)。

35～37 は3期の長胴形土器である。口縁部文様の上下幅が広がり、双頭波状の中間に凹円を配し、それを囲うように中太の沈線でくの字形や三角形の文様が施される (35・36)。頸部には沈線群が巡らされた例 (36) があるが、胴部には文様が見られない。

39 は今村氏が「十三菩提式鍋屋町系土器」として紹介した土器である。文様は関東の原形に近いが、器形が円筒形で、文様帯をこのように何段も重ねるのは北陸にはあまり見ないが、中部高地や関東では少なくないと解説された (今村 2006e:129 頁)。

日本海沿岸部では真脇式の末期 (十三菩提式の中段階末に並行) に、北陸からの集団的移住が起こるが、それに先行して、北陸の鍋屋町系土器が中部高地を通過して関東地方に入り、それらの地域で変形した後、東北地方を北上した現象があったことが指摘されている。関東地方の十三菩提式中段階、東北の大木6式3期に相当し、その場合には日本海沿岸部とは異なり、圧倒的な量の東北地方の土着の土器の中に、わずかな量の鍋屋町系土器が混じるだけとなる。39はその異系統土器に該当するが、文様の崩れ等から搬入された土器ではなく、東北で作られたと理解されている。「関東からの移住者が遠方で関東本来の土器作りや約束ごとを忘れかけながら作ったと判断するのが妥当」 (今村 2006e:130 頁) であり、「本場から遠く離れた東北地方に移住した孤独な土器の作り手は、作り分けの約束を忘れ、自分が保持する2つの系統を完全に折衷した土器を作ってしまったのであろう。」 (今村 2006e:130 - 131 頁) と解説した。関東の土器作りの系統を担った作り手が、大木6式土器の高瀬山遺跡の集落の片隅で暮らしていた様相が想定されている。

高瀬山遺跡では大木6式3期までの資料が多数認められる。しかし4・5期に相当する資料はほとんど見当たらない。38 は円筒形を呈し、口縁部文様が横線と縦の貼付文の単純な形に整理されており、新しそうな資料として図示したが、複合口縁でやや厚みを有しており、3期の位置づけが妥当であろう。上記から大木6式3期の段階で、この大規模な集落が終焉を迎えたことが指摘される。調査区域外の地点に集落を移した可能性も否めないが、集落を再編成しなければならない事態が生じた可能性が考えられる。

中期初頭 中期初頭は天童市板橋1遺跡で、糠塚式が出土している。同遺跡は高瀬山遺跡の東方7kmの乱川扇状地の扇端部の微高地に立地している。図14-40~43は、E区のグライ化した砂層からまとまって出土したが、遺構は検出されていない (齊藤健 2004:14 頁)。

40 は頸部が括れ、口縁部が外傾して立ち上がる長胴形の深鉢である。口唇部と括れ部に横位、口縁部文様帯に単位の縦位の隆起線が貼付され、その区画内は篋状と棒状工具で刻まれた3段(一部4段)の刻目帯で構成され、括れ部と縦位の隆起線は縄(LR)の側面圧痕が加えられる。胴部は無文に表現しているが、写真図版(齊藤健 2004:写真図版13)では縦位の結節縄文が確認できる。41・43は同一個体ではないが、胎土・文様が類似しており、隆起線で画された口縁部文様帯には、斜位の浮線と刻目が多用され、胴部は縦位の結節縄文となる。42はキャリパー形の器形で、口唇部と括れ部に横位の隆起線が巡らされ、口端からS字形に隆起線が垂下し、区画内は篋状工具による短沈線が充填される。胴部の装飾は磨耗のため確認できない。また隣接する板橋2遺跡でも、糠塚式相当の橋状把手を持った口縁資料(44)が出土している。

高瀬山遺跡のST1341出土土器 高瀬山遺跡のST1341は、調査区の東端から検出された大型の竪穴住居跡(図8)で、出土土器は大木6式2期を主体とした一括性の高い資料となる。住居跡は長軸23.5m、短軸5.5mの長方形を呈し、掘り込みは浅く壁高は5~10cmを測り、支柱は

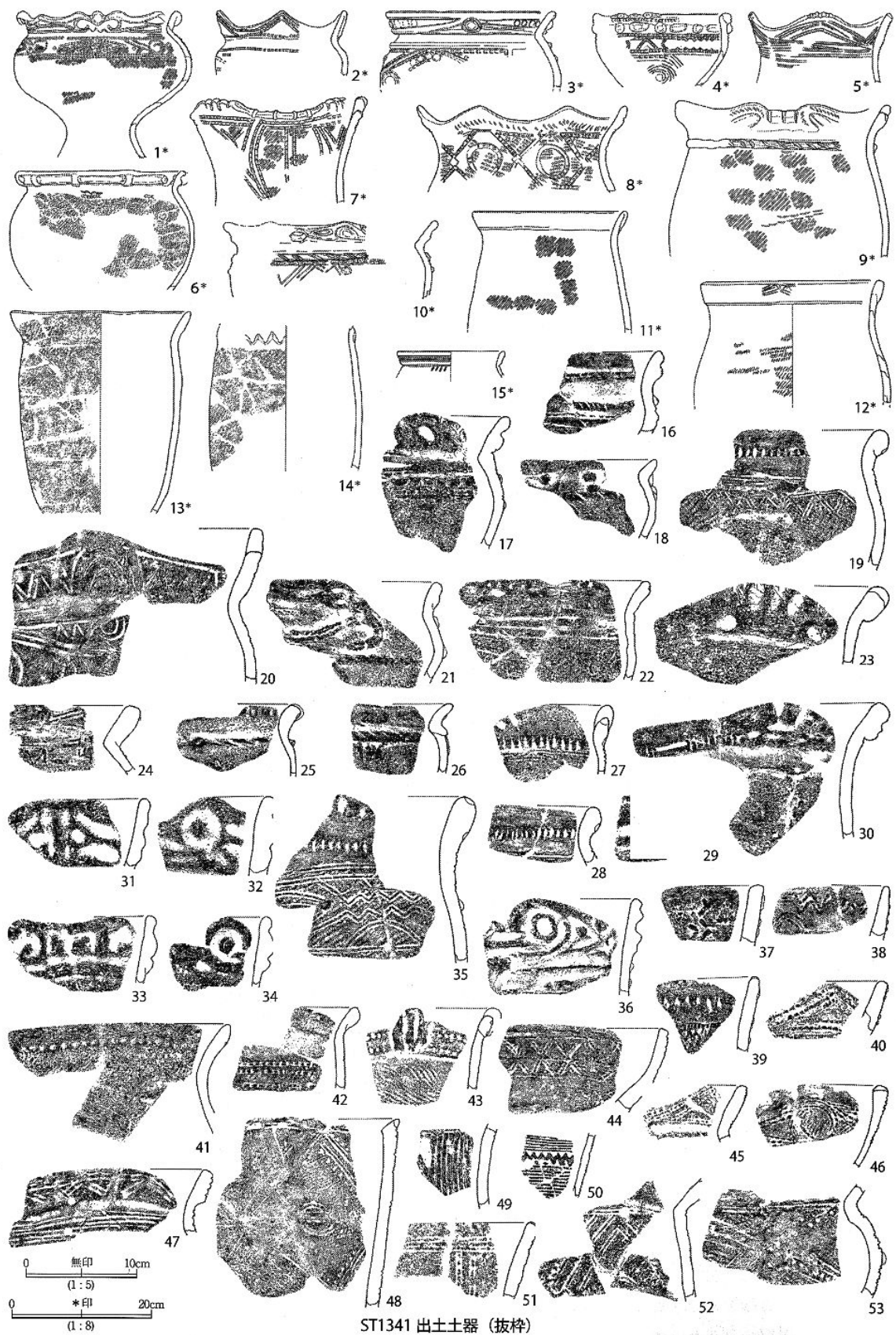


図15 1期調査区S T1341の大木6式2期の土器

長軸線を挟んで2本1対で6対が等間隔に配列され、主軸は集落の中心を向く。床面は緩やかな凹凸が見られるが堅く締まっており、5基の地床炉が長軸線上に列状に配置される。出土遺物は覆土、床面、柱穴から多数出土したが、詳細な出土位置を跡付けることはできない。

ST1341 から出土した土器は175点報告されているが、図20にはその1/3弱の53点を抜粋した。今村氏は球胴形2点(図15-1・3)と長胴形2点(6・9)を大木6式2期として引用している(今村2006c:10・14図)。球胴形と長胴形共に口縁部の厚みが強く、その文様はあまり発達しない傾向が指摘される。

1~4・10が球胴形に相当する。胴部には結節浮線(1)や結節沈線(2~4)の文様が施されるが、後者の方が文様帯幅がやや広く、渦巻文(1・4)や円環を取り囲む文様(3)が展開する。10の括れ部直下には刻み隆起線が巡らされ、長胴形の可能性もあるが、頸部が強く屈折しており球胴形とした。同様の隆起線は16・25・26にも認められる。

6~9・11~14が長胴形に相当する。胴部が弱く張り出し頸部で括れ、口縁部が外傾した器形で、波状縁(5・7~9)と平縁(6・11~13)が存する。前者は頸部に平行沈線(5)や刻み隆起線(9)、胴部に結節沈線による大振りな文様(7・8)で構成されるのに対し、後者は複合口縁で、山形文(12)が施されたり、下端が三角形に刻まれる(14)以外は文様に乏しい。

50は今村氏が十三菩提式古段階と指摘した破片資料で、大木6式2期との時間的対比の証左に位置づけている(今村2006c:65頁)。また49は半截竹管による縦位の半隆起線文で構成されており、北陸系の土器であろうか。

同住居には大木5b式の破片資料(37~39)も含まれており、時間幅が存すると考えられる。しかし大資料の大半は大木6式2期となっており、東北中部の内陸部の基準的資料に相応の内容となっている。

5 高瀬山遺跡の縄文時代中期の遺構と遺物

(1) 中期初頭の遺構と遺物

中期前葉の遺構と遺物はHO3期地区で出土した。SK356、364から出土した山形盆地では中期で最も古い遺構と土器である。

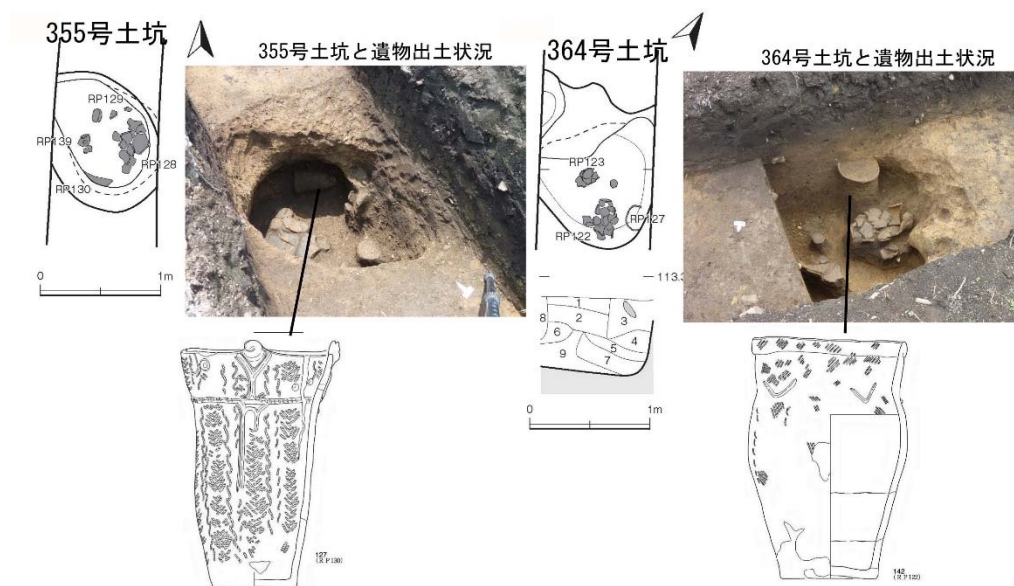


図16 HO3期 中期初頭の355・364号土坑と出土土器

この他、調査区内で大木7 a 式の土器が出土している。

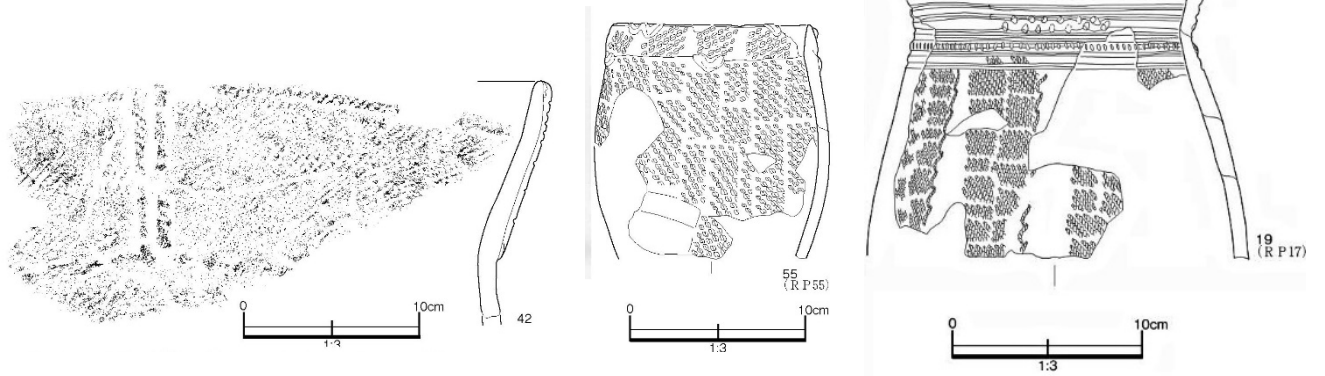


図17 HO3期調査区出土の大木7a式土器

(2) 中期中葉の遺構と遺物

中期中葉ではHO1期調査区で大木8 a 式期の竪穴住居跡が1軒検出された。また、1期調査区では大木8b 式の土坑が検出され、土器が出土した。

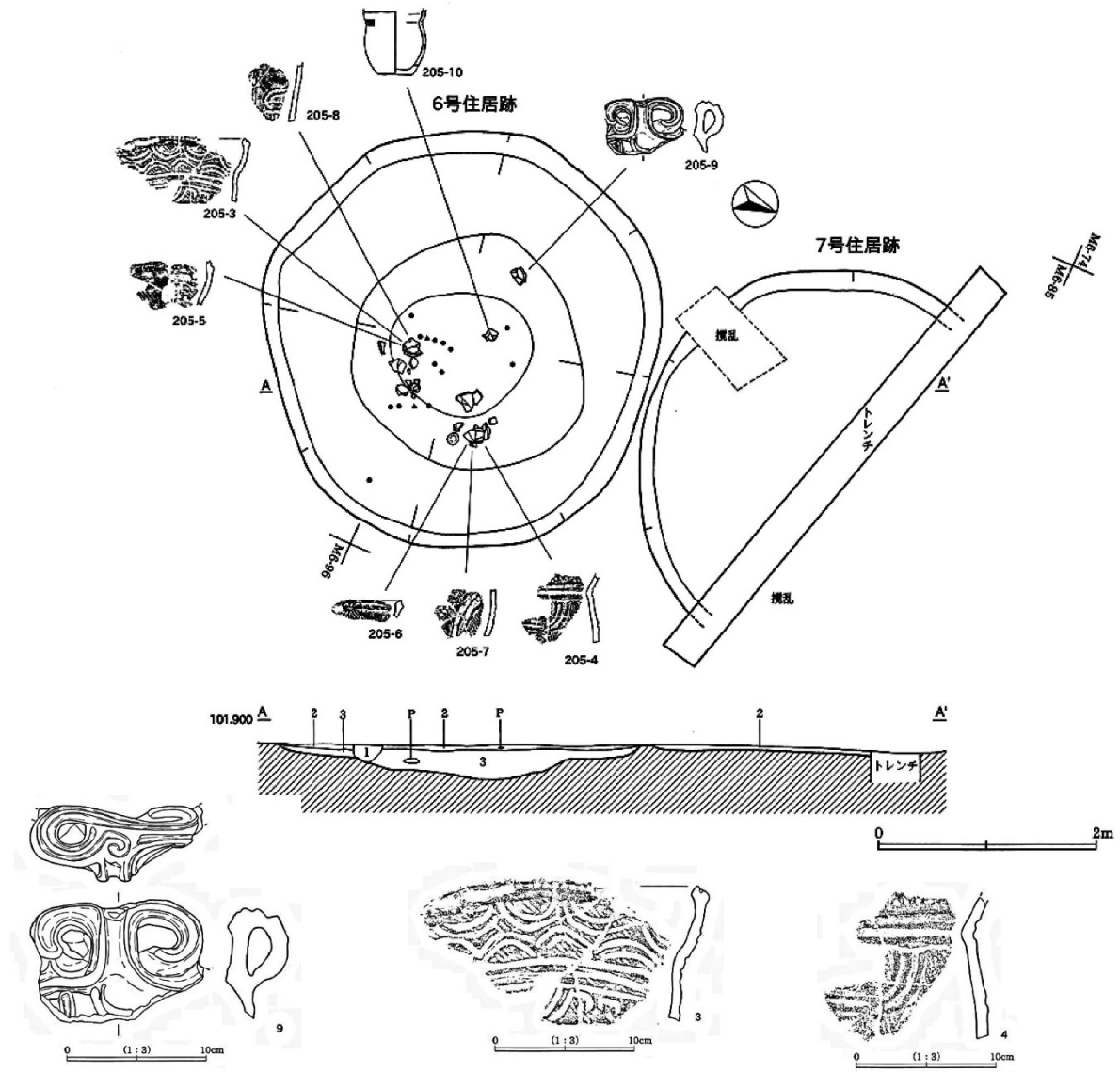


図18 HO1期10区調査区6号住居跡と出土土器

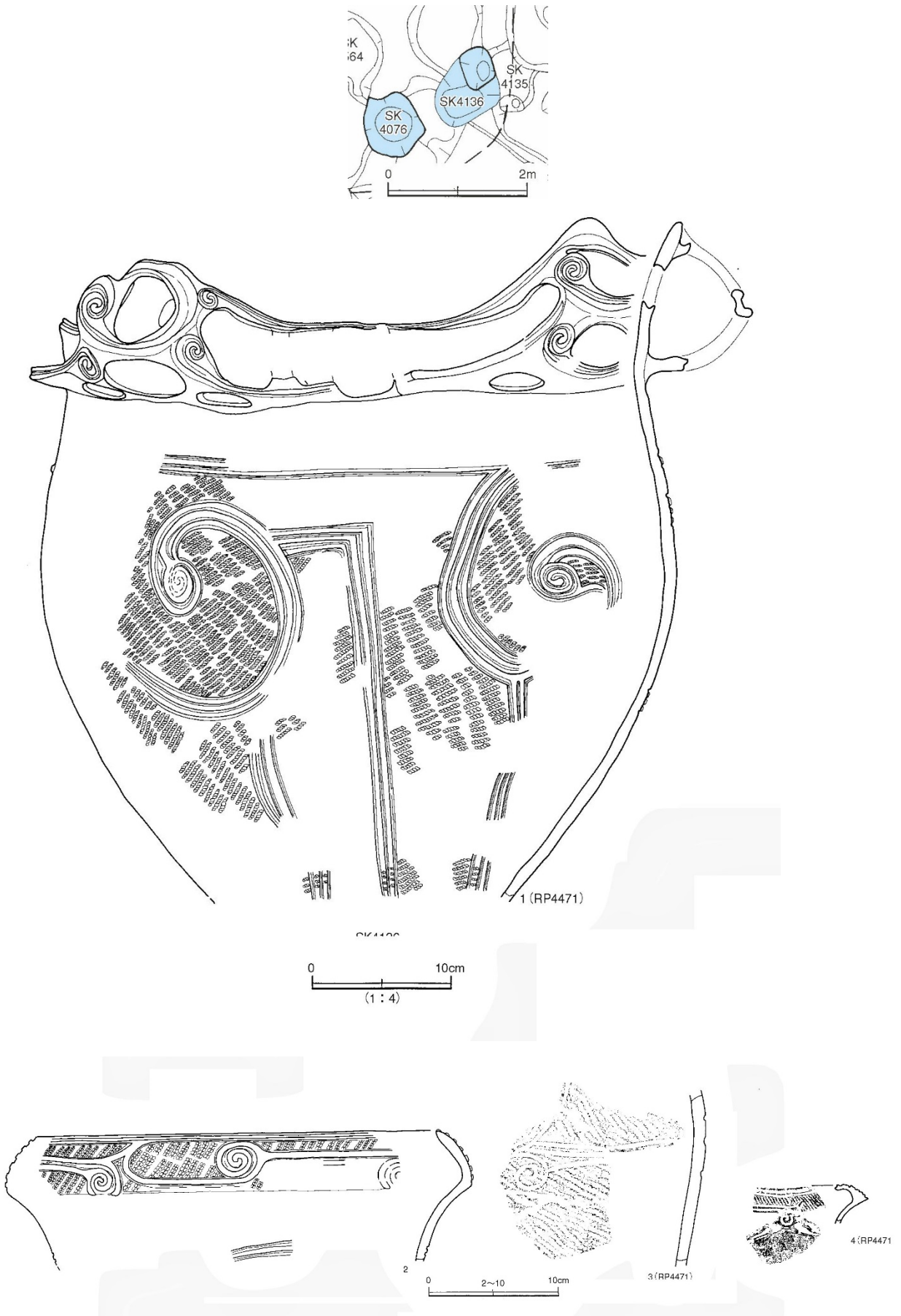


図19 1期調査区SK4136と出土土器

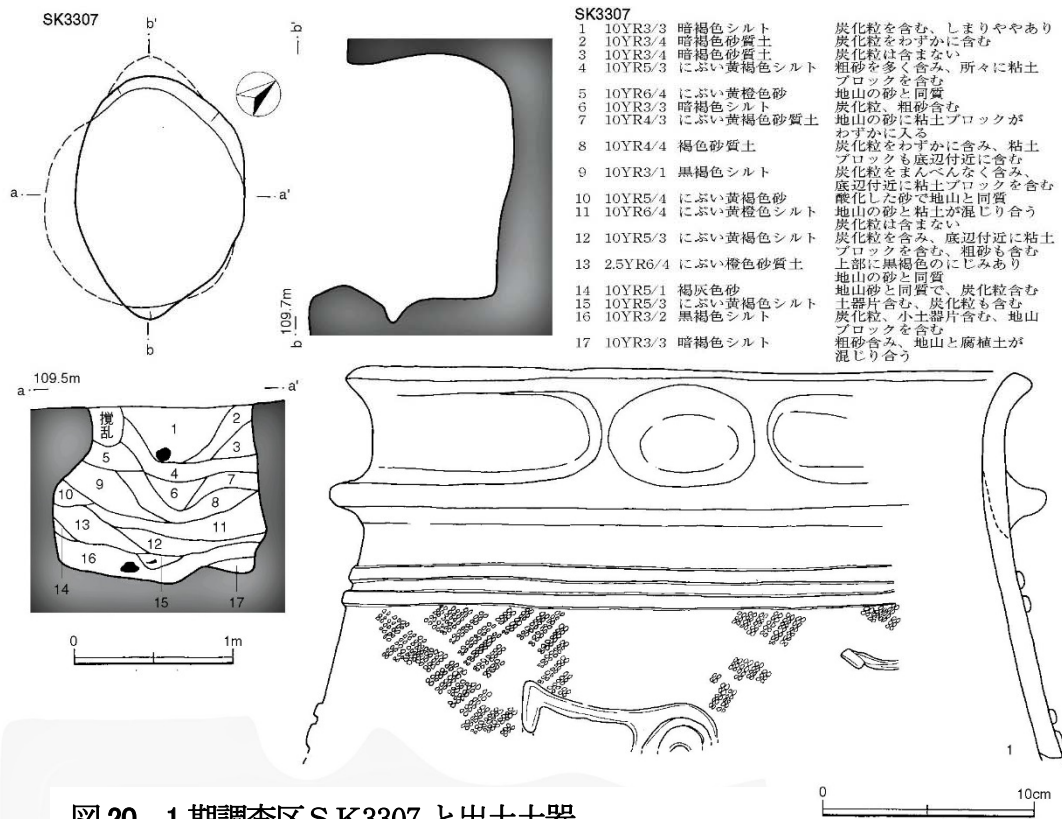


図20 1期調査区SK3307と出土土器

(3) 中期後葉の遺構と遺物

1期調査区の住居跡と出土遺物 1期調査区では中位段丘面の前期の環状集落の西端部と東端部でそれぞれ1軒の住居跡と土坑が検出され、低位段丘にあたる5区調査区で3軒の住居跡と土坑が検出された。

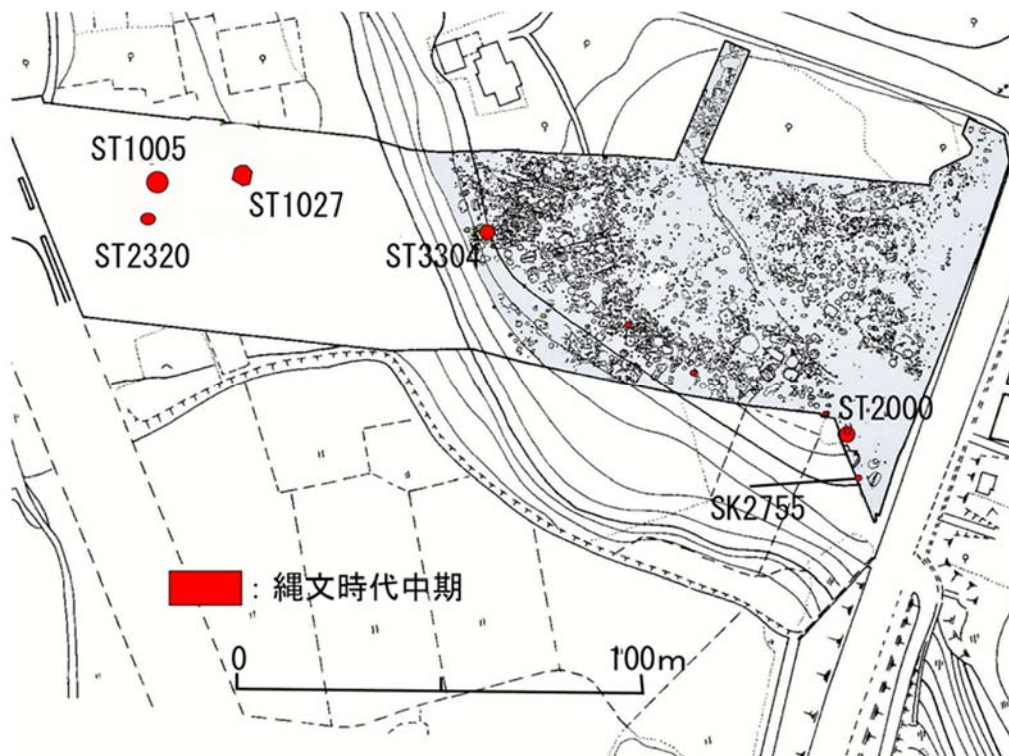


図21 1期調査区の中期後葉の遺構配置

竪穴住居内には複式炉が認められる。ST1005は楕円形プランの6.5~8m×5m、ST1027も楕円形プランの8.3×5.6m、ST2000は一部未検出だが径3.5~4mの円形プラン、ST2320は3.4m、東西3.2mを測る。

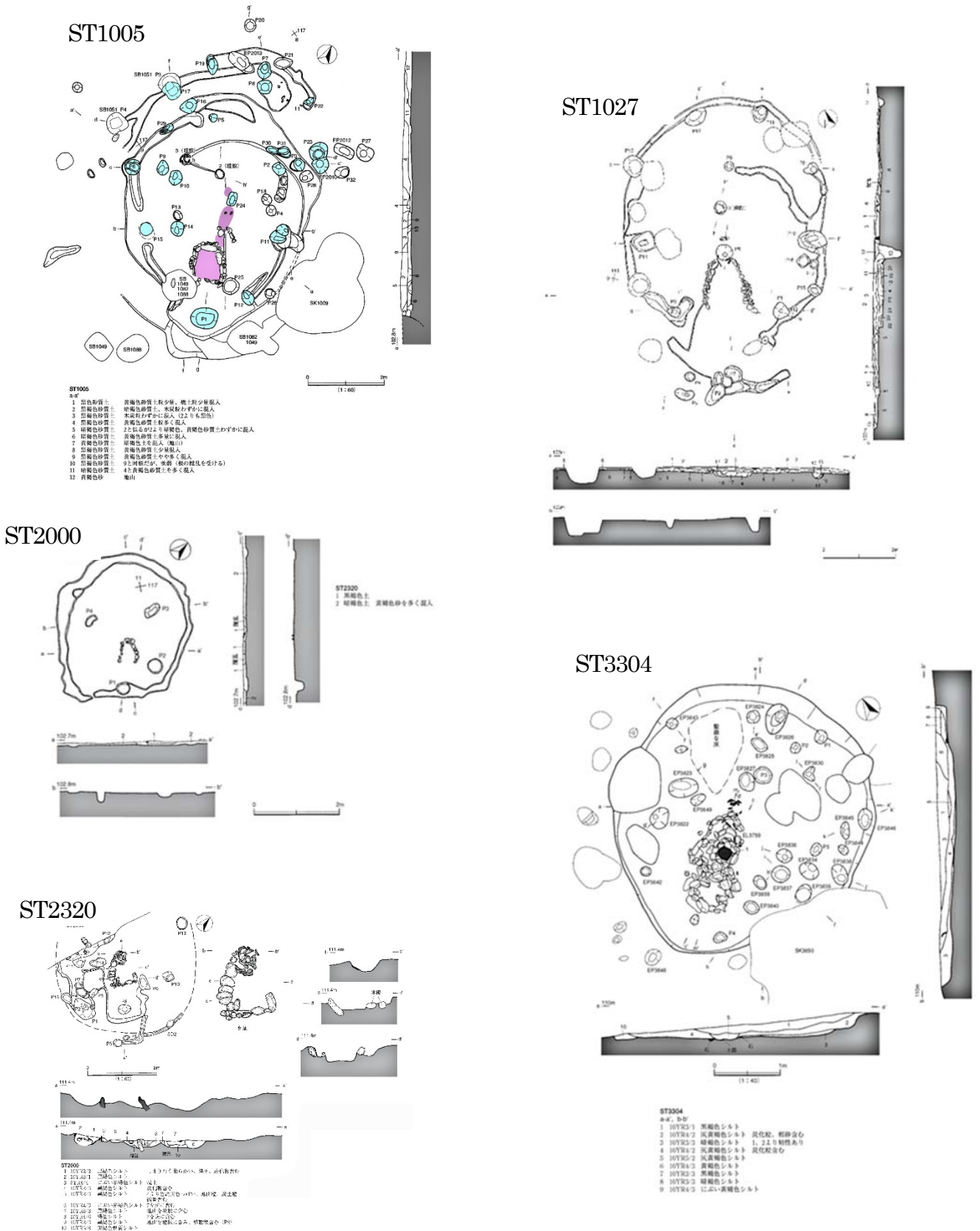


図22 1期調査区の中期中葉の住居跡

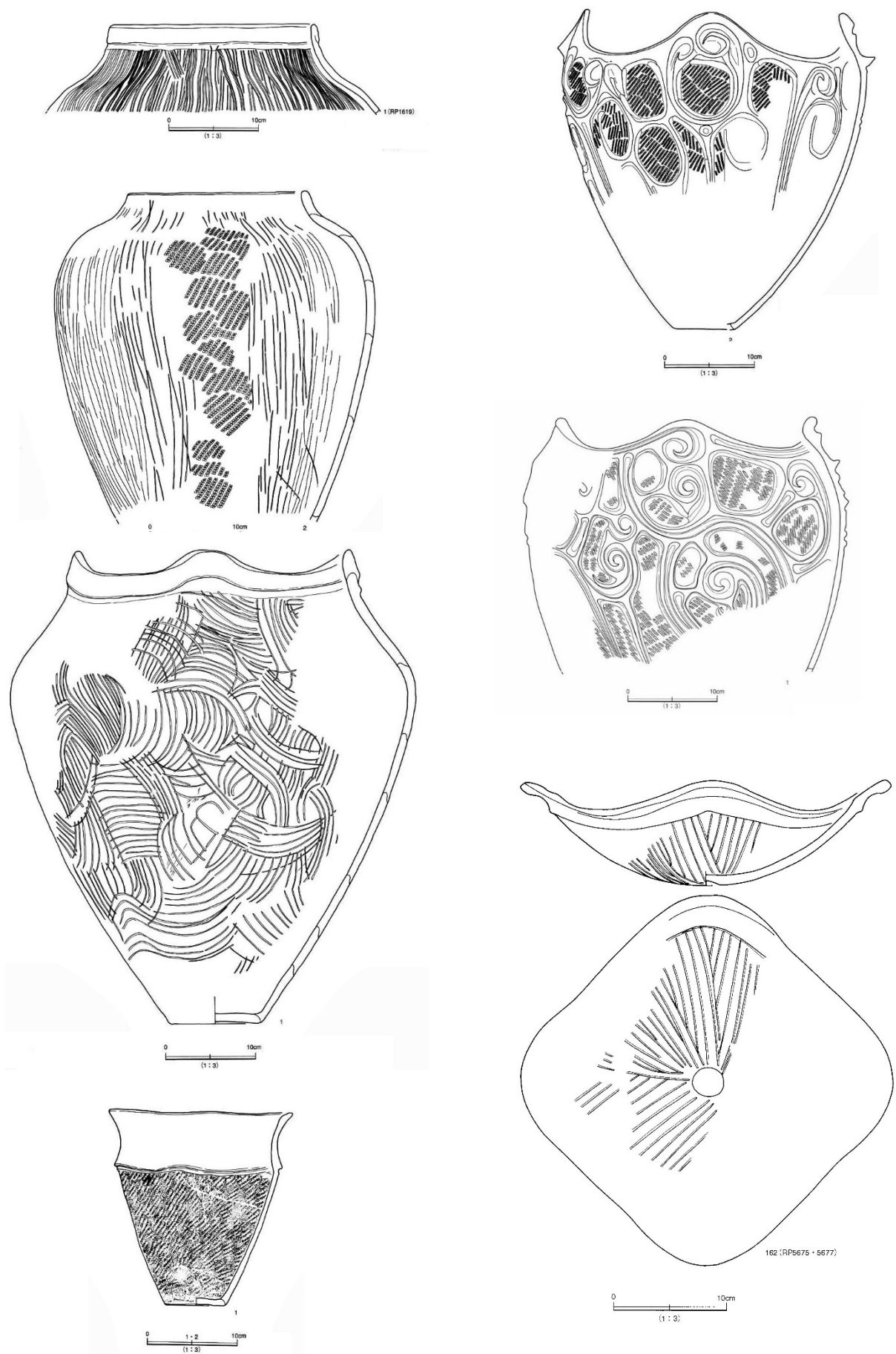


図 23 1 期調査区住居跡他の中期後葉の土器

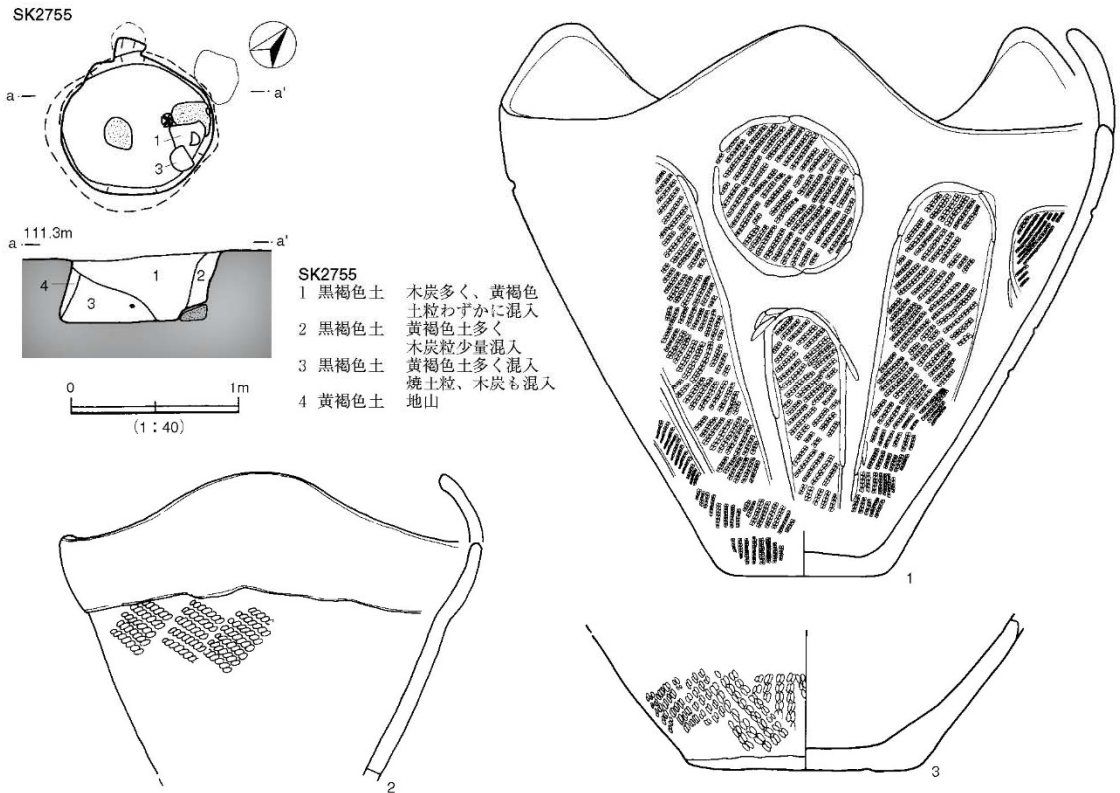


図24 1期調査区SK2755と出土土器

SA調査区の遺構と出土遺物 縄文時代の遺構は、調査区ほぼ中央の南端で中期末の竪穴住居跡、土器埋設遺構、土坑、ピット等が検出された。竪穴住居跡は1棟のみで、周辺には土坑が多数あり、さらに外側の約30m離れた地点からは、土器埋設遺構が検出された。これらの遺構は攪乱を受けており、遺存状態は良くない。出土遺物から大木10式を主体とする時期の集落跡の一部と考えられる。

これらの遺構の中で注目されるのは140号土坑とその出土土器である。この土器は体部下半に隆帯が巡り、その下位にも文様が施される珍しい土器である。

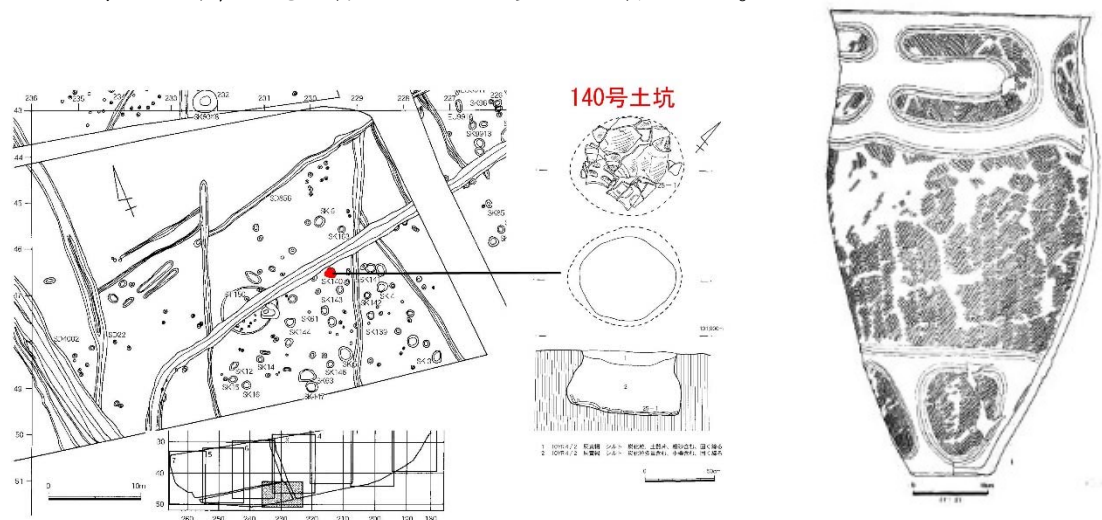


図25 SA地区の140号土坑と土器

HO1 期調査区の住居跡と出土遺物 HO1 期調査区では2・4・5・10 区で中期末葉の遺構・遺物が検出された。また、この時期に連続する後期初頭の遺構・遺物が5・11 区で検出されている(図 26)。調査報告書の中で菅原哲文氏が当該期の遺構・遺物について総括を行っており(菅原 2005)、以下、それを引用する。なお、既述部分と一部重複するがご容赦願いたい。

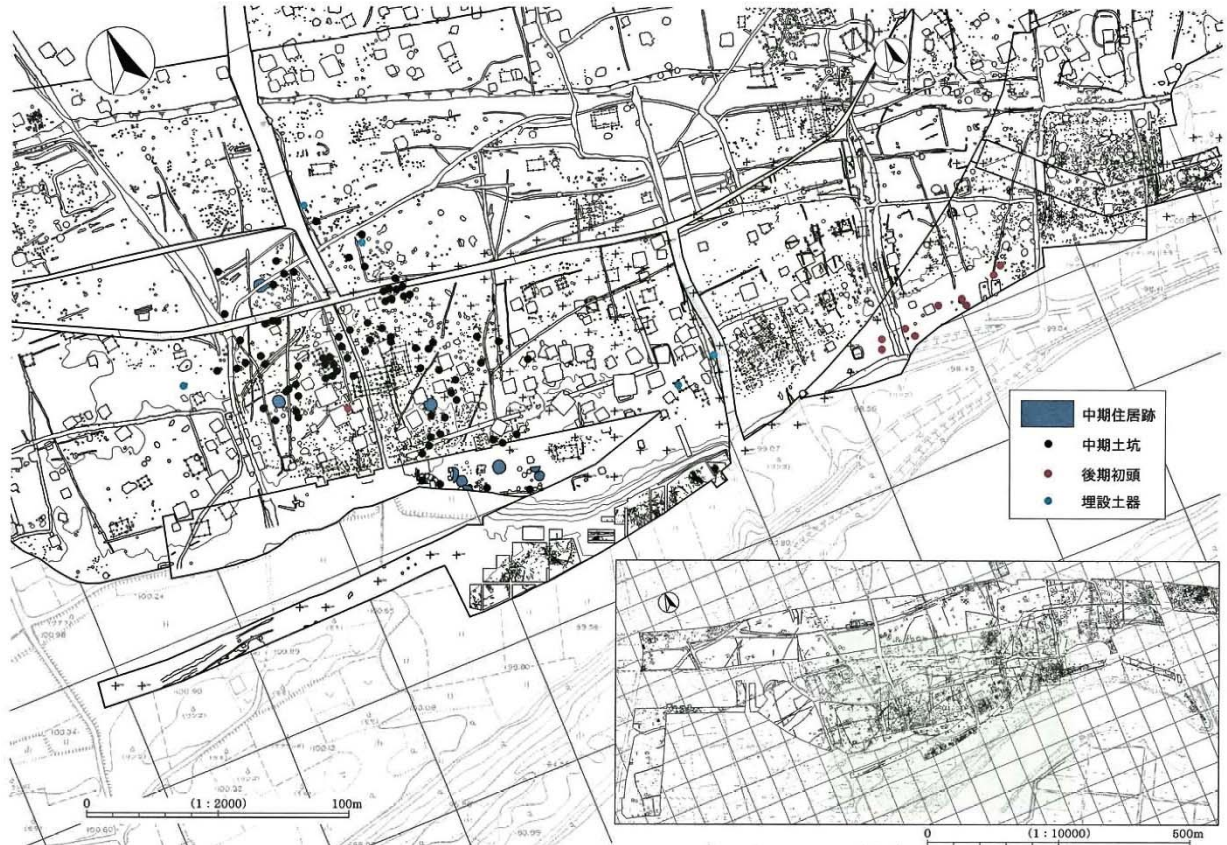


図 26 HO1 期地区の縄文時代中期～後期初頭の遺構の位置図

縄文時代中期の遺構と集落について(図 27)

縄文時代中期中葉の遺構は中期中葉大木 8a 式期の竪穴住居跡 1 棟、中期末葉大木 10 式期の竪穴住居跡が 6 棟、中期後葉(大木 9・10 式期)が 1 棟検出された。その他、大木 10 式期を中心とした土坑が 80 基以上、埋設土器 3 基が検出された。

大木 10 式期の 4 区 1 号住居跡、5 区 1 号住居跡、10 区 1・2・4 号住居跡の 5 棟は、複式炉を備えており、大木 10 式古段階から中段階に相当する。

これらの竪穴住居跡の支柱穴の配置であるが(図 26)、複式炉を中心として、炉の両脇に 1 対と、炉の主軸線上に 1 ヶ所配置する 3 本柱構成のもの(4 区 1 号住居跡、10 区 4 号住居跡)、炉の中軸線と対称に、2 対の支柱穴を配置する 4 本柱構成のもの(5 区 1 号住居跡、10 区 2 号住居跡)が認められる。これらは、複式炉を伴う住居跡に確認される典型的な配置である。

検出された複式炉であるが、いずれも土器埋設部・石組部・前庭部を備え、大木 9 式終末から大木 10 式古・中段階にかけて普遍的に県内に認められる、複式炉最盛期のダルマ形を呈する。定型化した段階にあたる。埋設土器は、概ね 2 ヶ所に備えられる。4 区 1 号住居跡では残存する炉埋設土器は 1 ヶ所であるが、本来は 2 ヶ所であった可能性がある。これらの炉跡の土器埋設部の石囲や石組部の敷石は発達しており、石組部奥壁に大型の礫を設置するものがよく見受けられる。

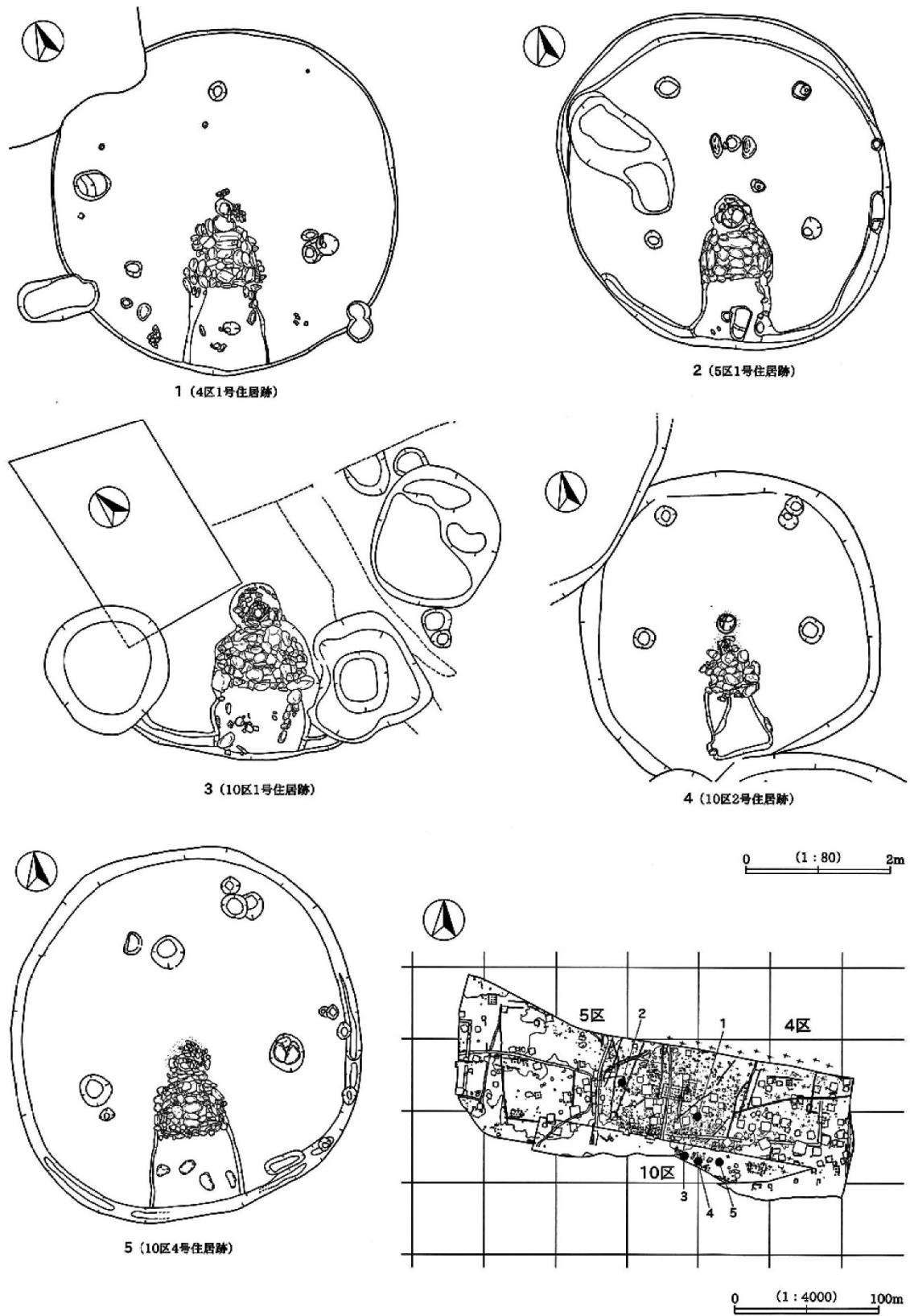


図27 HO1期地区の縄文時代中期末葉の住居跡

当遺跡の縄文時代中期末の集落構成を検討する(図 26)。隣接する高瀬山遺跡 SA 地区では、大木 10 式中段階の竪穴住居跡が 1 棟 (ST150)、埋設土器が 7 基、大木 10 式期を中心とした土坑 73 基が検出されており、両遺跡は同一の集落と考えられるため、合わせて検討する。なお、縄文時代中期の遺構が分布する段丘は、本来は 10 区南側に更に張り出していたが、河川の浸食や崩落により削られ、現況に至ったと考えられ、本来の集落の範囲はより広いと考えられる。また、奈良・平安時代の遺構が重複して分布しており、これらの住居跡により破壊され失われた遺構もあると考えられる。

大木 10 式期は、両遺跡で 7 棟の竪穴住居跡が検出されている。これらの住居跡群は、全体として半円状に分布する。また、住居跡群の分布域に重複しつつ、内側に土坑群が分布する。段丘縁辺部の 10 区は、住居跡の分布密度が高い。埋設土器の分布であるが、集落の北端にあたる高瀬山遺跡 SA 地区では住居跡分布域の内側に土坑群と重複して分布する。また HO 地区では、集落から外れた 4 区東端に 2 基が、5 区の遺構分布域から西側に外れた地点に 1 基が分布する。

また、大木 10 式期の住居跡は複式炉の埋設土器や出土土器により、構築に時期差がある。10 区 4 号住居跡は大木 10 式古段階、4 区 1 号住居跡は大木 10 式古段階もしくは中段階、5 区 1 号住居跡、10 区 1 号・2 号住居跡、高瀬山遺跡 SA 地区 ST150 は大木 10 式中段階に相当する。土坑群は、ほとんどが大木 10 式中段階に帰属すると考えられる。大木 10 式新段階では、住居跡は認められない。少数ながら 5 区 25 号土坑などから遺物の出土が認められる。後期初頭も、この集落域に分布していない。わずかに、5 区 12 号土坑などから当期の遺物が出土する。中期最終末から後期にかけては、11 区に集落の主体が移動する と考えられる。

縄文時代 中期後葉の高瀬山遺跡 HO 地区の周辺遺跡について述べておく。周囲には最上川の河岸段丘沿いに同時期の遺跡が分布し、調査報告されている事例が多い。高瀬山遺跡 1 期では、HO 地区の東へ約 600m の地点に、中期後葉を中心とした竪穴住居跡が 7 棟検出された【齋藤・須賀井ほか 2004】。大木 8b 式期が 1 棟、大木 9 式期が 4 棟、大木 10 式期が 1 棟、中期後葉が 1 棟で、大木 9 式が中心であり、HO 地区よりも先行する時期である。

寒河江市うぐいす沢遺跡【佐藤・渋谷 1981】は、大木 8b・9・10 式期にかけての集落跡が調査された。最上川の対岸、HO 地区から西へ 2km の位置にある。第 1 次調査で 8 棟の竪穴住居跡と、129 基の土坑が検出されている。この内、大木 10 式期の住居跡は 7 棟で、重複して検出された。

寒河江市柴橋遺跡は、中期の 10 棟の竪穴住居跡が検出され、大木 10 式期の住居跡は 9 棟を占める。その他、土坑が約 60 基検出された。HO 地区から西北西へ約 1.8km の位置にある。調査が行われたのは集落の一部であるが、半円状もしくは環状の構成をとると推定されている。

その他、寒河江市向原遺跡でも、大木 10 式期の複式炉が調査されている【安彦・東海林 1972】。このように、高瀬山遺跡 HO 地区の縄文時代中期の集落は、中葉大木 8a 式期や末葉大木 10 式期に 短期間に断続的に営まれた集落であり、4・5 棟程度の住居で構成されていたと推測される。配置は、中期に典型的に認められる、環状に準じた半円形の構成をとり、外側に居住域、内側に貯蔵域、その中の限定されたエリアに埋設土器などの墓域を設ける構成をとると考えられる。また、高瀬山遺跡周辺の最上川の河岸段丘沿いには、大木 9・10 式期の集落遺跡が多く分布する。高瀬山遺跡 HO 地区は、その中の派生的な小規模集落としての性格が想定される。

縄文時代中期～後期初頭の土器について(図 28～31)

縄文時代中期の遺構から出土した、中期後半の土器群(第 2 群土器 1 類・2 類)と、後期初頭の土器群(第 3 群土器)について、時期別に内容を述べたい。

中期の第 1 群土器 1 類は、10 区 6 号住居跡から出土している(図 30-7～14)。キャリパー形の深鉢で(7～9)、浅鉢(11)も認められる。無調整の隆帯や、あまり調整が施されない隆帯に

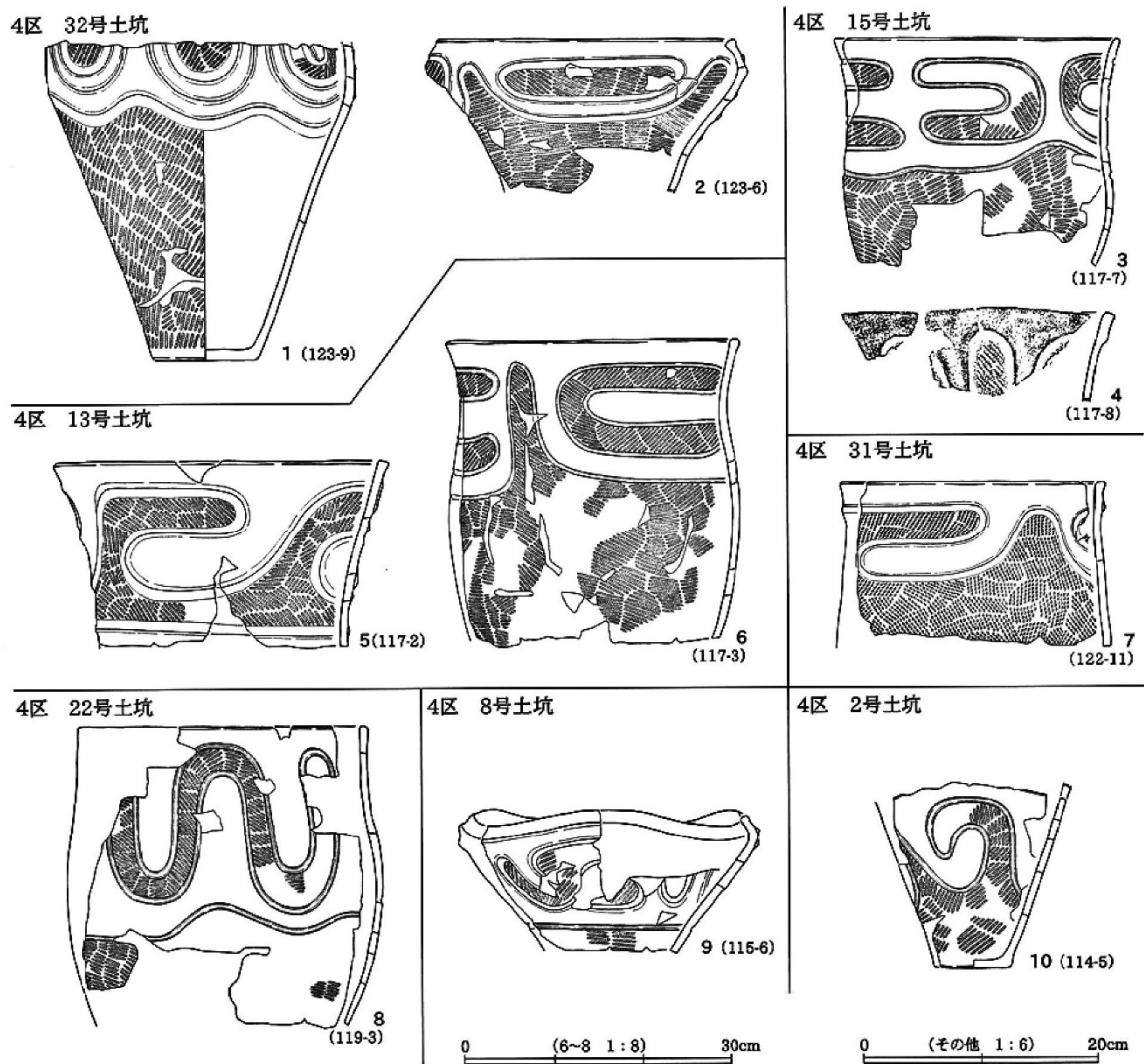


図 28 4区遺構内出土の中期末葉の土器

よる、曲折文 (7・12)、S字状の突起 (9)、沈線による連弧文 (8) が認められる口唇部・口縁部には、竹管などによる角押文が施される。これらは大木 8a 式土器に相当する。

中期の遺構出土土器の中心を占めるのは、第Ⅱ群土器 2 類である (図 28・29・図 30-1~6・15)。大木 10 式土器であり、古・中・新段階が確認されるが、大部分が中段階に位置付けられる。大木 10 式古段階に相当するのは、主なものとして、4 区 15 号土坑 (図 28-3・4)、13 号土坑 (図 28-6)、22 号土坑 (図 28-8) 出土土器があげられる。沈線で区画され内部に縄文が充填された、C・e・U 字状の文様が体部上半に施される。体部中位に区画線が引かれ、下半は縄文が施文される。

大木 10 式中段階に相当するのは、4 区 32 号土坑 (図 28-1・2)、13 号土坑 (図 28-5)、31 号土坑 (図 28-7)、8 号土坑 (図 28-9)・2 号土坑 (図 28-10)、5 区 1 号住居跡 (図 29-1~10)、31 号土坑 (図 29-13)、4 号土坑 (図 29-14)、28 号土坑 (図 29-15)、24 号土坑 (図 29-16)、10 区 1 号住居跡 (図 30-1~6)、1 号土坑 (図 30-15) などの出土土器である。特に、5 区 1 号住居跡出土土器は、中段階のセット関係、文様構成が把握できる好資料である。ここで、当遺跡の大木 10 式中段階の内容についてまとめておく。器種は深鉢・浅鉢・注口土器・台付鉢・器台

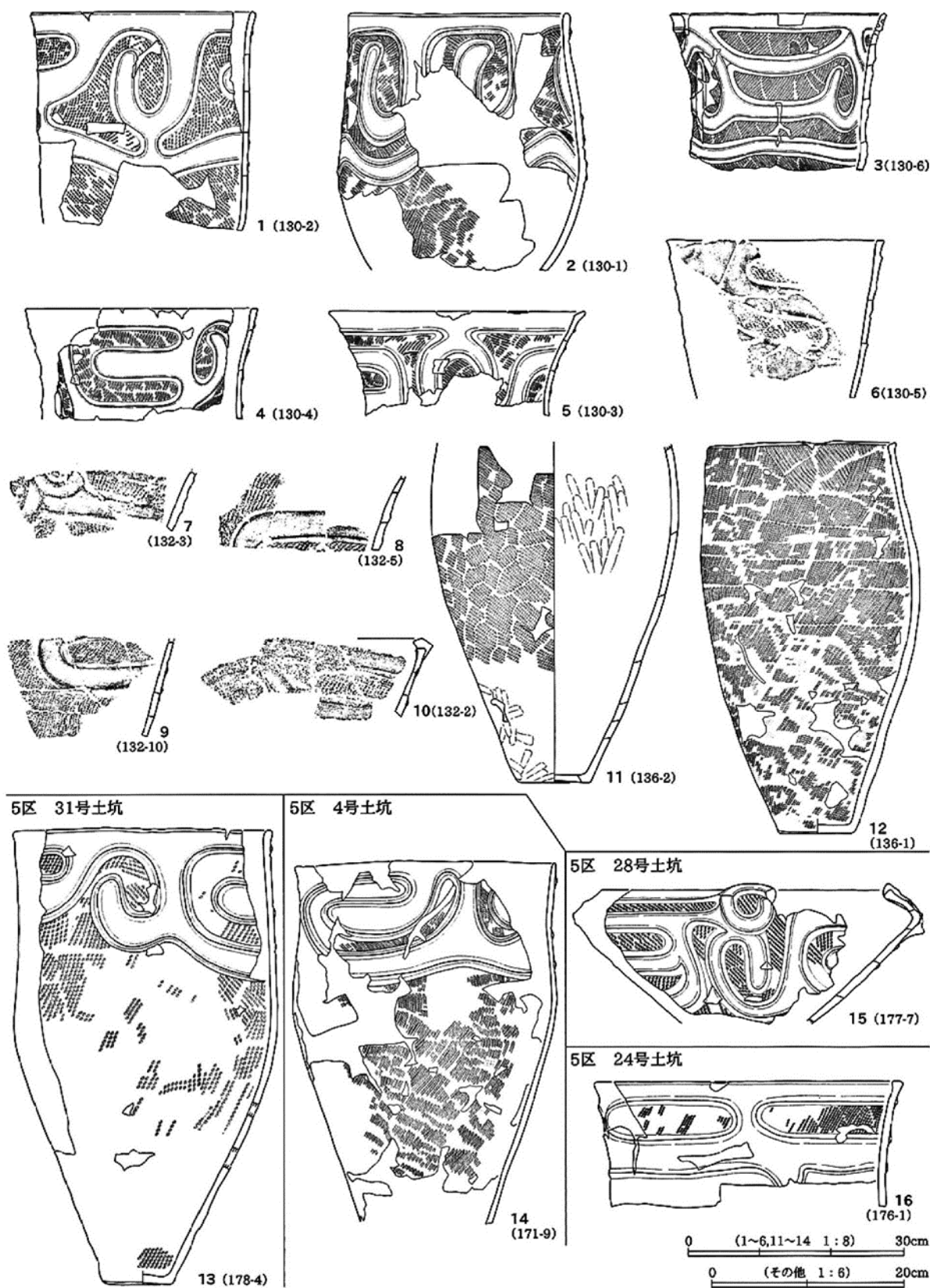
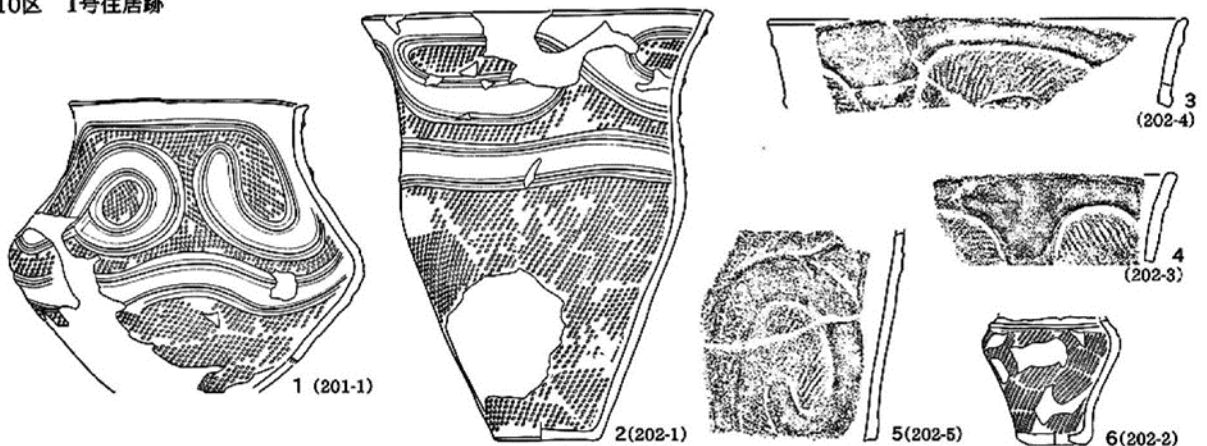


図29 5区出土遺構内出土の中期末葉の土器

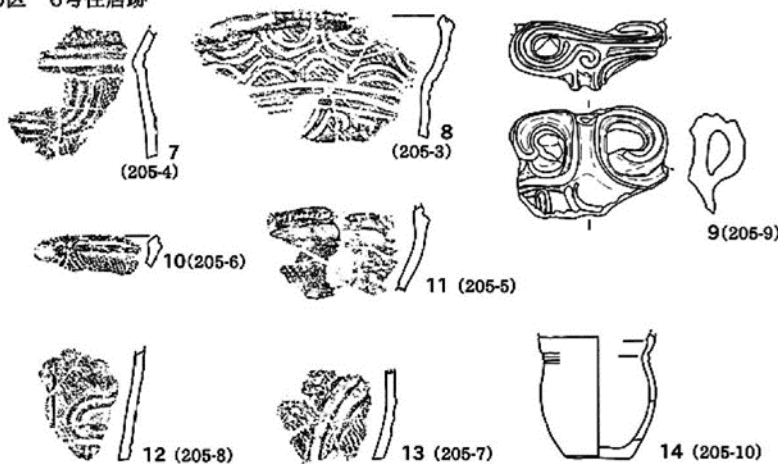
で構成される。深鉢は、口縁部が強く内湾し、底部から体部にかけて強く開く A 類 (図 28-2・9)、口縁部が外反し、体部に緩やかな膨らみをもつ B 類 (図 28-3・6 ほか)、底部から体部にかけて緩やかに立ち上がる C 類 (図 28-6) がある。浅鉢は、口縁部が強く内湾する A 類 (図 28-15)、緩やかに内湾しながら口縁部が立ち上がる B 類、底部から口縁にかけて直線的に外傾して開く C 類がある。深鉢は B 類が中心で、A・C 類の頻度は少ない。浅鉢は A 類が中心である。

文様は、稜状の隆帯に沈線を沿わせる隆沈線の手法で描かれる。種類は、横位楕円文(図 28-2)、波濤文 (図 28-5・7・10、図 29-1・2)、退化した横 S 字状文 (図 29-6)、C 字文 (図 29-14)、波濤文と他の文様要素を組み合わせるものなどがある。特に、波濤文についてはバリエーションが認められる。連続する波濤文は、体部中位の区画線を兼ねるもの (図 28-7・10)、体部中位に隆沈線による無文の区画帯が設けられるもの (図 28-5、図 29-2)、波濤文がそれぞれ独立するもの (図 29-1)、波濤文が退化し、無文部が強調され入組状の構成をとるもの (図 29-3・7) などがある。大木 10 式中段階の県内遺跡の主な事例として、高瀬山遺跡 SA 地区 [伊藤 2001]、高島町宮下遺跡 ST2 出土土器 [佐藤・國井 1997]、山形西高敷地内遺跡第 1・2 次調査 [佐藤庄一 1979]、同第 4 次調査 [佐藤庄一ほか 1992] 複式炉埋設土器などがある。文様表現技法やセット関係、意匠は概ね共通している。当遺跡での大木 10 式新段階に相当する資料は少ない。

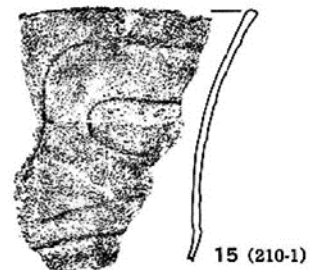
10区 1号住居跡



10区 6号住居跡



10区 1号土坑

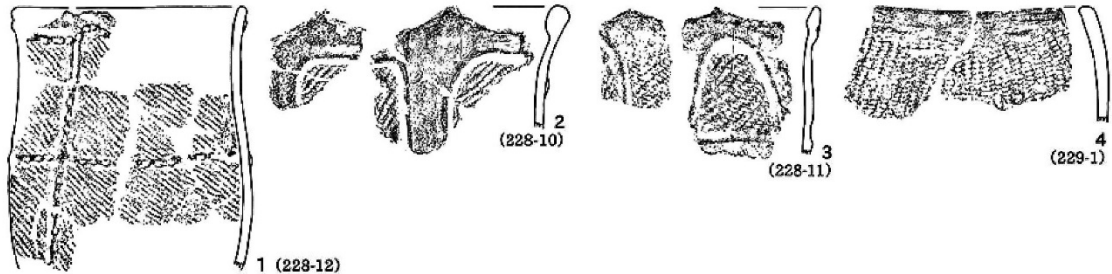


0 (1:6) 20cm

図 30 10 区遺構内出土の縄文時代中期の土器

次に、後期初頭の土器について述べる。当期の遺構は、大木 10 式期と比較すれば、遺構数は少なく、竪穴住居跡も検出されていない。主なものとして、5 区 12 号土坑、11 区 4 号・6 号土坑 (図 30) から土器がまとまって出土している。

11区 4号土坑



11区 6号土坑

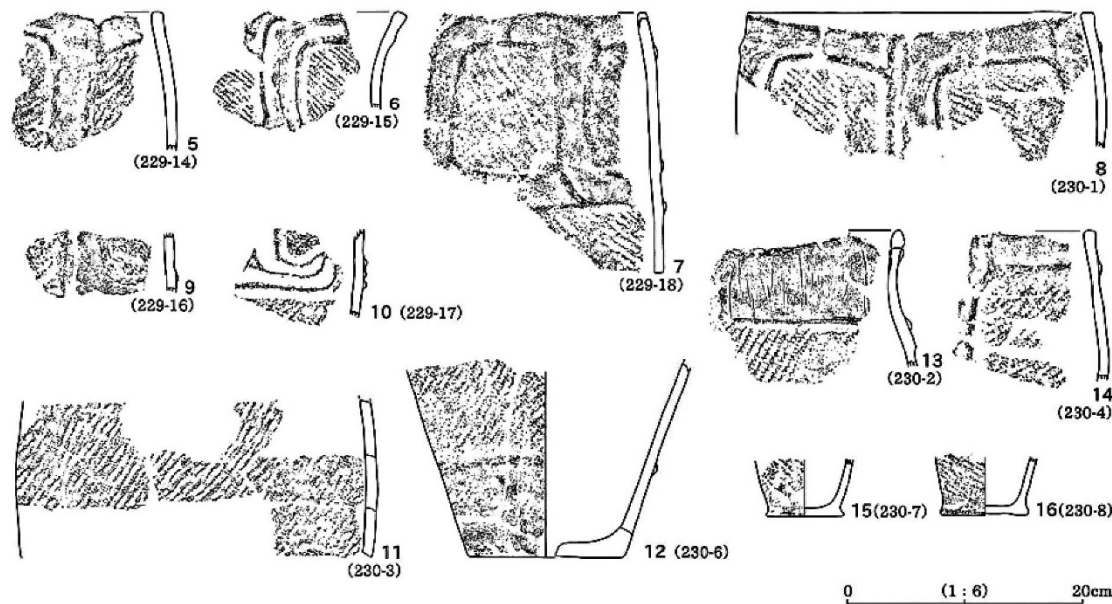


図 31 11 区遺構内出土の後期初頭の土器

11 区 6 号土坑出土土器は、深鉢 B 類 (図 31-6・13)・C 類 (図 31-5・7・8) で構成され、器高 10cm と推定される小形の土器 (図 31-15・16) も伴う。文様は、隆線や隆沈線による直角に近い方形区画文 (図 30-7・8)、隆帯区画による口縁部の無文帯 (図 31-13)、底部から体部下半を無文とし、一条の隆帯で体部を区画するものなどが認められる。口縁部には、図 31-7・13 など、三角形の小突起が付く。これらは、大木 10 式新段階に類似した文様構成を示すが、直角に近い方形区画文が中心であること、隆帯の貼り付けや隆沈線文の調整 無文部の調整が粗雑であることより、大木 10 式に後続 し後期初頭に位置付けられる可能性がある土器と捉えておく。11 区 4 号土坑出土土器は 深鉢の器形や、隆帯や隆沈線による方形区画文を中心とした文様は、6 号土坑と同じであるが、図 31-1 は、縄文地の上に隆帯を方形区画状に貼り付け、隆帯上に竹管による連続した刺突文が施される。類似する文様の土器は 5 区 12 号土坑にも認められ、体部に沈線による文様も認められる。図 31-3 は、隆帯に沿って刺突列を施し、口縁部には三角形の突起が付され、内面は隆帯を貼り付け肥厚させる。

その他、11 区 1 号・5 号・9 号土坑からは、竹管状工具や指頭によって、体部に横方向に連続した刺突列を重層して施す、三十稻場式土器に認められる手法の文様 が施される土器も出土し

ている。

HO3期地区でも後期初頭の土坑（SK329）が検出され、中から土器が出土している。また、遺構外となるが、7トレンチと10トレンチで合わせて南境1式の3個体の土器が出土している。

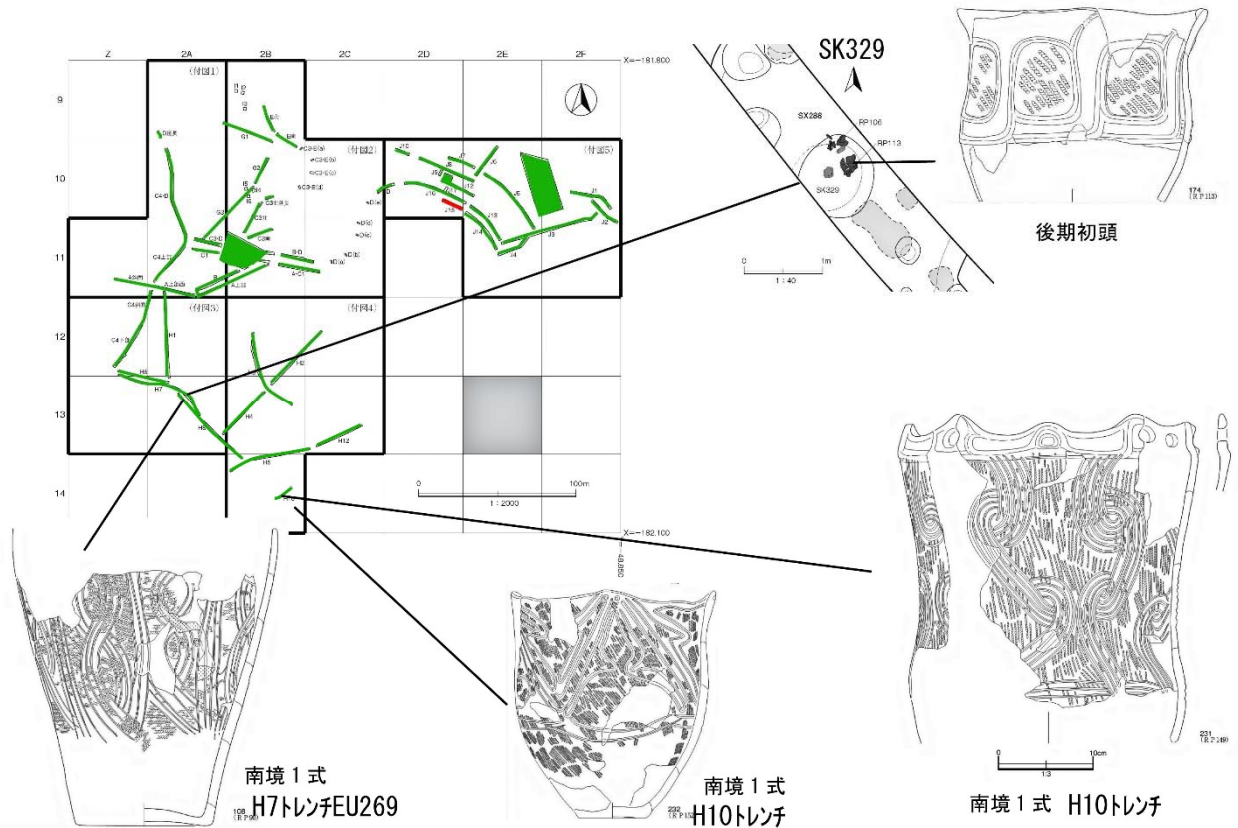


図 32 HO3期調査区配置後期初頭～前葉の遺構と樋物

6 高瀬山遺跡の縄文時代後期中葉から晩期の遺構と遺物

高瀬山遺跡ではHO1期調査区で縄文時代後期中葉から晩期の遺構と遺物が検出されている。その報告書の中で後期中葉から晩期中葉までの遺構と遺物に関し、調査者の小林圭一氏が総括を行っている。また、晩期後葉については佐藤祐輔氏がまとめている。以下、その記述を引用する。

小林圭一氏による後期中葉から晩期中葉の総括

高瀬山遺跡HO地区では、縄文時代後期中葉～晩期後葉の遺構・遺物が、1・2・4・11～13区の6地点で確認された。後期中葉宝ヶ峯式では1区で竪穴住居跡6棟、埋設土器1基、土坑5基、2区で水場遺構2基、11区で竪穴住居跡4棟、配石遺構2基、土坑21基、12区で竪穴住居跡5棟、埋設土器1基、土坑21基が調査され、11区には窪地に捨て場跡が形成されていた。晩期前葉～中葉では、2区で水場遺構2基が検出され、その他の地区では4・11区で少量の土器が出土した。晩期後葉では、2区で水場遺構1基が検出され、土器が多く出土したが、その他の地区では11区で土坑3基、13区で土坑1基が検出され、11区で少量の土器が出土したのみである。

本節では、「後期中葉の住居跡」、「後・晩期の水場遺構」、「遺構内出土の後期中葉の土器」、「2区出土の後・晩期の土器」、「後・晩期の土偶・岩版（これは略）」の5項目について総括し、縄

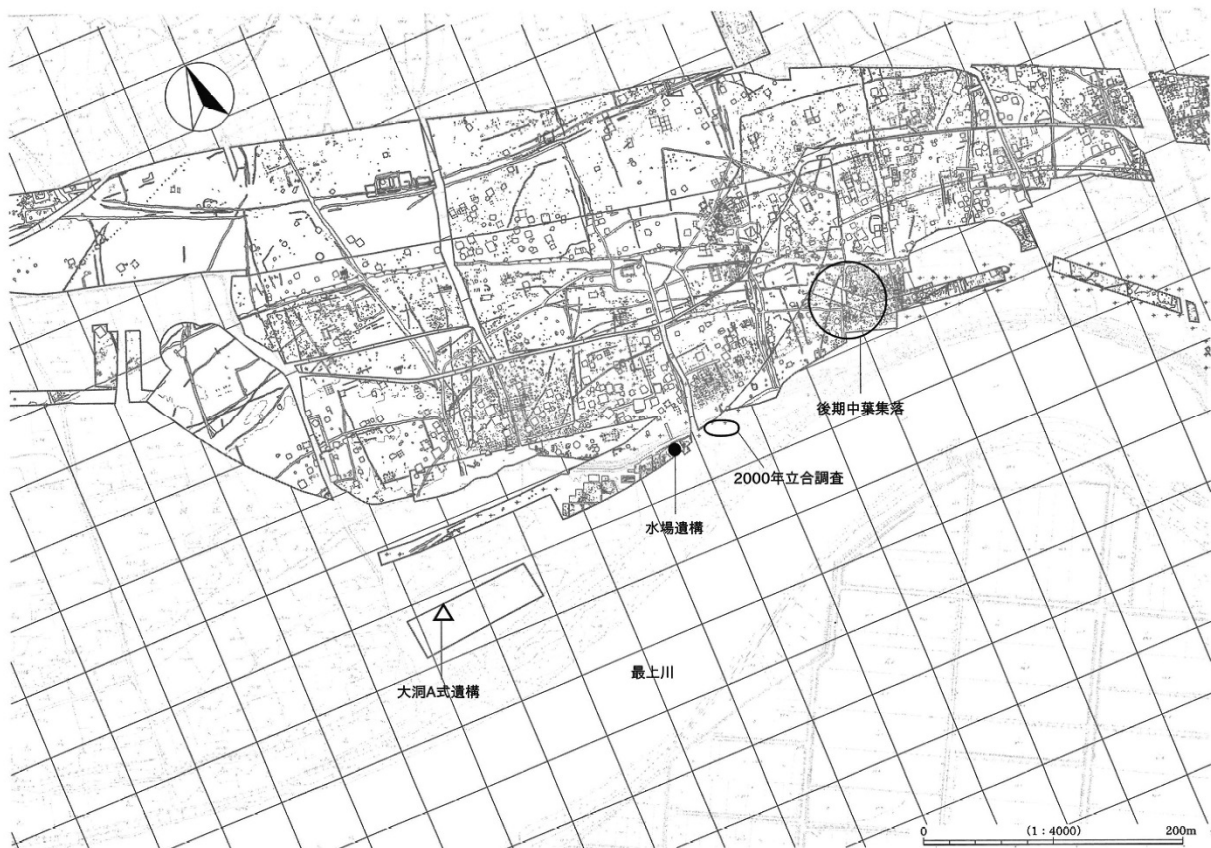


図 33 後晩期の調査地区

文時代晩期後葉については独立させ次節で取り上げている。

1) 縄文時代後期中葉の住居跡 (図 35)

高瀬山遺跡HO地区では、縄文時代後期中葉の住居跡が、1区で6棟、11区で4棟、12区で5棟の、合計15棟が検出されている。しかし1区ではトレンチ状の調査区の制約と調査者側の不手際から、十分な情報を得ることができず、住居跡としての検討が可能なのは11・12区のみで、図35に示した7棟に過ぎない。いずれも宝ヶ峯2式の住居跡に位置付けられる。

縄文時代後期中葉の集落は、高瀬山遺跡の南端の段丘縁辺近くの弱い窪地に形成されていた(図34)。いずれも11区の縄文時代後期遺物包含層とその周囲に限られており、周囲には該期の土坑も多数掘り込まれていた。集落が環状又は弧状を呈していたかどうかは判然としないが、土坑群の外周に住居跡が構築されていた様相を窺うことができる。縄文時代後期中葉の土坑には、底面近くに灰白色の凝灰岩を配置した例が多数認められた(12区10号土坑ほか)。フラスコ状土坑にも見られ、炭化物・焼土粒を多く含む例(12区14号土坑ほか)も見受けられた。土坑には貯蔵穴以外の用途も考えられ、墓壇に転用されたり、儀礼・祭祀の営為により、土坑内に凝灰岩が配置された可能性も否めないであろう。

竪穴住居跡として良好な例は、11区3(3B)号住居跡(図35-4)、12区1号住居跡(図35-3)である。前者は同一地点に重複して住居跡が営まれており、特に下位の3B号住居跡が良好な状況で検出された。両例とも4m前後の円形で、掘り方は浅く、壁溝は持たない。住居跡の中央に炉が構築され、支柱穴は不明瞭で、壁に沿った柱穴の配列が認められる。

山形県内の宝ヶ峯式期の住居跡の検出例は、極めて少ないのが実情である。代表的な遺跡としては、最上町かつば遺跡7棟[水戸部2003]、村山市川口遺跡13棟[阿部ほか1990]、高畠



図 34 後期の住居分布

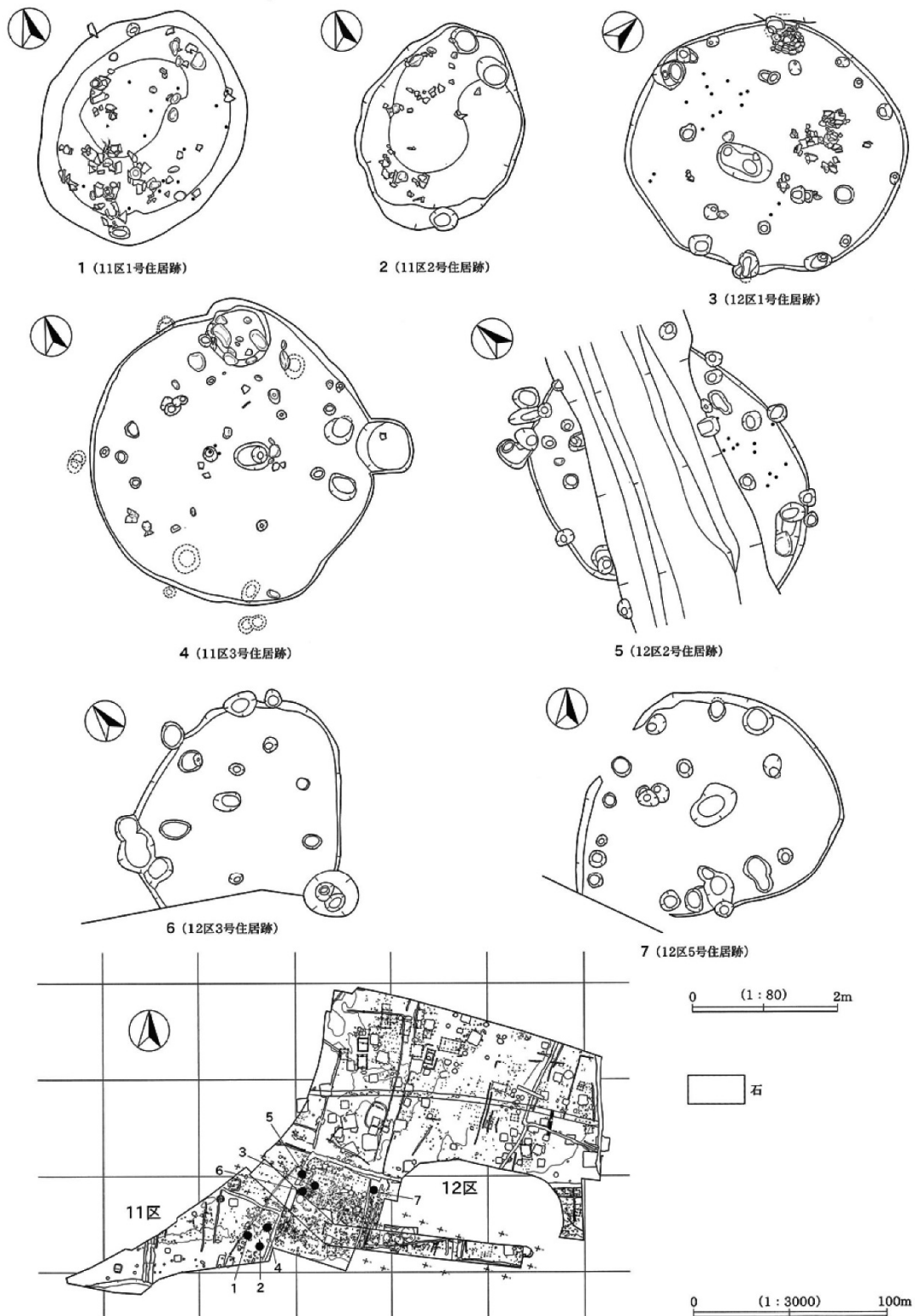


図 35 後期中葉の住居跡

町石ヶ森遺跡4棟[井田 1982]、高島町金谷B遺跡1棟 [井田・水口 1998] が存しており、その他に最上町水上遺跡、同町宮ノ下遺跡でも検出されている。

かっぱ遺跡で検出された住居跡は、径4～6mの円形で、壁柱穴が巡らされており、出入口施設を具備したり壁高が50cmを超える例(ST4)も存している。川口遺跡は径6m以上の円形で、殆どは壁面が認められず、壁柱穴が囲繞される。住居跡内に主柱穴を有し、出入口施設を具備する住居跡も存している(ST1～3)。石ヶ森遺跡では全容が窺える住居跡はなく、いずれも部分的な検出であるが、一辺4m程度の隅丸方形で、壁柱穴が巡らされ、地床炉又は石組炉が構築されている(2・26号住居跡)。金谷B遺跡では、南北4.6m、東西4.8mの方形の竪穴住居跡(1号住居跡)が検出されている。壁溝が巡らされ、その底面に壁柱穴が掘り込まれており、柱穴は住居の中心に向かう形で内傾していた。北側に出入口施設を具備し、住居跡の中央には地床炉が構築されていた。

県内の類例を見てると、北半の最上・村山地方と南部の置賜地方とでは住居跡の形態に差異が存している。米沢盆地に位置する石ヶ森遺跡や金谷B遺跡では、形状が隅丸方形や方形であるのに対し、山形盆地以北では円形基調となっている。米沢盆地は最上川の上流域に位置、東北中部と南部の接触地帯に相当する。そのため東北南部との関連が考えられる福島県磐梯町角間遺跡では円形プランが主体となる[山岸ほか1990]。また福島市弓手原A遺跡では円形基調と共に方形基調の住居跡が併存している[山内ほか1998]。石ヶ森遺跡の事例は、奥羽脊梁山脈を挟んだ弓手原A遺跡と近似した在り方であることが指摘されよう。しかし金谷B遺跡1号住居跡のような方形の事例は、東北地方に類例を見出すことができず、寧ろ関東地方加曾利B式住居跡との関連が想起されよう。

高瀬山遺跡HO地区の住居跡は山形盆地以北の事例と共通している。円形を基調とし掘り込みが浅く、壁柱穴を巡らし、出入口と思われる施設(11区3B号住居跡)を有している。川口遺跡の住居跡の規模に比べると、本遺跡の住居跡は小さいと言わざるを得ない。しかし未調査区域の中にもまだ住居跡の存する可能性が高く、土坑群の中にも底面に柱痕跡を有する柱穴の配列(12区13号土坑)が確認されている。住居跡の数量は調査した15棟を上回することは確実であり、集落の規模としては決して小さくはないと思われる。土器捨て場に投棄された土器の量や、水場遺構から出土した土器の量と遺構の内容を考慮に入れるならば、県内の該期の集落の規模としては比較的大きく、後期中葉の山形盆地では天童市砂子田遺跡[森谷2003]、同渡戸遺跡[山口1996]と並ぶ拠点的な集落であったことが想定される(第34図)。

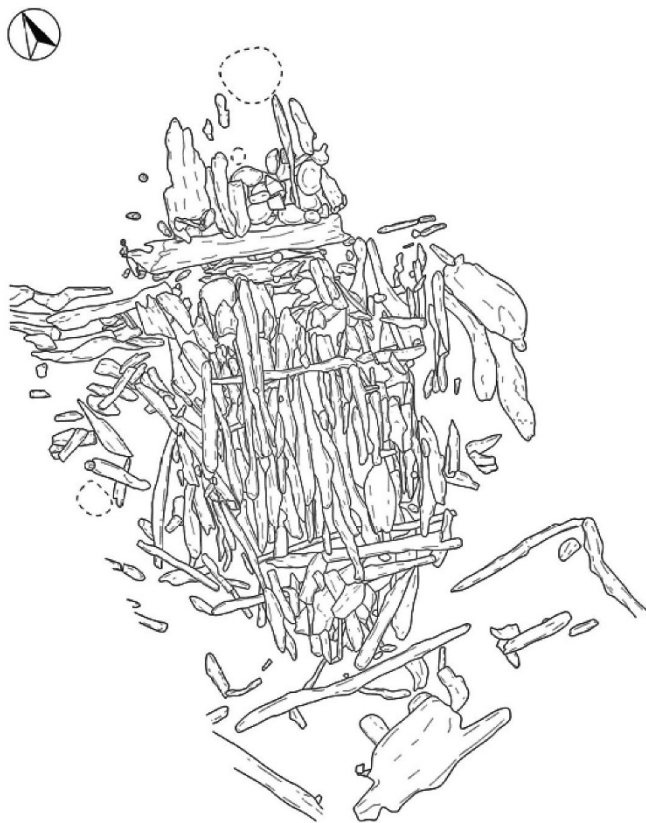
2) 縄文時代後・晩期の水場遺構(図36～図39)

水場遺構は段丘低位面の2区で検出された。明確な遺構は東調査区で4基、西調査区で1基であったが、残存状況が悪く明確な遺構とは認められなかったが、木材を組み合わせた施設は他にも看取された。また2000年の立合調査でも、2区の東側の3区の崖線直下から多量の遺物が出土したことから、水場遺構は更に多く構築されていたものと推測される。

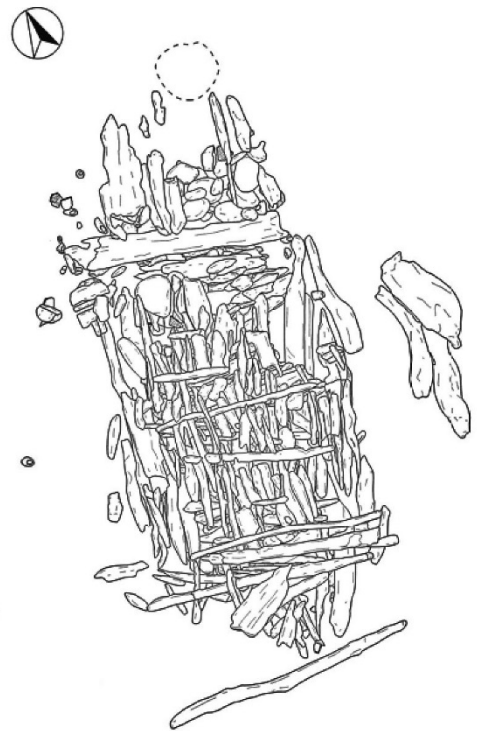
晩期木組遺構(図36)

晩期木組遺構は、木材を縦横に敷き詰めた足場的な施設(川側)と、板材で三方向を取り囲んだ取水口的な施設(崖側)からなり、その規模は南北4m、東西2.7mを測る。足場的施設は、クリを主とした材を縦横に5段にわたって積み重ねている。下から横5段→(縦5段)→横4段→縦4段→横3段→縦2段→(横2段)→縦1段の順序で、隙間なく積み重ねられており、厚さは20～25cmの幅で、圧縮され潰れたり窪みを持つ材が多数認められた。

取水口的施設は、崖面直下の湧水点の南側を板材で取り囲み、湧水を取り込むように構築されている。10点の材で構築されており、南北には二～四重に板材が並列されている。東西方向には長さ1.2m、幅20cmの板材が1枚配置され、杭や礫で固定され、枠内は80cm×30cmの規模となる。湧水点は褐色の砂質土が径約30cmの範囲に広がっており、断面観察からも湧水による墳砂痕であったことが確認されている。



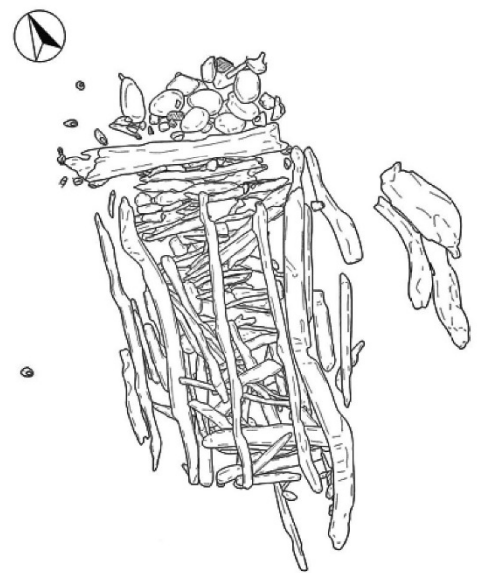
晚期木組遺構 1段



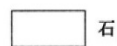
晚期木組遺構 2段



晚期木組遺構 3段



晚期木組遺構 4段



0 (1:40) 1m

図 36 晚期木組遺構集成図

両者の施設には新旧の差は認められず、同時に機能していた一体のものであったと考えられる。取水口南側の板材には、明瞭でないが上面中央にU字状の挟りらしき痕跡が認められる。木枠内に湧水を取り込んで、溢水させ南側の材に水を流し込んだ可能性が示唆される。足場の施設は木材が水平に敷き詰められ、傾斜が認められないことから、流水の構造は明確でないが、溢水した水を流すための施設であったと考えられる。遺構の西脇からはトチノキの種子が多量に出土しており、トチノキの加工に係わる施設であったことは確実であり、流水構造からアク抜き工程と結び付いた遺構であった可能性が考えられる。

本遺構は600点の木材で構築されているが、そのうち62%（樹種が判明した材で見ると77%）がクリを用いていた。次に多いのがトチノキ・コナラ属・オニグルミ・ヤナギ属であるが、2~3%を占めるに過ぎない。圧倒的にクリが多く、トチノキ・オニグルミ等の食料としての有用樹木が、材として用いられている。また僅かであるがヤマウルシも用材として使われており、これ等の樹木が遺跡周辺で管理されていた様相を窺うことができよう。

本遺構の構築時期は、遺構内や周辺出土の土器から大洞BC~C1式と考えられる。しかし精製土器が少なく、明確な時期を特定するには至っていない。

晩期石組遺構 (図37)

晩期石組遺構は、晩期木組遺構の西方6mの地点で検出された。段丘直下からやや晩期木組遺構の方向に張り出すように長方形に構築され、遺構上面のレベルが晩期木組遺構よりも10cm高い。クリの割材や板材を井桁状に組合せ杭で固定し、その中に5~25cm大の石を敷き詰めている。囲いの範囲は南北2.6m、東西1.7mで、西側は崩壊のためやや開き、北西隅は材と石が欠落する。

石組の上面は、中央部が若干高く緩いマウンド状を呈し、約1,500個の礫が隙間なく敷き詰められ、ほぼ1段のみで構成されている。その直下には木材が縦横に敷設され、基礎を構成している。本遺構は最上段の敷石を含めると5段で構成されている。木組自体は4段にわたって積み重ねられ、各段の間には5~10cmの空隙が存しており、南側には泥炭層、北側には砂質土が堆積している。石組直下で大洞C2式、最下段の4段で後期後葉~晩期前葉の粗製土器が出土していることから、後期後葉（晩期初頭）~晩期中葉にかけて、4回にわたって断続的に構築された経過が観察され、時間幅を持った遺構とすることができる。

遺構の周囲からは、オニグルミやトチノキの種子の集中が認められた。このことから当遺構がこれ等の種子の加工に係わる施設であったことが想定される。遺構の西側からは木樋状施設が検出され、筧として使用されていたと考えられる。また北側には矢板列が存しており、導水施設であったと見なされる。下部の木組遺構も一定方向に構築されており、流水に係わる施設であった可能性が想定される。石組自体は足場的な施設と考えられるが、下部の木組遺構は水を利用した施設で、トチノキのアク抜き工程に関連していたと想定される。しかし腐朽したためなのか、木材は疎らな敷設でしかなく、明確な性格付けを行うことは困難である。

晩期木組遺構は上記したように断続的に構築されているが、全体で700点の木材が使用されている。腐朽した材も多数存すると思われるが、クリが47%と最も多く、ヤマウルシ9%、ヤマグワ7%と続く。晩期木組遺構に比べると、クリ材の占める比率が低く、多様な木材が使用されている。特にヤマウルシが顕著に認められ、遺跡周辺でウルシが栽培されていたことを示唆している。

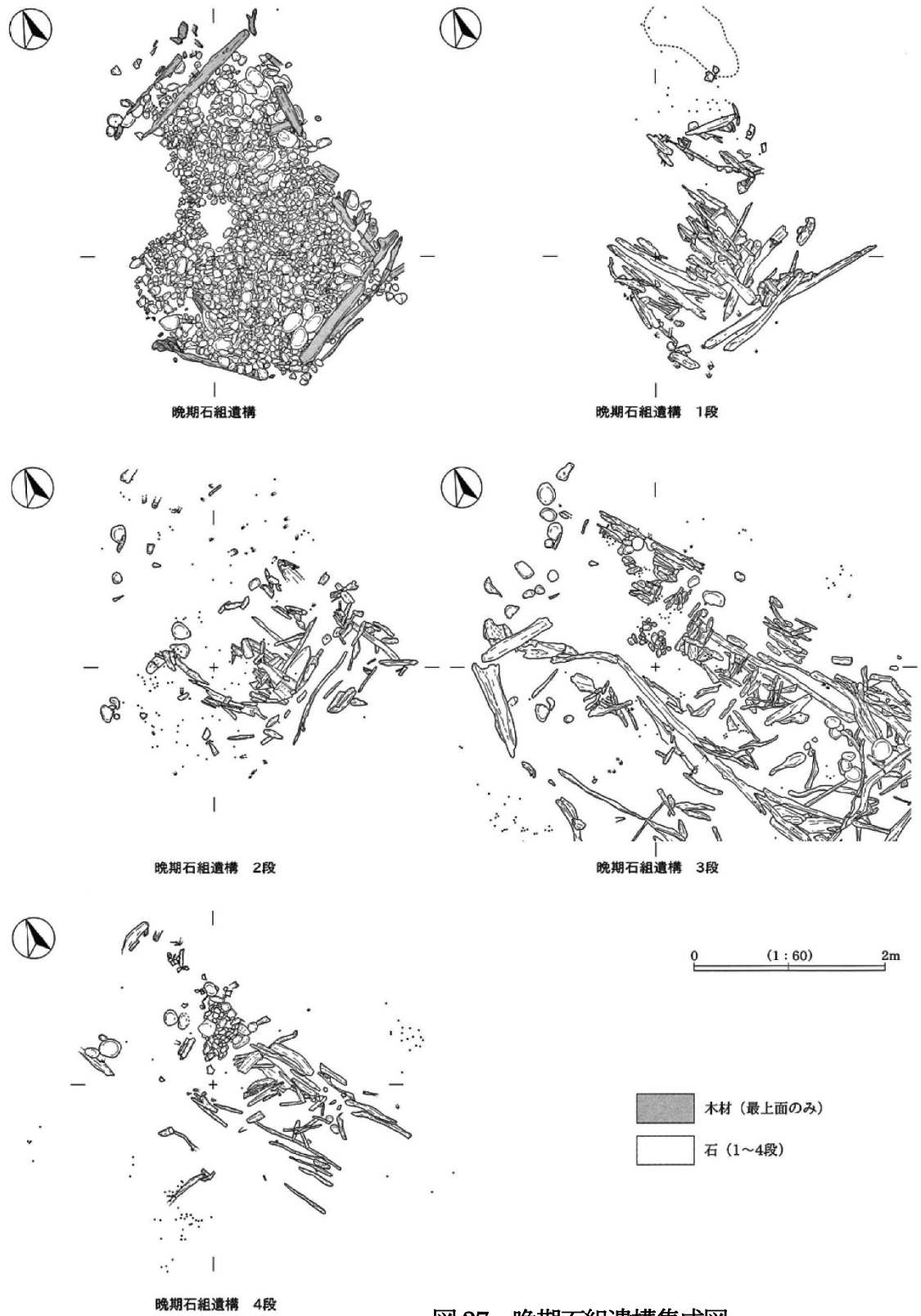


図 37 晩期石組遺構集成図

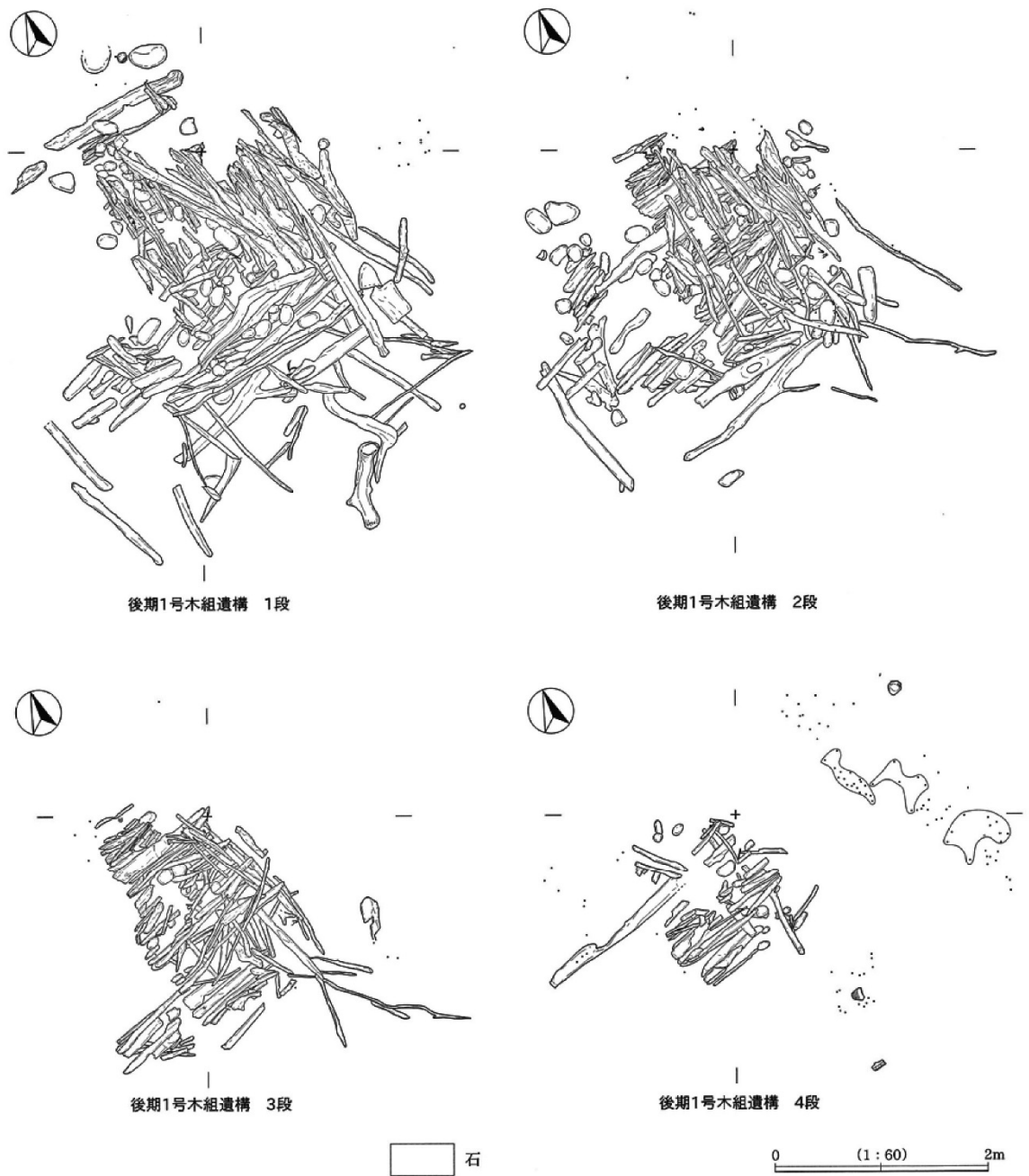


図38 後期1号木組集成図

後期1号木組遺構 (図38)

後期1号木組遺構は、晩期石組遺構の下部施設の50cm下位の、トチノキの種子を多量に含む黒褐色泥炭層から検出され、両遺構の間には50cmの間層が介在している。晩期石組遺構のやや西寄りに中心があり、南北4.5m、東西3.8mの規模で、木材を縦横に4段積み重ね、25～

30cmの上下幅にあまり隙間を置かずに構築されている。遺構内やその周辺からは後期中葉宝ヶ峯2式の土器が出土しており、遺構は該期の所産であることが確実である。

東側上面には1.2～2mの長い材が南北方向に、また下部には20～70cmの短い材が東西方向に多く敷設されており、鉤状に構成されている。縦横交互に材が敷設されていたことから、当初は足場的な施設を想定した。しかし遺構の北端には溢水構造を持つ板材が検出されており、後期2号木組遺構と同様に流水構造の施設であった可能性が考えられる。また2段以下では南北方向に材が敷設され、東端に同様の板材が検出されていることから、東から西に水を流し込んだ同様の施設であった可能性も考えられる。従って東西方向に流水させた施設がはじめに構築され、それを基礎として南北方向の流水施設に改修され、都合二時期にわたって構築されたと見なすこともできるであろう。晚期木組遺構や後期2号木組遺構に比べると、材の敷設状況は緻密でなく、流水施設になり得るか確証は得られず、足場的施設の可能性も否定できない。しかし中央に抉りを持つ可能性のある板材が出土した意義を重視するならば、流水構造を持った施設の可能性が指摘されよう。従って他の木組遺構と同様に、トチノキ等の水さらしに係わる施設であったと考えられる。

本遺構は400点の材で構成されているが、ヤナギ属(18%)が最も多く用いられており、以下ヤマウルシ・ヤマグワ・クリ・オニグルミが続く。クリは10%を占めるに過ぎず、全体の過半数を占めた晚期木組・晚期石組両遺構と用材選択において差異が存している。

後期2号木組遺構(図39)

後期2号木組遺構は、後期1号木組遺構の15～20cm下位の、トチノキの種子を包含する砂利層から検出された。2段の木組施設で構成されるが、主体となる地点が異なり、5～10cmのレベル差が存することから、別途の施設と考えられる。遺構内やその周辺からは宝ヶ峯1式が出土しており、また同2式の構築物である後期1号木組遺構の下位で検出されたことから、宝ヶ峯1式の所産であることは確かであろう。

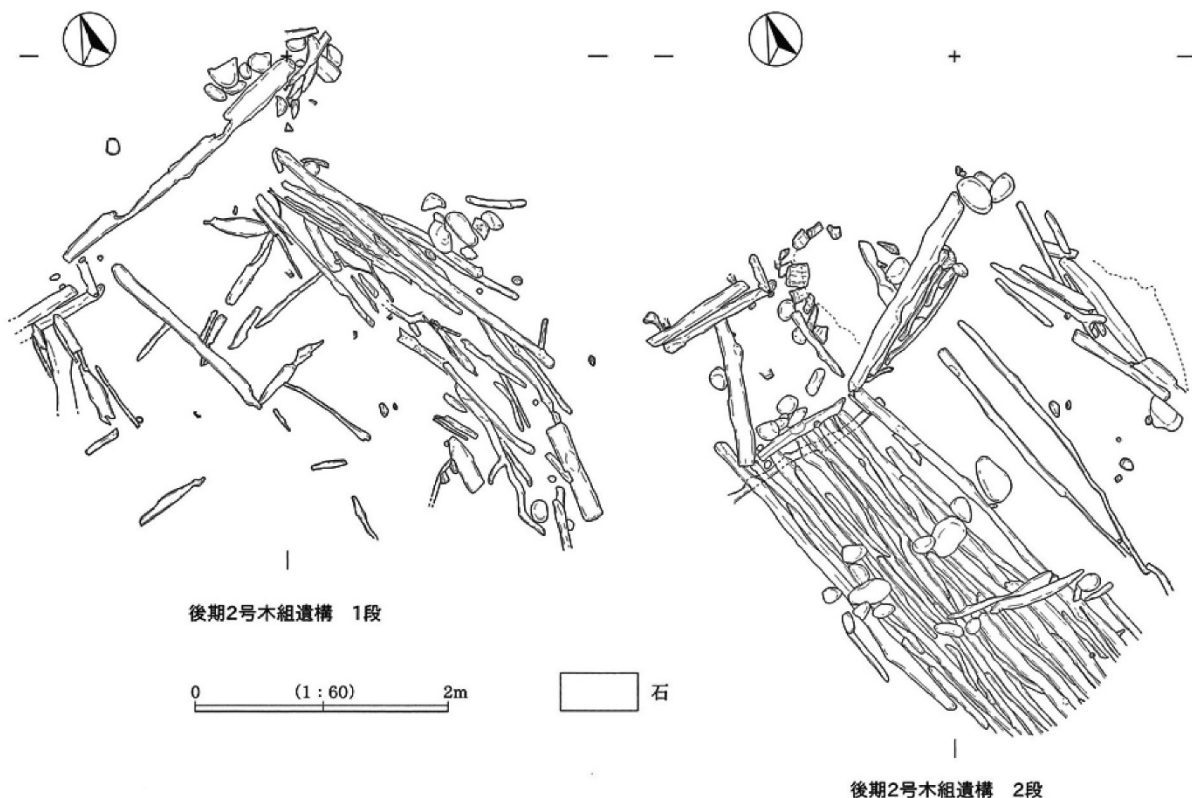


図39 後期2号木組集成図

1・2段の両施設とも、流水構造を持った施設であったと想定され、水を溢れ出すための窪みを持った板材と、水を伝わせたと思われる敷き詰められた丸太材で構成されている。1段については判然としないが、東側に木材が敷設されており、その南側から窪みを持った板材が検出された。板材は本来敷設材の北側又は途中に設置されていたと考えられ、流出したと想定される。また北端の長大な板材が、溢水施設であった可能性も否定できない。

2段は明瞭な流水構造を持った施設である。四つの施設から構成されるが、北東施設は崖線の湧水や当該施設内の湧水を北西の木枠内に取り込むための施設と見なされ、湧水点を取り囲むように割材が半円形に打ち込まれている。北西の木枠は東側から引き込んだ水を静水させた後に、南側の板材の窪みから水を溢れ出させ、その南側の敷き詰めた丸太材に水を伝わせて流すシステムであったと想定される。南西の流水施設は3mの丸太材が1.4mの幅で、同一方向に5度前後の傾斜をもって配列されていた。一定の水量が確保された構造であることから、水さらし場としての機能が推定され、遺構を覆っていた砂利層にトチノキの種子が含まれており、トチノキのアク抜き工程等に使用されていた可能性が考えられる。

本遺構は181点の材で構成されているが、クリが35%と最も多く、ヤマグワ19%、オニグルミ8%、ヤナギ属・ニレ属6%と続く。クリ材が多用されているが、晩期木組・晩期石組両遺構に比べるとその比率は低い。しかし木枠となる板材や杭にはクリが用いられており、主要部材であったことに変わりはない。

西調査区湧水地点

西調査区からは、大洞A2式の木組施設が検出された。東調査区の水場遺構からは、西方60mの位置にある。約1.4m四方の木枠施設と、その南側の木材の部分的な施設から構成されており、東西幅3m、南北幅5m程度と大型の施設であったことが想定される。湧水点を取り囲むように板材が配され、深さは50cm以上を測るが、激しい流水のため木枠は崩れ雑然としており、西側の板材は確認できなかった。また木枠施設の南側から20～30cmの割材の同一方向の配列

が一部に認められ、両脇には杭が打ち込まれていた。部分的な材の配列は用材の腐朽した結果で、本来は長い材が敷設されていたと想定される。木枠施設と木材の配列は、後期2号木組遺構や晩期木組遺構と共通しており、流水構造を持った施設であったと考えられる。周囲からはトチノキの種子や果実が多量に出土しており、これ等の加工に係わった施設であったことが窺えよう。

木枠内からは凹石や磨石類と共に、凝灰岩質泥岩製の岩版が出土し、その周囲からは黒漆塗りの壺形土器(図47-33)も出土している。非日常的な道具が出土していることから、単に湧水を利用した作業場としての機能だけではなく、水に対する信仰的な性格を持ち合わせた施設であったことが類推される。またトチノキについては、他の遺構では種子が出土したのみであるが、本遺構の周辺からはトチノキの果実も多量に出土していた。施設の用途や作業内容において他の時期の水場遺構とは、差異が存していたことが考えられる。

なお本遺跡では土器の数量に多寡が見られるものの、後期前葉南境2式～晩期中葉大洞C2式までの土器型式が一通り確認されている。しかし明確に大洞A1式に比定できる土器は、指摘できないのが実情である。後期～晩期中葉の水場遺構と大洞A2式の水場遺構が構築された間には、何らかの断絶が生じていた可能性も考えられる。山形盆地における大洞A2式期の低地遺跡の活性化は、既に指摘されているところであり[小林圭一 2001・04]、本遺跡でも晩期中葉以前の居住形態と晩期末葉では、差異が存していた可能性が考えられる。西調査区湧水点の施設が東調査区の遺構よりも規模が大きく構築されていたり、また居住施設と作業場が近接していた可能性が指摘されることから、大洞A2式期に画期が存していたことが暗示されるであろう。

総括

以上のように、本遺跡では水場遺構が5基検出された東調査区4基、西調査区1基で、東調査区では同一地点に重層し木組施設が構築されていた。多くの遺構が木材を縦横交互に積み重ねていることから、当初それ等を足場の施設と見なしていた。しかし詳細に検討してみると、後期2号木組遺構2段で確認された流水構造をもった施設である可能性が、他の木組遺構でも指摘することができるようである。木枠内に取り込んだ水を板材から溢れ出させ、木材等に伝わって流すシステムが想定され、トチノキの種子が遺構周辺やその覆土に含まれていることから、アク抜き工程を中心とした水さらし場としての機能が類推される。

2区では、大木10式の土器が崖線直下で若干出土しているが、本格的な遺構が形成されるのは宝ヶ峯1式の段階である。はじめに後期2号木組遺構2段が構築され、土砂に埋積された後に同1段が構築されたと考えられるが、その時期が宝ヶ峯1式に相当する。その後宝ヶ峯2式の段階になって、後期1号木組遺構が二時期にわたり構築・使用されたと考えられる。更に後期中葉～後期後葉乃至は晩期初頭にかけて、泥炭層が厚く形成され、トチノキの大木が倒伏する状況を招いたが、この間にも木組施設が構築されていた様相は、晩期石組遺構直下1段から窺うことができる。しかしこの遺構は晩期木組遺構3～4段に関連する可能性もあり、施設としての性格は明確でない。

晩期石組遺構は、晩期初頭(後期後葉を含む可能性もあるが)～大洞C2式にかけて4回にわたって構築されたと想定される。最終的には石組の遺構となっているが、下部施設はいずれも木組の遺構で、ほぼ方向を同じくして構築されている。このことから湧き水を流し込むことを意図した施設と想定されるが、覆土には砂質土が存し、材の残存は良好な状況と言えず、性格を特定することは困難である。しかし西側に木樋状施設や北端に矢板列も検出され、また周囲からはクルミやトチノキの種子も多数出土しており、その可能性は高いと考えられる。

晩期木組遺構は、大洞BC～C1式にかけて一時期に構築された遺構と考えられる。湧水点を取り囲むような「コ字状」の木枠と縦横交互に敷き詰めた木材列から構成され、取水口に貯め込んだ水を溢水させ、木材列に流し込んだ施設と考えられる。遺構面は平坦で後期2号木組遺構のような明確な流水構造は認められないが、ほぼ同様の施設と見なされるであろう。

西調査区湧水点の木組遺構は、大洞A2式に構築された施設である。湧水点を取り囲む木枠施設と木材の敷設から構成され、流水構造を持った施設と想定される。しかし残存状況は悪く、詳細は判然としない。木枠内の湧水点の近くから岩版が出土し、その周囲からも漆塗りの壺形土器が出土していることから、湧水を利用した作業場としての機能の他に、水に対する信仰的な性格を合わせた施設であったことが想定される。またトチノキの果実が多く出土した点で、東側調査区とは様相を異にしている。

上記したように、2区では水場遺構が5基乃至は6基(晩期石組遺構直下1段を含めた場合)検出された。古い時期から見ると、宝ヶ峯1式→宝ヶ峯2式→(金剛寺1式)→大洞B～C2式→大洞A2式の時期となるが、構築回数は宝ヶ峯1式1～2回、宝ヶ峯2式1～2回、大洞B～C2式5回(6回)、大洞A2式1回と、少なく見積もっても8回、最大で10～11回にわたって構築されたことが指摘される。更には東側の3区の崖面直下にも遺構の存在が想定されることから、該域が漸続的ながらも水さらし場として頻りに利用されていた様相を窺うことができる。特に晩期石組遺構付近では、約1.8mの層厚に3～4基の遺構が重層して構築され、最大9回にわたって遺構の構築された経過が観察された。近辺の湧水を利用したため、同一地点に重層して構築されたと考えられるが、その背景には土砂の堆積が急激に進行していた状況があったと想定される。

後期2号木組遺構は地表下1.7mで検出されたが、砂利層に覆われており、土砂の流入によつ

て埋積されている。その後泥炭層が形成される状況にあったが、流水と滞水の環境が繰り返し生起しており、縄文時代後期中葉～晩期前葉にかけては土砂の堆積が急激に進行したことが想定される。遺構の埋積が繰り返された結果、ほぼ同一地点に重層して遺構が構築されたのであろう。土砂の急激な堆積は、遺構の周辺で大きな環境変化が生起したことを窺わせる。

2区では水場遺構が検出されたが、その生活拠点との位置関係については明確とは言い難い。後期中葉宝ヶ峯2式期については、段丘上の東方150mに集落が検出されている。1・11・12区に相当するが、竪穴住居跡が15棟検出されている。いずれも宝ヶ峯2式の所産と考えられ、2区の後期1号木組遺構の時期に合致する。後期1号木組遺構はこの集落の水場遺構として構築され、利用されていたのであろう。11区では宝ヶ峯1式の土坑(11区18土坑、12区2号土坑)が検出され、縄文時代後期遺物包含層からも第V群土器が出土していることから、同式の生活の拠点も11区付近にあったと見なされ、その水場遺構が2区の後期2号木組遺構であったと考えられる。

ところがそれ以降の宝ヶ峯3式～大洞C2式にかけては、広大な高瀬山遺跡の範囲の中に居住域を指摘することができないように思われる。既報の調査区では、高瀬山遺跡1期の「土器捨て場」に、金剛寺1式・大洞BC式・同C1式・同C2式の土器片を僅かに指摘するに留まっている。大洞A2式期については、1997年の寒河江市教育委員会による調査で、同式の一括性の高い資料(図48)が得られており、最上川沿いの微高地に居住域が営まれていた可能性が高いと判断される。晩期前半についても同様の立地が考えられなくもないが、寒河江市教委の調査区域は一部分が実施されたのみで、未調査区域を多く残したまま造成工事が実施されており、今となっては遺構の分布を確認することは不可能である。

高瀬山遺跡が位置する寒河江市内には、晩期の遺跡は5遺跡が確認されている[小林圭一2001]。そのうち本遺跡の東方1.5kmに位置する石田遺跡は、晩期全般にわたる豊富な遺物が出土し、泥炭層の形成も認められており、該域の拠点集落と目されている。残念ながら正式な発掘調査を経ないまま、工場造成や宅地化が進み、遺跡の詳細は明かでないが大洞C1式の漆塗り土器や遮光器土偶が出土しており、生活拠点であった可能性が高いと判断される。高瀬山遺跡の晩期の水場遺構は、特定の作業を行うための出先的な施設で、石田遺跡とは一体の関係にあった可能性が考えられよう。従って後期中葉と晩期では水場遺構と居住域の関わりについて差異が存在していたことになるであろう。木組遺構の用材としては、クリ材が多く用いられていた。花粉分析からも、クリ属の花粉の比率の高い結果が得られている。その他にもトチノキ属やクルミ属・ブナ属・コナラ亜属の花粉も一定数産出しており、これ等有用樹木が周囲に生育する環境にあったことが想定される。またウルシ属の花粉も低率ながら断続的に産出しており、周囲に栽培されていたウルシに由来する可能性も指摘されている。従って構築に用いられた材の多くは、遺構に近接した場所から採取されたと想定され、特にクリが用材として際立っていることは、周辺でクリの管理がなされていた可能性が高くトチノキやウルシについても同様のことが指摘されるであろう。

3) 11・12区遺構内出土の縄文時代後期中葉の土器(第40～42図)

高瀬山遺跡HO地区では、後期中葉の竪穴住居跡が11区で4棟、12区で5棟、土坑が11区で21基、12区で21基が検出されている。いずれも縄文時代後期遺物包含層及びその周辺に位置しているが、そのうち11区では1号住居跡(図40)、12区では3号住居跡(図42-11～27)で良好な資料が得られている。

11区1号住居跡(図35-1)は、長軸3.4m、短軸2.8mの楕円形の遺構で、床面は起伏を有し、壁は緩い角度で立ち上がり、炉や明確な柱穴は検出されていない。本来は竪穴状遺構に分類すべきであったが、多量の遺物が出土したため住居跡の範疇に含めた。遺構の床面から図40-3・

4・12・32、床面直上から2・9、その他は覆土から出土している。第VI群土器6類の装飾突起(図40-1~9)が顕著に認められ、6類(12・21)の他に、2類(17~20・22・26・29)、4類(24)、5類(16・23)、10類(25)が出土している。更に所謂「宝ヶ峯型」の注口土器(30)や、曲線的な磨消文様で構成された壺形土器(31・35)、粗製深鉢(32~34・36~38)が器種構成に加わる。当該住居跡には9類が含まれていないが、宝ヶ峯2式の型式内容を示す好例であり、仙台市王ノ壇遺跡の「II段階縄文土器」[小川・高橋 2000]に対比される。

11区2号住居跡(図35-2)は、1号住居跡と同様に小規模な遺構で、やはり堅穴状遺構に相当する。遺構の床面直上から図41-1・2、その他は覆土から出土している。第VI群土器9類(1・3)の他に、3類(4)、7類(5~7)が出土している。2は3類に相当すると思われるが、口縁内部にC字状の隆線文が施される。

11区3号住居跡は同一地点で重複する住居跡であり、上面の3A号住居跡(図41-9~14)が新しく、下面の3B号住居跡(図41-15~20)が古い。3A号住居跡では14が覆土下位から出土した以外は、床面から出土している。装飾を持つ土器は9のみで、その他は粗製深鉢である。9は頸部は屈折して口縁部が垂直に立ち上がる特異な器形である。3単位の大波状口縁をなし、屈折部に刻み目帯が巡らされ、体部は無文となる。体部下半が欠損するため、詳細は不明であるが、福島県福島市弓手原遺跡SK136床面直上出土例[山内ほか1996:第76図6]から、台付の浅鉢になるものと判断される。弓手原例は口縁部が平縁で、刻み目帯直下の体部には平行線文が展開し、蛇行沈線(Z字)で区切られており、宝ヶ峯2式に位置付けられる。9も同様の位置付けが可能と思われる。3B号住居跡(図35-4)は前記したように、後期中葉の典型となる住居跡である。図41-18が炉埋設土器で、20が床面、19がピットから出土した以外は覆土中の出土である。17は口縁部と体部に縄文帯が圍繞され、その間の頸部が無文帯となり、区切りの沈線は認められない。16は細頸の壺形土器で、体部には波頭状のネガ文様による曲線的な磨消縄文の文様が展開する。16に類似した壺形土器は、ネガ文様とポジ文様が逆転するが、最上町かつば遺跡ST4から出土しており、宝ヶ峯2式に位置付けられている[水戸部 2003:第47図23]。本例も同様の位置付けが可能であろう。

11区4号住居跡は西側を溝跡に切られており形状が明確でない。床面から26、床面直上から24、P1から25、その他は覆土から出土しており、第VI群土器9類(21・23・25)が認められる。

12区1号住居跡(図35-3)は、11区3号住居跡と共に良好な形状が確認された住居跡である。図42-6・7が床面、その他は覆土下位~床面直上から出土している。第VI群土器9類(1・10)に、8類(4)や口頸部が緩く屈折し幅広の無文となる深鉢(5)が伴うが、この深鉢は後述するように先行型式の系譜を引くものである。その他は無文の浅鉢(8)や注口土器(3・9)、粗製深鉢(6・7)が出土している。

12区3号住居跡(図35-6)は形状が明確でなく、炉跡も未検出であるが、一括性の高い多量の遺物が出土している。13~16・18・22・26・27が床面、12・17・25が床面直上、その他は覆土から出土している。2類(22・23)、3類(21)、4類(11)、5類(12)、6類(14・15・18~20)が出土しており、壺形土器(13)・注口土器(16・17・26)が加わる。装飾突起は螺旋状の隆帯が付され、頂部に団扇状の把手を配しており、11区1号住居跡と共通する。26の注口(壺形)土器の頸部には、IIb文様帯に当たる凸彎部が作出されている。16・17は所謂「宝ヶ峯型」の注口土器[鈴木克彦 1997]である。華やかな装飾突起を有する深鉢や「宝ヶ峯型」注口土器は、宝ヶ峯2式を象徴する器種類型であり、注口(壺形)土器のIIb文様帯の出現も同式の特徴に上げることができる。

以上のように、11区1号住居跡と12区3号住居跡で出土した土器は、宝ヶ峯2式の典型と

11区 1号住居跡

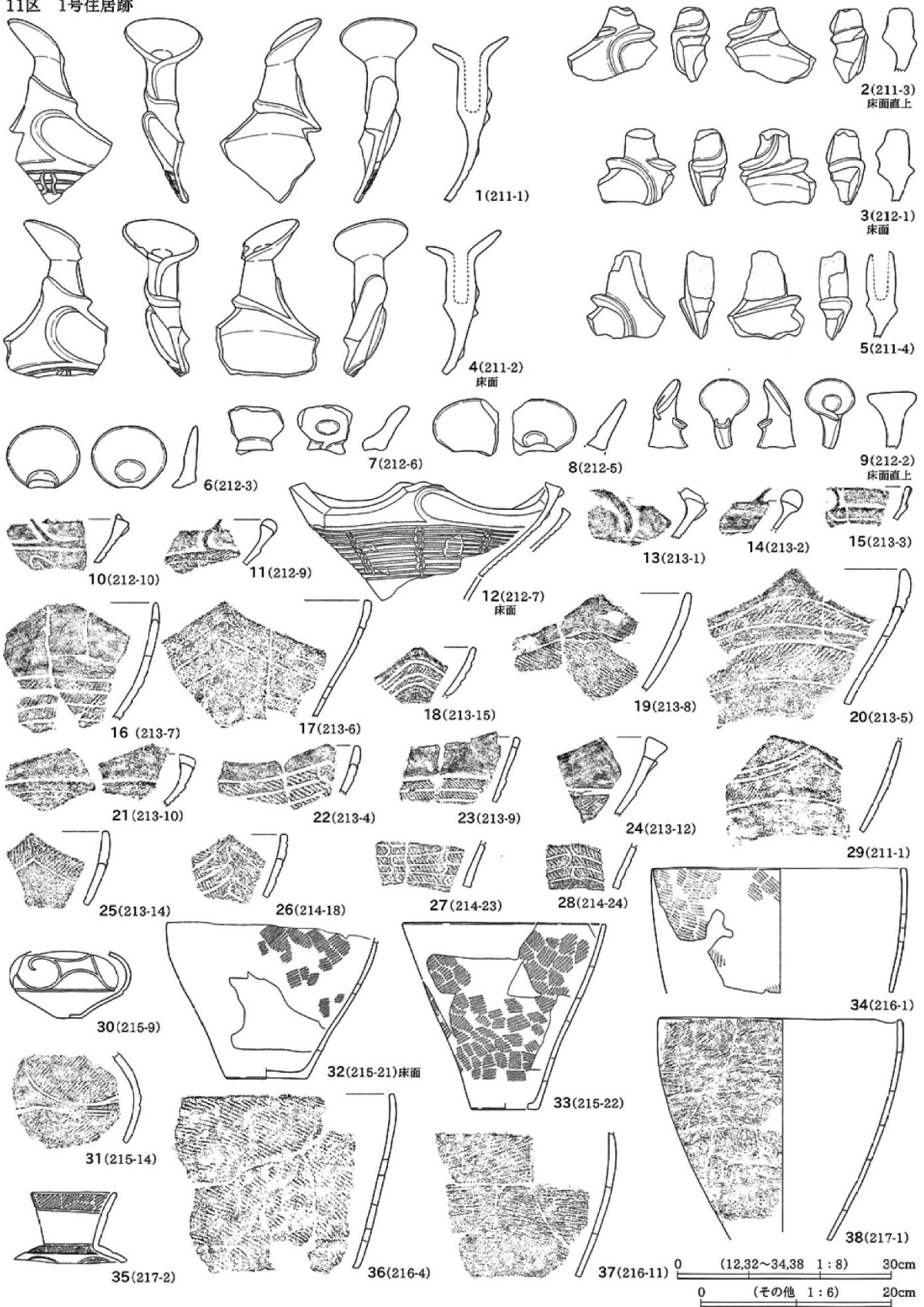
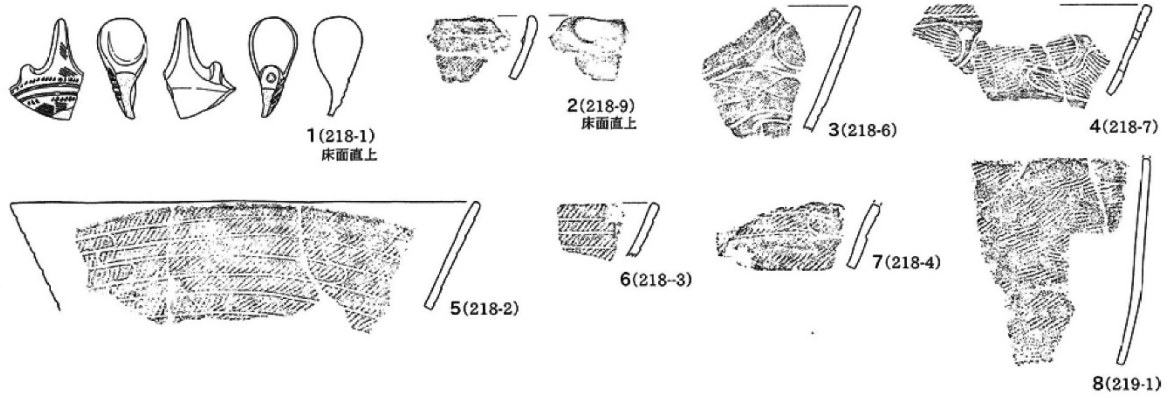
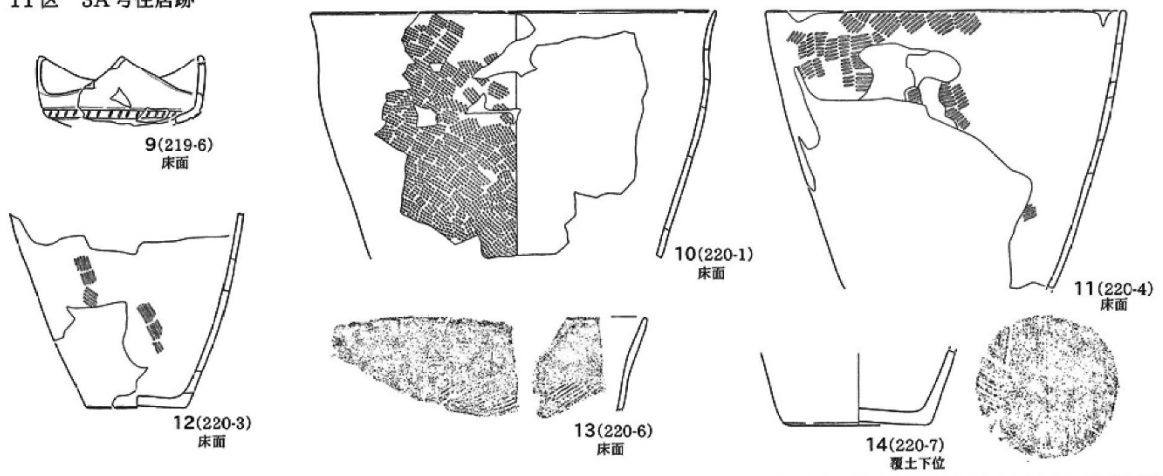


図40 11区遺構出土の後期中葉の土器(1)

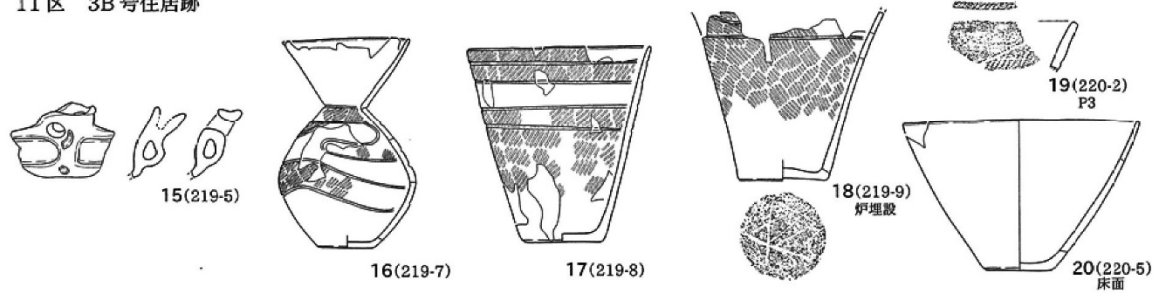
11区 2号住居跡



11区 3A号住居跡



11区 3B号住居跡



11区 4号住居跡

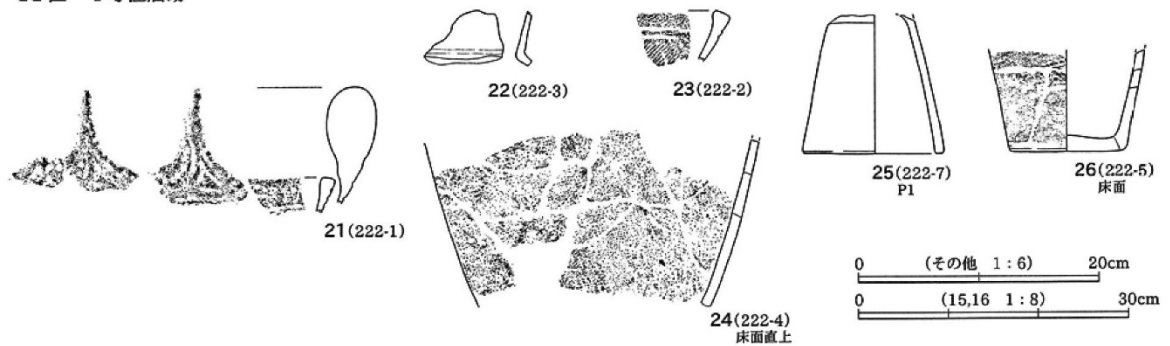
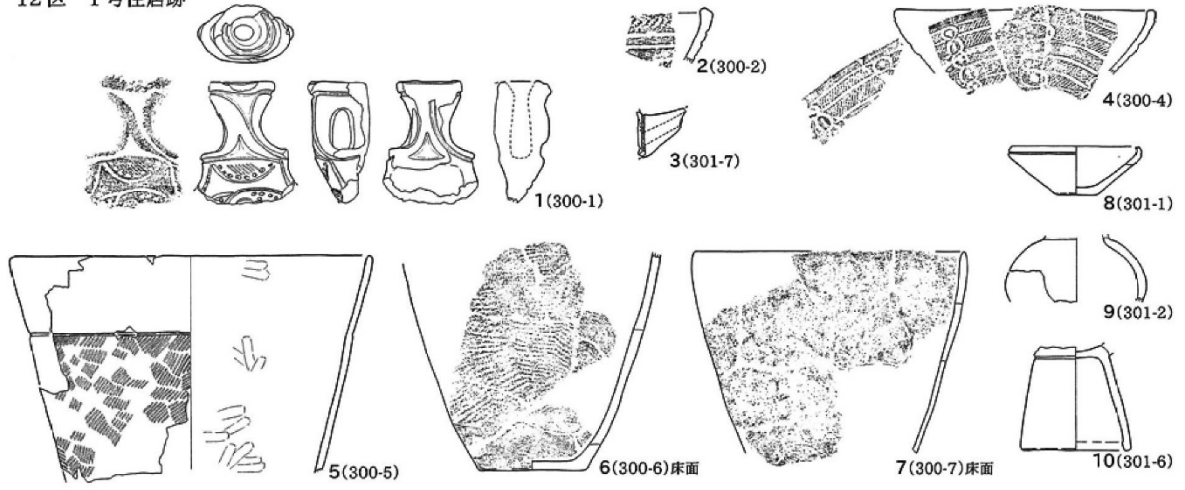
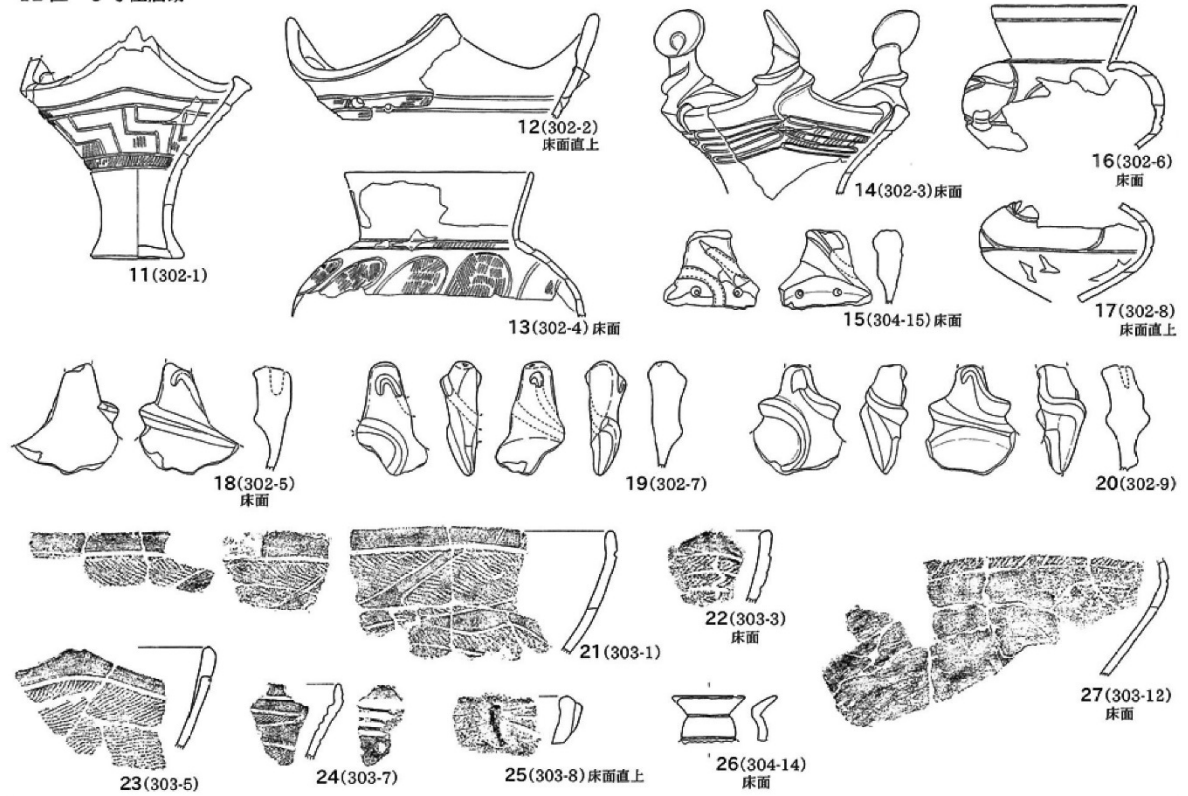


図41 11区遺構出土の後期中葉の土器(2)

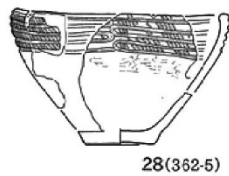
12区 1号住居跡



12区 3号住居跡



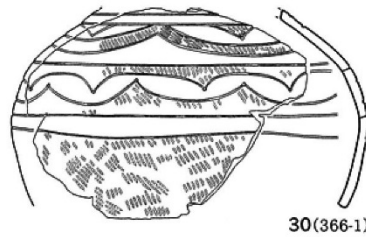
12区 2号土坑



12区 3号土坑



12区 16号土坑



12区 19号土坑

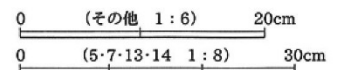
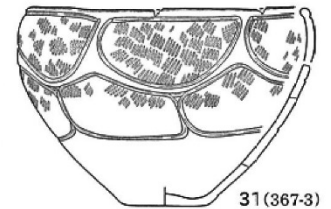


図42 11区遺構出土の後期中葉の土器 (3)

言える内容となっている。装飾突起を付した平行線文系土器と、曲線的な磨消縄文の文様を配した深鉢・鉢形土器並びに壺形土器、更に「宝ヶ峯型」注口土器で器種が構成されている。「宝ヶ峯型」注口土器は、口縁部・頸部・体部の3段構成のものと、口頸部・体部の2段構成の二様態が存しており、体が丸く球状を呈し、半肉彫的手法で曲線文様が描出され、器面全体が研磨され光沢を有する。宝ヶ峯2式の段階に有力な器種類型としての地位を確立し、亀ヶ岡式土器注口土器の母体になって行く。その点で当該期を後期から晩期へのターニングポイントに位置付けることができるであろう。宝ヶ峯2式に位置付けられる両住居跡の内容は仙台市王ノ壇遺跡「Ⅱ段階縄文土器」[小川・高橋 2000]に共通することが指摘される。

しかし両住居跡からは、第Ⅵ群土器9類が出土していない。9類は十腰内第Ⅱ群b類に相当する台付の装飾深鉢で、頸胴部界で屈折した長胴の器形と長脚の台、華美な装飾突起、曲線的な磨消縄文の文様、文様区画に沿った列点に特徴付けられる。Ⅱa文様帯が現出し、Ⅱa・Ⅱ文様帯の重畳関係が確立する点で、後続型式に継承される器種類型であるが、その消長については判然としないのが実情である。華美な装飾突起は台形状や中空の塔状に作出されており、団扇状の突起が付される6類との差異が指摘される。当該土器の分布は広く認められ、東北全域から西は新潟県小千谷市三仏生遺跡、千葉県佐原市大倉南貝塚まで出土している。当該土器が11区1号住居跡と12区3号住居跡に偶々欠けていたのか、それとも時期差を示しているのか、または系統の差異を反映しているのか、今後の検討が求められるが、11区遺物包含層の出土状況は時期差については否定的と言える内容となっている。

当該土器は次項で詳述するように、2区での出土例が全く認められておらず、華美な装飾突起を配する6類自体も非常に少ない。居住域である11区との差異を時期差と見るよりも、水辺の作業場としての性格を反映していたと想定され、両類が煮沸や液体物の貯蔵以外の用途に使われていたことが考えられる。2区と11区の出土状況の差異は華美な装飾が施された深鉢が、実用性の低い器種類型であったことを示していると指摘することができるであろう。

11・12区から出土した土器の主体は、王ノ壇遺跡の「Ⅱ段階縄文土器」に対比され、渡戸遺跡の主体をなす宝ヶ峯2式に相当する。但し王ノ壇遺跡では、6類が欠落している。3区の崖線直下の2000年の立合調査では11区や2区に認められていない土器群が出土している。緩い波状縁に幅広の縄文帯を有し体部に曲線的な磨消文様が展開した深鉢や、刻み目帯による曲線文様が展開する注口(壺形)土器等であるが、これ等の土器は王ノ壇遺跡「Ⅳ段階縄文土器」[小川・高橋 2000]に対比される内容であり、宝ヶ峯2式の新段階(もしくは宝ヶ峯3式古段階)に位置付けられる。従って2区や11・12区の主体は、宝ヶ峯2式でも古段階にあった可能性が指摘されるであろう。宝ヶ峯2式細分の問題については、宝ヶ峯3式の良い資料が得られている天童市砂子田遺跡[森谷 2003]との対比が求められており、今回は問題提起に留め、詳細な検討は後日に期したい。

4) 2区出土の縄文時代後・晩期の土器(図43~46)

2区東調査区の晩期木組遺構と晩期石組遺構に挟まれた南北7m、東西4mの区域からは、夥しい量の遺物が重層的に出土している。晩期木組遺構西側に土層断面観察用のベルト(西ベルト)を設定し、この層序に対比させながら掘り下げて行った結果、層厚1.4mの堆積層を1~X層の10枚の文化層に整理することができた。後期前葉~晩期中葉にかけて、整然と堆積した多量の遺物を包含する層序が確認され、特にこれまで未明であった東北中部の縄文時代後期中葉の編年研究に大きく寄与する内容となっている。

以下では、層位毎に土器を総括してみたい。

1層出土の土器(図43-1~23)

1層は最上層に当たり、東調査区遺物集中地点だけではなく、晩期木組・晩期石組両遺構の周

2区 I層

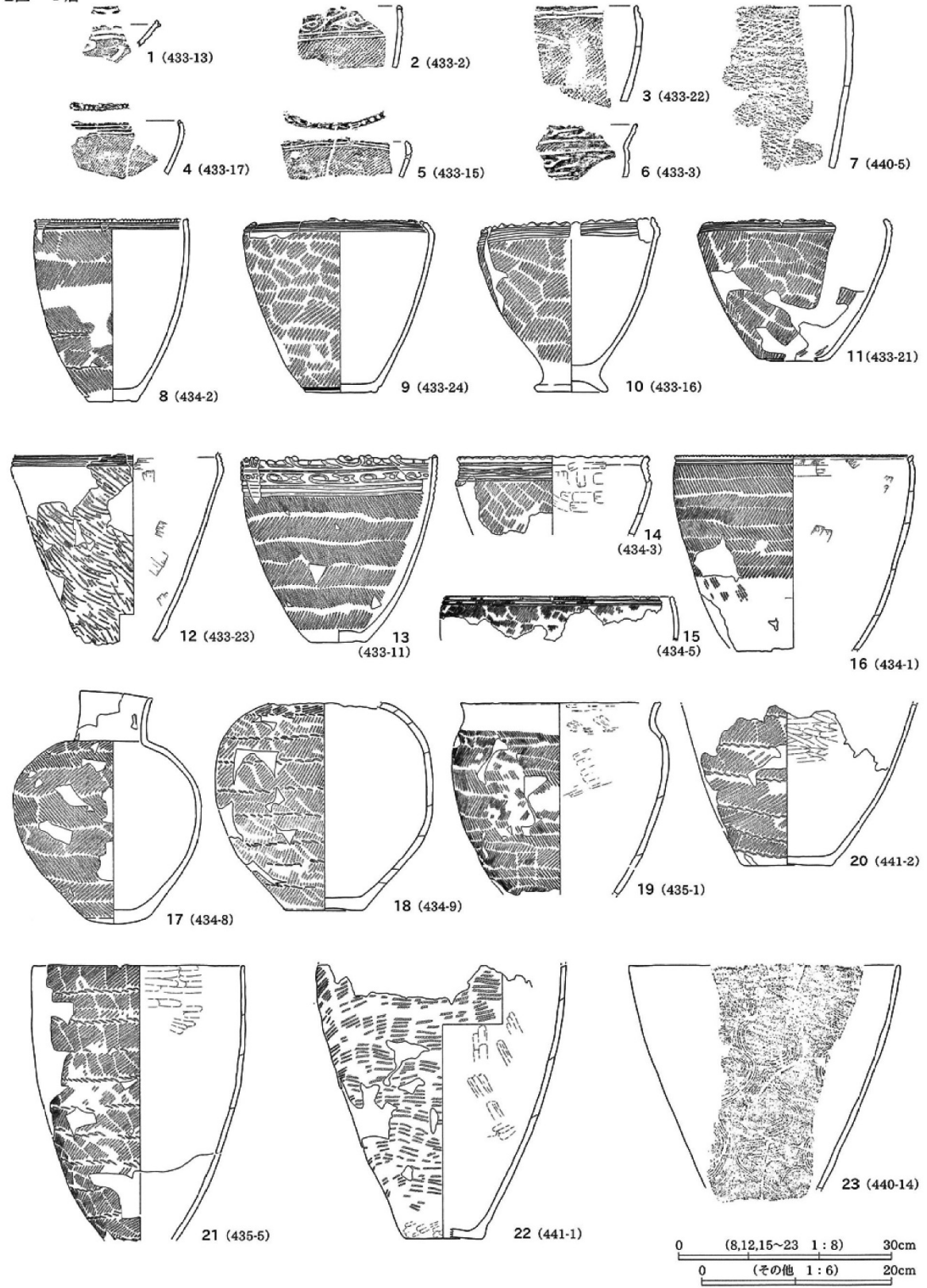


図43 2区1層の土器

辺で出土した遺物も含んでいる。大洞 B2～C2 式と同 A2 式の土器が出土しているが、水場の性格を反映してか装飾を有する土器は少なく、粗製深鉢で占められている。深鉢の地文には、単節縄文の他に結節文や羽状縄文が顕著に見られ、網目状撚糸文や櫛歯条線文も存している。

図 4316・19・21 は、晩期木組遺構の北西から纏まって出土している（遺構編第 399 図）。16 は大洞 C2 式に位置付けられることから、口縁部が外折し羽状縄文で構成された 19 も、同式に相当するであろう。櫛歯条線文の深鉢（23）も、晩期の所産となる。山形県内の類例としては真室川町釜 C 遺跡【黒坂 2003:第 59 図 3】、村山市宮の前遺跡【山口 1995:第 96 図 743、植松 1999:第 83 図 10】、白鷹町岡ノ台遺跡【名和 1994:図版 13「P20d】、宮城県内では大和町摺萩遺跡【柳沢ほか 1990:第 319 図 2】が挙げられる。岡ノ台遺跡では大洞 C2～A1 式の深鉢との共伴が確認されており、東北中部の大洞 C2 式前後に櫛歯条線文の深鉢が一定数存していたことはほぼ確実であろう。また 1 層からは、大型の粗製壺（17・18）も出土している。この器種も水場としての性格を反映していると想定されるが、体部に羽状縄文や結節文が施されており、大洞 C1～C2 式に相当すると考えられる。

以上のように、1 層では大洞 B2～C2 式の土器が出土しているが、主体となるのは大洞 C1～C2 式と見なされる。

Ⅱ層出土の土器（図 44-1～8）

Ⅱ層も 1 層と同様に東調査区遺物集中地点だけではなく、晩期木組・晩期石組両遺構の周辺で出土した遺物も含んでいる。特に晩期石組遺構西側出土の土器を多く含んでおり、該域では大洞 C1～A2 式の土器（図 44-4・6～8）が出土している。東調査区遺物集中地点に限定するならば大洞 B1 古式～BC 式の装飾土器（1～3）が出土している。

3 は大洞 B1 古式の高台付装飾深鉢で、晩期最初頭に位置付けられる。Ⅰ・Ⅱa・Ⅱ文様帯の 3 帯構成で、Ⅱa 及び Ⅱ文様帯には流線化した入組帯状文が展開する（Ⅱa:4 単位、Ⅱ:5 単位）。口縁部には魚尾状突起と半円形突起が交互に 8 単位配され、前者の直下に三角形区画が作出され、頂点が魚尾状突起の刻み目と連結し口端に露出する。後期末葉の入組帯状文深鉢からの発展が想定され、東北中部における晩期初頭の指標に位置付けることが可能である。なお同例の内面の付着物について 14C 年代測定を実施しているが、3080±40BP(AMS 法)の測定値が得られている。

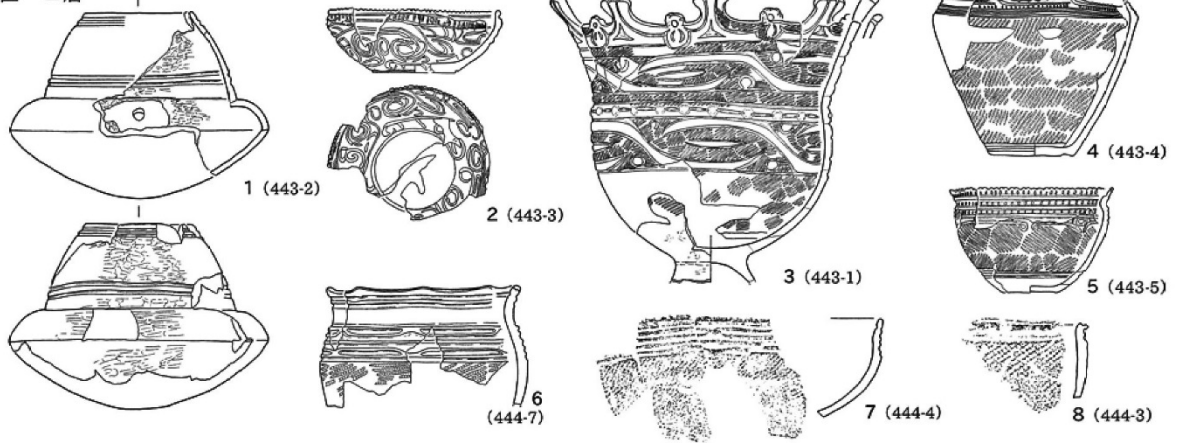
1 は大洞 B2 式の注口土器 B 類である。口頸部と体部の器高がほぼ等しく、肩部に稜が作出されており、同式の要件を満たしている。該期の東北中部では無文の注口土器が卓越し、口頸部下端に 1 条沈線を巡らす例が多く見られる。しかし本例は口縁部と頸部下半に平行沈線が圍繞されており、嘗ての縄文帯の痕跡を留めている。2 は大洞 BC 式の浅鉢と推定される。沈線のみやや粗雑な作出であるが、文様は渦巻文が組み合わされており、双頭渦文を意図したようにも見受けられる。5 は大洞 BC2 式の鉢形土器で、口頸部と体部上端に裁痕列が圍繞され、体部上半に流線による双頭渦文が施される。体部上半の双頭渦文は、大洞 B2～BC1 式に盛行した連弧文が形骸化したものと理解されよう。

以上のように遺物集中地点の 11 層では大洞 B1～BC 式が出土している。多量に出土した粗製深鉢も、殆どが晩期前葉に相当すると考えられる。

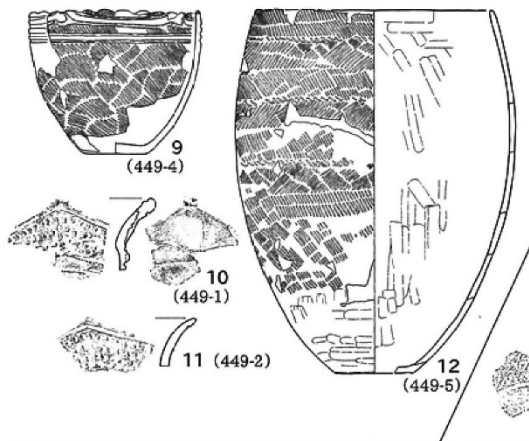
Ⅲ層出土の土器（図 44-9～12）

Ⅲ層は上下層に比べると遺物量が少なく、間層と見なされ、層厚は 10～20cm を測る。出土土器は宝ヶ峯 1 式（図 44-10・11）、大洞 B2 式（9）、晩期前葉粗製深鉢（12）等で、時期的な纏まりは認められない。10・11 は、口頸部の上下端が区画され、刺突が充填され、波頂部突起に装飾が加えられることから、宝ヶ峯 1 式でも新相に位置付けられる。しかし、原位置を留めていたとは見なし難い。9 は口頸部文様帯に両端が共に開いて入り組んだ三叉文で構成され、口縁端部

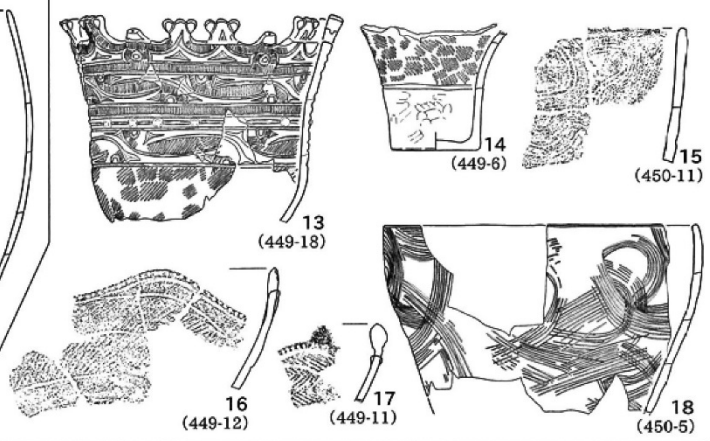
2区 II層



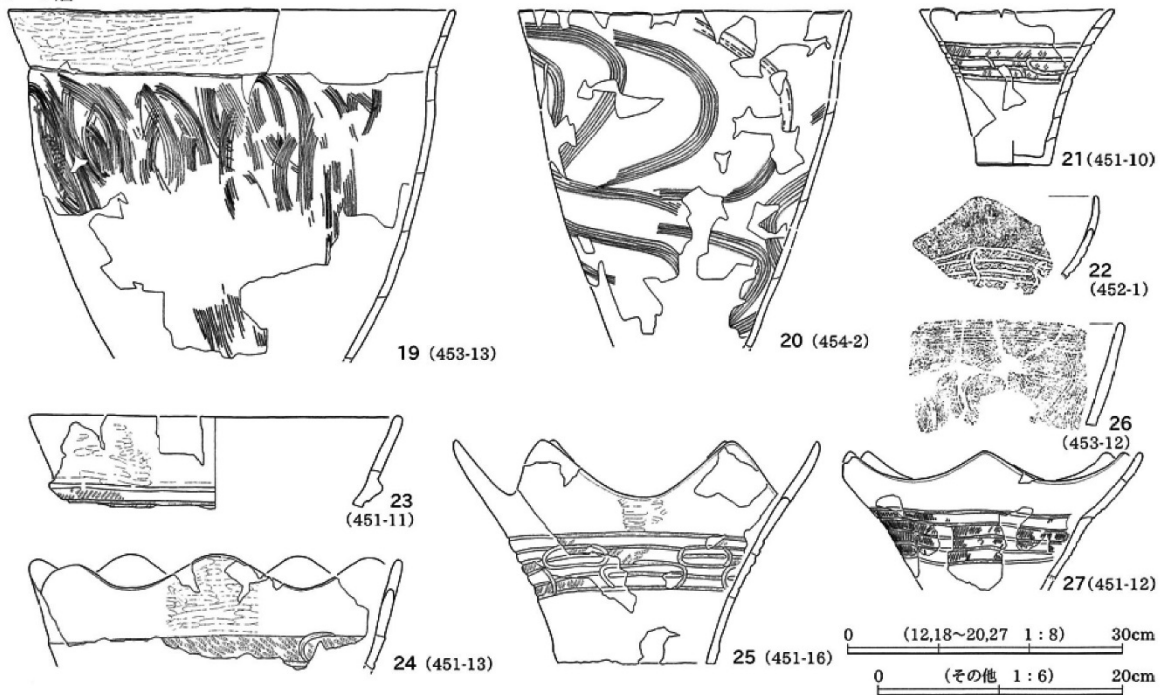
2区 III層



2区 IV層



2区 V層



0 (12,18~20,27 1:8) 30cm
0 (その他 1:6) 20cm

図44 2区II~V層の土器

及び三叉文主軸線の下端に縄文地文が施される。伸長化した入組三叉文に縄文地文を残す例は、宮城県北半の地域的特徴と指摘され、本例もその関連が想起される。12 は口縁部が内傾して立ち上がる粗製深鉢で、羽状縄文で構成され、末端を結節させた綾繰文も認められる。9・12 については、本来 I～II 層の面に相当する土器であり、調査時における混入の可能性も否定できない。

IV層出土の土器 (図 44-13~18)

IV層で出土した遺物の数量は、皿層より多く認められたが、他の層位に比べると少なく、皿層と同様に問層としての性格が指摘され、層厚 10～20cm を測る。出土土器は宝ヶ峯 2 式 (14)、同 3 式 (16・17)、後期中葉粗製深鉢 (15・18)、大洞 B1 古式 (13) と、後期中葉～晩期初頭までの土器を含んでおり、

時期的な纏まりは指摘できない。その他に大洞 C2 式の鉢形土器も出土している。

16・17 は、本遺跡で数少ない宝ヶ峯 3 式の装飾深鉢である。頸胴部界が屈折する器形で、口縁部は大波状縁をなし、口端と屈曲部に刻み目帯が圍繞される。16 の頸部文様帯は曲線的な磨消文様で構成されており、後期後半に固有の IIa 文様帯の成立を示している。宝ヶ峯 3 式は IV 層の他に、下位の V 層で小片が出土しているに過ぎない。

13 は大洞 B1 古式の装飾深鉢である。II 層出土の図 44-3 と同様に、I・IIa・11 文様帯の 3 帯構成で、IIa 及び II 文様帯には対向した三叉状陰刻を伴う入組帯状文が展開する。口縁部には 2 個一対の魚尾状突起と台形突起が交互に配され、前者の直下に連結した三角形区画が作出され、後者の直下で円文を囲うように対向する。頸胴部界より上位は篋状工具による刻み目手法で充填され、下半は縄文地文となる。上記の充填手法は後期末葉の入組帯状文を伴う装飾深鉢に多用されており、晩期には継承されない北上川下流域 (宮城県北部) では、篋状工具による刻み目手法が大洞 B2 式に盛行しており [後藤・小井川 2003]、同手法が地域的に残存した結果と見なされる。13 は東北中部の晩期初頭に同手法が残存した事例としての意義を有しており、また 3 と同様に晩期初頭 (大洞 B1 古式) の指標に位置付けることができるであろう。同例の内面付着物についても 14C 年代測定を実施しているが、 $3120 \pm 40\text{BP}$ (AMS 法) の測定値が得られており、3 よりはやや古い数値となっている。

IV層では、櫛歯条線文の粗製深鉢が多く出土している。後期中葉に位置付けられるものであるが、一方では羽状縄文や結節文が施された晩期の粗製深鉢も少量認められており、後期と晩期の土器が混在した層位の性状を窺わせている。

V層出土の土器 (図 44-19~27)

V層は層厚が 10～15cm と薄い層位であるが、後期中葉の夥しい量の土器が出土している。出土土器の殆どが宝ヶ峯 2 式 (第 VI 群土器) に位置付けられ、同式の単一層と見なすことができる。大波状縁で平行線文を施した第 VI 群土器 5 類が多数を占めており、曲線的な磨消文様は少なく、11 区で多く出土した

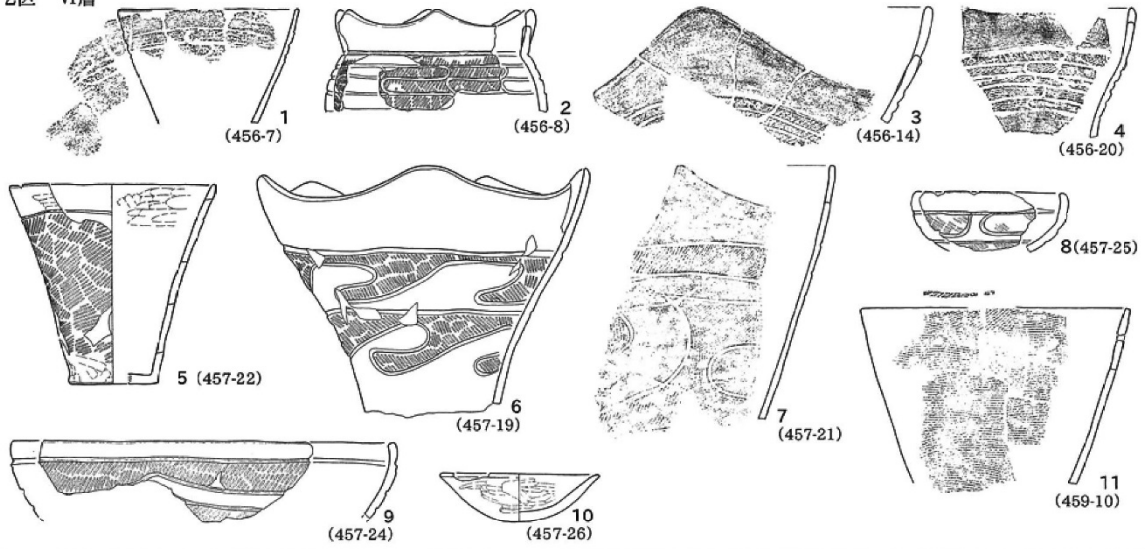
華やかな装飾突起を持った 6・9 類は認められていない。水場としての性格を反映してか、出土した土器は液体物の煮沸や貯蔵に用いられていたと推測され、6・9 類はこれ等の作業に不向きであったと考えられる。粗製深鉢は櫛歯条線文の深鉢 (19・20) が顕著に見られ、縄文施文では口縁部が外折した例は認められない。また 19・20 は非常に大型の深鉢であることが特記される。トチノキのアク抜き工程に用いられたのであろうか。

以上のように遺物集中地点の V 層では、宝ヶ峯 2 式の土器が出土している。粗製深鉢と共に炭化物が付着した装飾深鉢が多く出土していることは、煮沸・貯蔵の用途において、晩期のような器種毎の厳密な使い分けが行われていなかった様相を窺うことができよう。

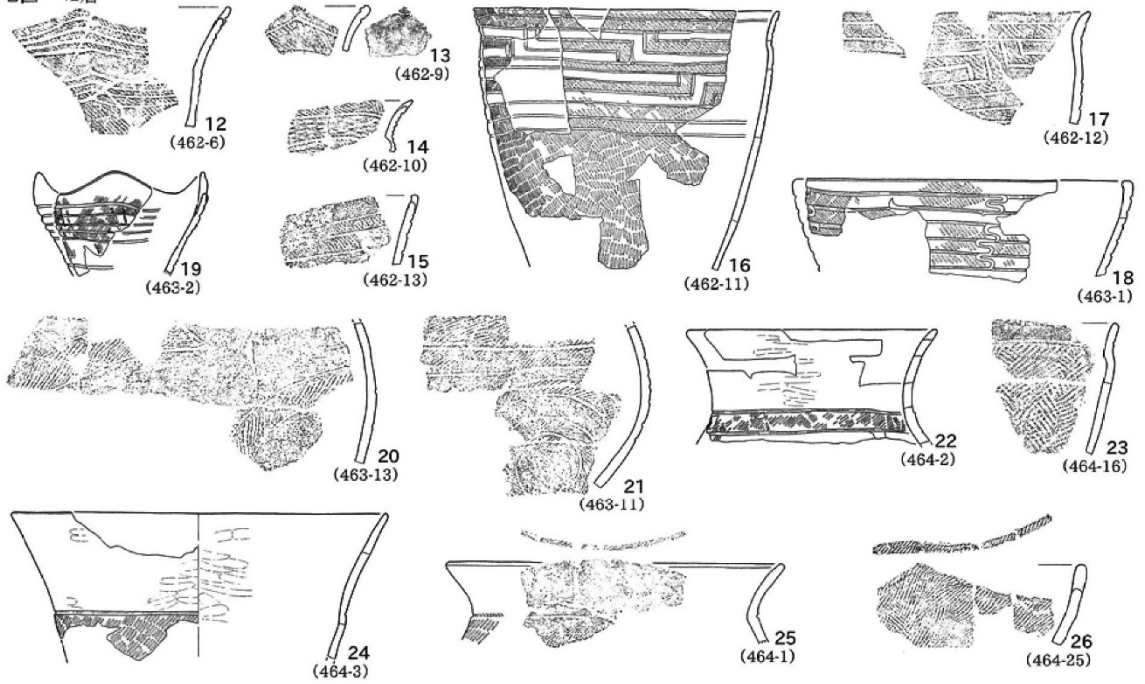
VI層出土の土器 (図 451~11)

VI層は層厚が 15～20cm を測り、後期中葉の夥しい量の土器が出土している。出土した土器の

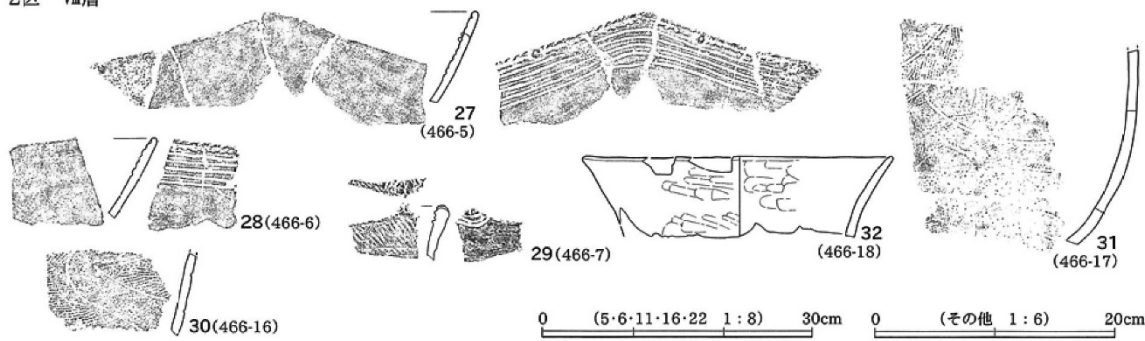
2区 VI層



2区 VII層



2区 VIII層



0 (5・6・11・16・22 1:8) 30cm 0 (その他 1:6) 20cm

図 45 2区VI~VIII層の土器

殆どがV層と同様に宝ヶ峯2式(第VI群土器)で占められている。大波状縁で平行線文が施された5類が多く出土しているが、V層には僅少であった曲線的な磨消文様の3・4類(図456～9)も認められる。粗製深鉢は縄文施文(11)と櫛歯条線文が卓越しており、口縁部が外折した例は僅かに出土している(遺物編第460図25・26)。

VI層はV層と同様に宝ヶ峯2式の文化層である。3・4類の出土量の多寡や11類の有無を除くと、両層位に明確な差異を指摘することは困難であろう。両層を合わせると20～30cmの層厚となるが、同一の層位として見なすべきであろうか。

VII層出土の土器(図45-12～26)

VII層は層厚が5～15cmを測り、後期中葉の夥しい量の土器と共に、礫も多く出土している。出土した土器は上層よりも古的様相が看取されており、宝ヶ峯1式(第V群土器)に位置付けられる。十腰内1式系の1類(図45-12～14・16・17)が卓越しており、平行線文系の2類(18・19)や曲線的乃至は幾何学的な磨消文様の3類(20・21)も出土している。

1類の波状縁の深鉢(12～14)については、体部文様が判然としない。12は口縁部と同様の連弧文が圍繞されるが、平縁の16・17は口縁部が短く外折し、2条の縄文帯が巡らされ、体部にクランク状文様が2段異方向に展開する。クランク文様の連結・屈曲部には円形刺突が穿たれる。2類では口縁部直下に平行線文が配されたり、口縁部の無文帯が幅狭に作出されており、古的様相を留めている(18・19)。3類の文様モチーフは平行沈線で構成されており、線間に縄文が充填されるため、無文部の占める割合が多い。20～22は壺形土器であるが、同器種は宝ヶ峯2式の層位では認められず、水場利用における型式上の差異が看取されよう。また3類には、第VI群土器9類の先駆となる列点を持った資料(遺物編第463図4～6・9)も出土している。装飾深鉢には幅広の無文の口頸部を持ち体部に縄文を施した深鉢(24)も加わる。当該土器はIX層(図4612)にも認められており、宝ヶ峯1式を構成する器種類型である。粗製深鉢では、櫛歯条線文は1点のみで、縄文施文が大勢を占める。口縁部が外折した例が多く存しており、口端に縄文を施したり、口縁部を無文とした例(25)も出土している。口縁部が直行した深鉢では、波状縁も存している(26)。口縁部が直行し、櫛歯条線文が卓越した上層の粗製深鉢とは、様相を異にしていると指摘されよう。

VIII層出土の土器(図45-27～32)

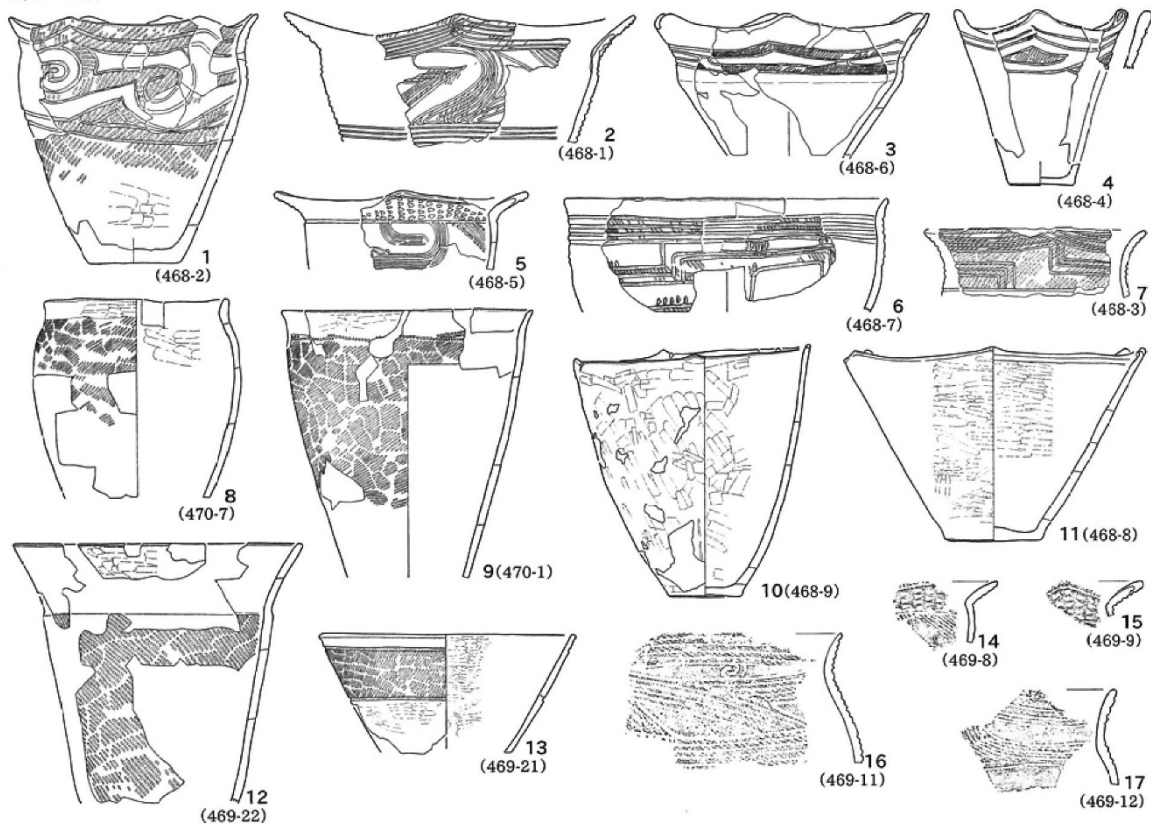
VIII層は層厚が5cmと薄く、出土遺物も上下層に比べると少ない。しかし堆積層は晩期木組遺構の直下まで伸びている。出土した土器は宝ヶ峯1式(第V群土器)に位置付けられる。加曽利B1式に相当する4類(図4527・28)が出土しており、併行関係を考える上での鍵層となる。同層からは十腰内1式系の1類(29)と磨消縄文の文様が施された3類(30・31)が出土しており、平行線文系の2類は認められない。32は先に指摘した幅広の無文の口頸部で体部に縄文を施した深鉢に相当すると考えられる。

粗製深鉢はV皿層と同様に、縄文施文で口縁部が外折した形状が卓越し、櫛歯条線文の土器は認められない。

IX層出土の土器(図46-1～17)

IX層は層厚が10～25cmを測り、後期中葉の夥しい量の土器が出土している。出土した殆どの土器が宝ヶ峯1式と見なされるが、南境2式(図461)も一部含まれている。十腰内1式系の1類(2・5・6・9・14～17)が卓越しており、平行線文系の2類は出土していない。1類の外折した口頸部には平行沈線が施されたり、刺突が充填されるが口縁部が無文となり屈折部直下に多条沈線を巡らす例(6)も存している。体部上半の文様は曲線文様やクランク文様で構成され、多くは磨消縄文の文様となる。1は口頸部の屈曲が緩く、口縁部文様帯と体部文様帯は分化せず、体部上半は入組文で構成されることから、南境2式に相当する。3・4の体部上半には三角形の区画

2区 IX層



2区 X層

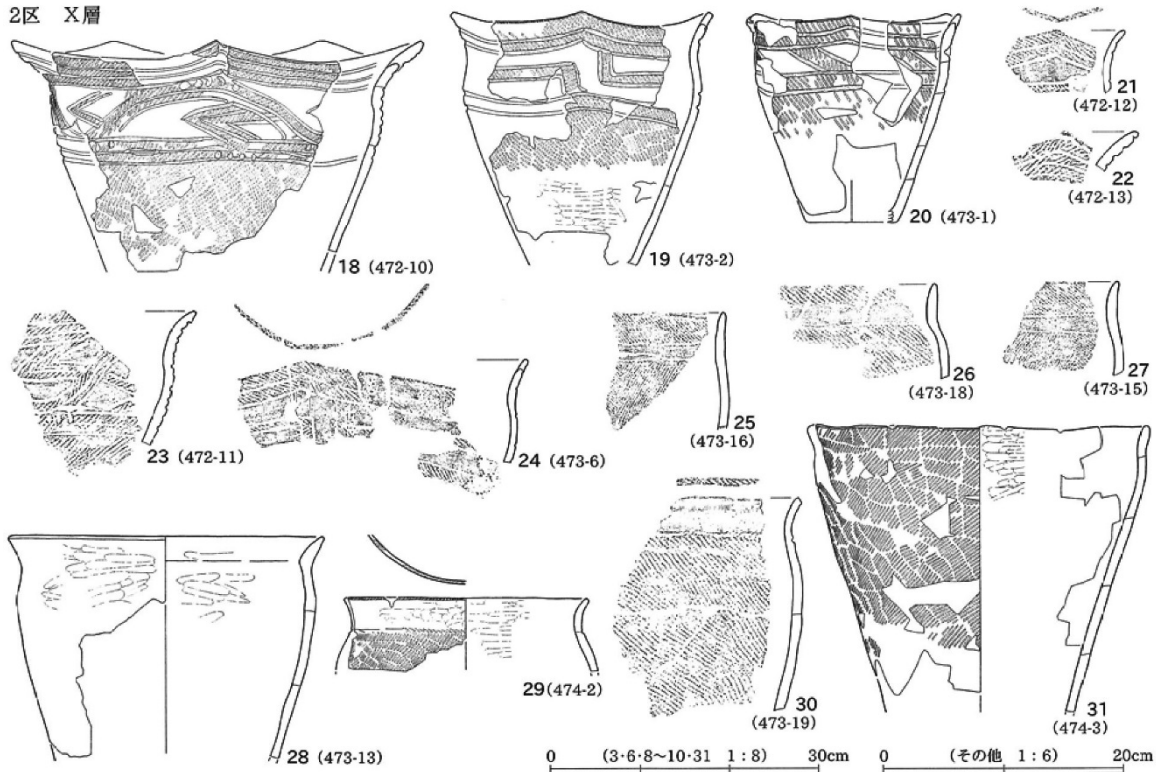


図46 2区IX・X層の土器

が存している。3の三角形区画はネガ文様、4はポジ文様となるが、加曽利 B1 式の三角形単位文との関連を窺わせる。11は口縁部に突起を持つ無文の鉢形土器で、器面は丁寧に磨かれており、口内には凹線が巡らされる。13は体部上半に幅広の縄文帯を巡らせた鉢形土器である。また幅広の無文の口頸部を持ち、体部に縄文を施した深鉢(12)も出土している。

粗製深鉢は口縁部が外折した器形が大勢を占め、口縁部が無文となる例や口端に縄文を施した例(8・9)が多く認められる。しかし櫛歯条線文の例は確認できない。

X層出土の土器(図46-18~31)

X層は最下層に当たり、層厚は10~15cmを測る。後期前葉の夥しい量の土器が出土しているが、土器の多くは南境2式(第IV群土器)と見なされる。十腰内1式系の口縁部が外折した深鉢(図46-18~24)が顕著で、口縁部は波状縁と平縁の二様態が存するが、前者の方が卓越する。口縁部には縄文地文が施され、2~3条の沈線が巡らされ、体部上半にはクランク状の文様や幾何学的な文様が展開する。文様の上下端の連結部に3~5個の刺突が加えられた例(18・23)も見られ、波状縁の場合は口縁部の縄文帯が口端に沿って連弧状に圍繞される。

粗製深鉢は口縁部が外折した器形が大勢を占める。口頸部を無文としたり、頸部に無文帯を巡らせた例(25~27・29・30)が特徴的で、口端に縄文を施した例が多く見受けられる。

総括

以上のように、東調査区遺物集中地点は10枚の文化層に区分することができる。年代の古い順から整理すると、南境2式(X層)→宝ヶ峯1式(IX~VII層)→宝ヶ峯2式(VI・V層)→間層(IV・III層)→大洞B・BC式(II層)→大洞BC~C2式(I層)の序列が指摘され、南境2式~宝ヶ峯2式にかけては6枚の文化層に区分されている。

南境2式 南境2式は堀之内2式に併行する段階である。遺物集中地点では最古の時期に当たり、X層を主体としてIX層や晩期木組遺構直下のIX層でも出土している。体部上半が緩く括れ、口頸部が外反して短く立ち上がる形態の深鉢に特徴付けられ、緩い波状縁が卓越する。口縁部に圍繞される沈線は2~3条が通例で、波状文が巡らされた例も認められる。体部上半の文様は入組文やクランク状・幾何学的モチーフで構成され、磨消手法を伴う例が多く、上下端区画線との連結部には3~5個の刺突が加えられる場合もある。

水戸部秀樹氏はかっぱ遺跡の南境2式の特徴として、I文様帯とII文様帯の未分化を指摘している[水戸部2004:10頁]。しかし高瀬山遺跡例で前記の要件を満たしているのは、図46-1と晩期木組遺構直下IX層出土例(遺物編第402図1)のみで、殆どが口縁部と体部文様が区画されている。またかっぱ遺跡や川口遺跡[阿部ほか1990]に見られた口縁部と体部上半の文様間の窓枠状の区画を配した例も、本遺跡では認めることができない。入組文が少なく、クランク状や幾何学的モチーフが卓越する点でも差異が存している。連結部の刺突においても、かっぱ遺跡では1~3個の円形の刺突が加えられるのに対し、本遺跡では3~5個と数が多く、半裁竹管や角張った工具で斜位方向から加えられる。上記した差異が時期差を反映しているのか、それとも地域差なのかなお検討を要するが後者の可能性が高いと考えられる。

また粗製深鉢では頸部に無文帯を巡らしたり、口頸部を無文とし、撚糸の側面圧痕を加えた例(図46-25~27・29・30)が特徴となる。上記した例は宮城県石巻市南境貝塚で、「第4~5層第2類」[後藤2004]と分類され、南境2式相当の土器との伴出が指摘されている。本遺跡でも同様の状況が看取されており、上層には頸部に無文帯を巡らせた例は認められない。

本遺跡X層の土器群は北上川中流域では新山権現社遺跡第II群土器[金子1993]に対比されるであ

ろう。奥羽脊梁山脈を挟んだ仙台市では、下ノ内浦遺跡[吉岡ほか1996]が併行する遺跡となるが、同遺跡は1・2条沈線文や多条沈線文の土器が主体で、東北南部との関係が強く、東北

北部の影響下にあった山形盆地とは様相を異にしていたことが窺えよう。

宝ヶ峯1式 宝ヶ峯1式は、加曽利B1式に併行する段階である。遺物集中地点ではIX～VII層に主体があり、晩期木組遺構直下VIII層や後期2号木組遺構付近でも当該土器が出土している。層位的には3面の文化層として捉えられたが、遺物の少ないVIII層を介してIX層とVII層に区分することができるであろう。

IX層では十腰内1式系の土器が卓越し、平行線文系の土器は認められない。十腰内1式系の土器は、口縁部が多条沈線で構成され、体部上半の文様も3条以上の沈線で、クランク状や曲線的なモチーフが施文される。また体部上半に三角形の区画を配した装飾深鉢・鉢形土器(図46-3・4)も出土しているが、加曽利B1式の三角形単位文との関連が想定される。一方VII層では、十腰内1式系の土器(図45-12~17)も出土しているが数量的には少なく、平行線文系(18・19)や曲線的乃至は幾何学的磨消文様の土器(20・21)が出土している。両層の差異を時間差として捉えるならば、古段階には十腰内1式系の土器が主体であったのに対し、平行線文系や曲線的乃至は幾何学的磨消縄文の土器の比重が漸次高まる経過が指摘されよう。しかし型式学的には明確な差異を指摘することは困難と言わざるを得ない。またIX～VII層を通して幅広の無文の口頸部を持ち体部に縄文を施した深鉢(図45-24・32?、図46-12)が一貫して出土している。宝ヶ峯1式の一翼を担う器種類型であったことが窺え、12区1号住居跡(図425)を参照するならば、宝ヶ峯2式まで継承されるが、屈曲は弱なる。

水戸部秀樹氏は宝ヶ峯1式の十腰内1式系土器について、①I文様帯とII文様帯の境界の明確化、②II文様帯の出現を予想させる口縁部の変化を指摘している[水戸部2004:3頁]。①に関しては、屈曲部の内面に明確な稜が形成され、体部上半の膨らみが減少する形態上の変化、②に関しては、口縁部直下の1条の横位沈線を描出することで、上下に限られた空間が作出され新たな文様帯を生み出す要因となることが指摘されている。本遺跡の事例で見ると、①の器形については屈曲が緩く稜を持たない例も存するが、体部の膨らみは確かに減少している。②の口端の沈線については既に先行型式に認められ、本型式では多条沈線が卓越しており、十腰内1式系の土器からIIa文様帯の成立を跡づけることは困難であろう。

平行線文系の良好な資料は、後期1号木組遺構4段から出土している。同例は木組遺構に伴うものではなく、後期2号木組遺構1段の上面(15~20cm上位)から出土している。共に沈線が反転して垂下しており、口縁部形態は後続型式に連なる古の様相が看取される。幾何学的な磨消文様で構成された良好な資料は、後期1号木組遺構1段で出土している。同例も木組遺構に伴うものではなく、後期2号木組遺構2段の50cm上面から出土している。頸胴部界で屈折した器形で、口頸部は無文となり、直線化した体部に鋸歯状の磨消文様が展開している。

宝ヶ峯1式の粗製深鉢には、楡歯条線文が認められない縄文施文の深鉢が大勢を占め、口縁部の外折

した深鉢が卓越し口端に縄文を施したり、口縁部を無文にした例が特徴的となっている。

宝ヶ峯1式の基準的資料は、宮城県仙台市伊古田遺跡[渡部ほか1995]が相当する。しかし同遺跡には十腰内1式系の土器は認められず、平行線文系の土器が主体となっており、先行型式と同様に奥羽脊梁山脈を挟んだ山形盆地とは様相を異にしている。また北上川中流域では、新山権現社遺跡第Ⅲ群1類土器[金子1993]に対比されるであろう。

宝ヶ峯2式 宝ヶ峯2式は、加曽利B2式に併行する段階である。遺物集中地点ではVI・V層に主体があり、晩期木組遺構直下V層や後期1号木組遺構及びその周囲でも出土している。層位的には2面の文化層として捉えたが、型式学的に明確な差異を指摘することは困難である。

VI層とV層ともに、大波状縁で平行線文が施された第VI群土器5類が多く出土しており、下層のVI層では曲線的な磨消文様の3・4類が認められる。両層準においては、居住域である11区

で多く出土した華美な装飾突起を持った6・9類が認められていない。これは前記したように水場遺構としての性格を反映しており、時期差を示している訳ではないと考えられる。

粗製深鉢では櫛歯条線文を施した土器が多く認められる。縄文施文の土器も存しているが、先行型式のような口縁部の強い外折はなく、口端に縄文が施された例も認められない。この点で先行型式とは明確に区分されるものであり、同様の型式変化は宮城県仙台市内の近接した位置関係にある、伊古田遺跡【渡部ほか 1995】と王ノ壇遺跡【小川・高橋 2000】にも指摘される。東北中部に通有の変遷経過であったことが窺えよう。但し11区3A号住居跡(図4110)を参照するならば、僅かに屈曲した深鉢は見られるようである。

2区の遺物集中地点からは、装飾深鉢と粗製深鉢の他に、鉢・浅鉢類(図45-8・10)が僅かに出土したに過ぎず、単調な器種構成となっている。11区では前項で指摘したように、壺形土器や注口土器が主要な器種として加わっており、また遺物集中地点でも先行型式では、壺形土器が一定数出土している。装飾深鉢の6・9類が欠如するのと同様に、水場としての性格を反映しているのであろう。その中で晩期木組遺構直下V層から、大型の壺形土器が出土している。4単位の工字状の磨消文様が展開しており、文様モチーフは装飾深鉢の平行線文との関連が想定されよう。

宝ヶ峯2式の基準的資料としては、宮城県仙台市王ノ壇遺跡の「Ⅱ段階縄文土器」【小川・高橋 2000】が相当する。北上川中流域では、新山権現社遺跡第Ⅲ群2類土器【金子 1993】に対比されるであろう。

宝ヶ峯3式 宝ヶ峯3式は加曾利B3式に併行する段階である。集中地点ではIV層(図44-16・17)とV層で僅かに出土したに過ぎず、他の区域では認められていない。同式前後の詳細については、既に前項で言及したので省略するが、東北中部では宮城県川崎町向鹿遺跡2号住居跡床面出土土器【佐藤広史ほか 1987:第8図】が基準となり、山形盆地では天童市砂子田遺跡【森谷 2003】に良好な資料が纏まっている。

小結 2区東調査区遺物集中地点では計10枚の文化層が抽出され、特に後期中葉においては連続した6枚の層位の堆積が認められた。南境2式(X層)→宝ヶ峯1式(Ⅸ～Ⅶ層)→宝ヶ峯2式(Ⅵ・Ⅴ層)の文化層が連続して堆積しており、宝ヶ峯1式は3枚の文化層に区分されている。この層位区分が土器型式の細分にどのように反映されるのか、今後詳細な検討が求められるが、高瀬山遺跡で得られた変遷序列は、細部においては異同が存するものの、水戸部秀樹氏が最上町かっぱ遺跡を基に設定した編年案【水戸部 2004】を概ね追認する結果となっている。特にかっぱ遺跡で不問とされた粗製深鉢の問題について、その型式変化を明示できたことは大きな成果と言えるであろう。高瀬山遺跡で得られた層位的成果は、東北中部の後期中葉編年研究の指標としての役割を担う内容となっており、今後多様な視点から、「高瀬山編年」に対する検討が加えられることを期待したい。

5) 大洞A式相当の土器について(図47・48)

佐藤祐輔

高瀬山遺跡HO地区からは大洞A式相当の土器が一定量出土しており、図47に代表例を図示した。その様相、図48に示した1997年に寒河江市教育委員会によって調査された最上川沿い微高地の近接地点(以下市調査区)とほぼ同様である。以下、簡単にその特徴を述べることにする。

器種としては精製浅鉢・壺・深鉢・台付浅鉢・粗製深鉢などが出土している。市調査区同様、その中でも粗製深鉢が数量的に多く出土しており、晩期後葉の一般的な器種組成といえる。

粗製深鉢は、口縁部の形態や頸・胴部境界部の作出法にバリエーションが見られる。口縁部形態は平縁と小波状縁があり、立ち上がりの形態も内傾・外傾するものや、直線的に立ち上がるものなど様々である。頸部と胴部との境界部には、沈線を巡らしたり(図47-46)、段を作出して区

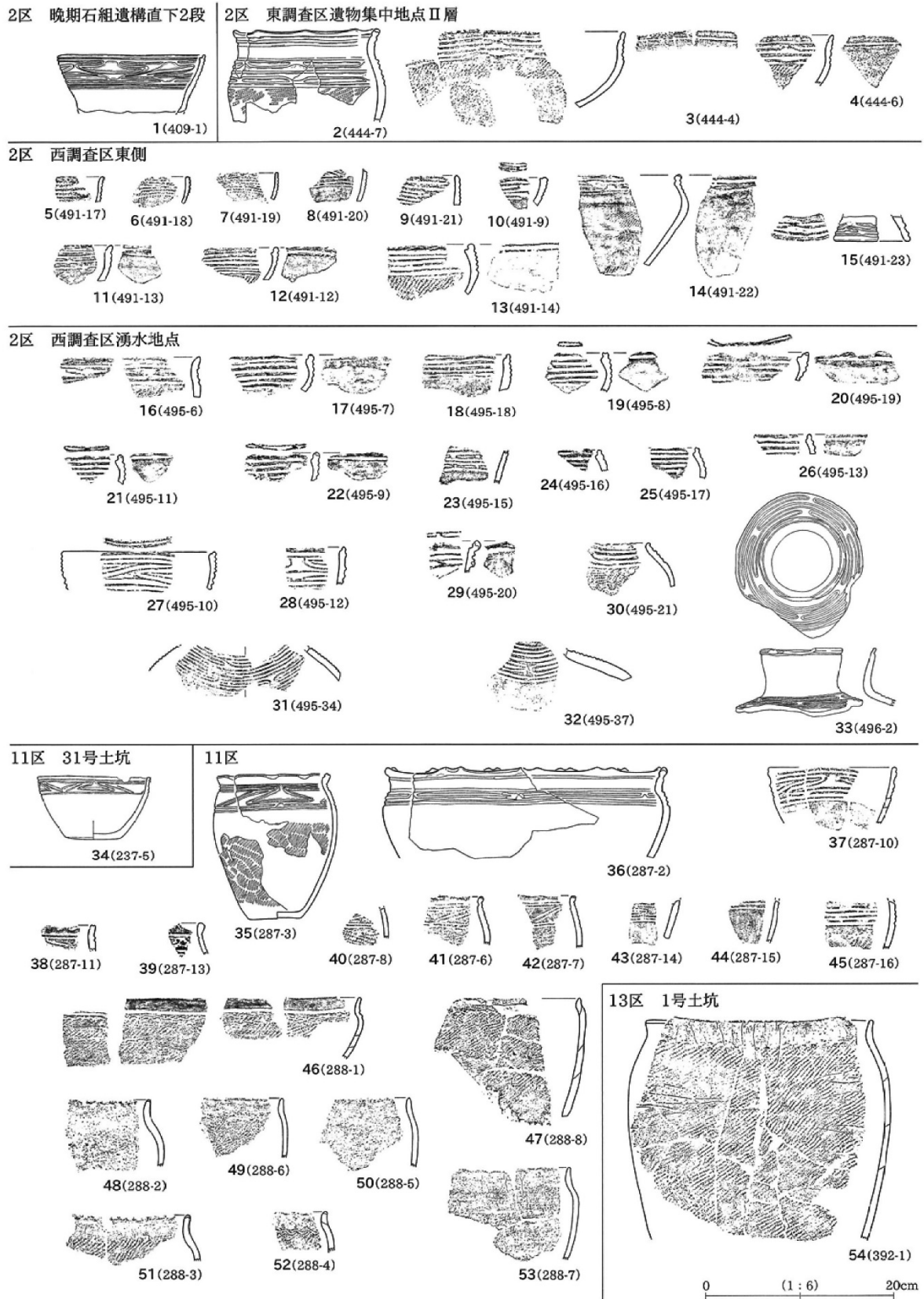
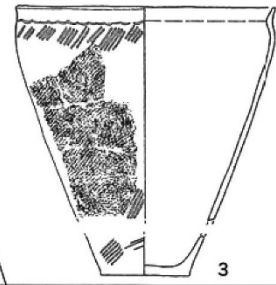
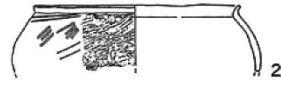
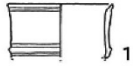


図47 HO地区の大洞A式土器集成図(1)

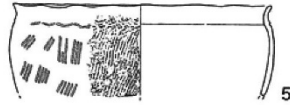
14号住居跡



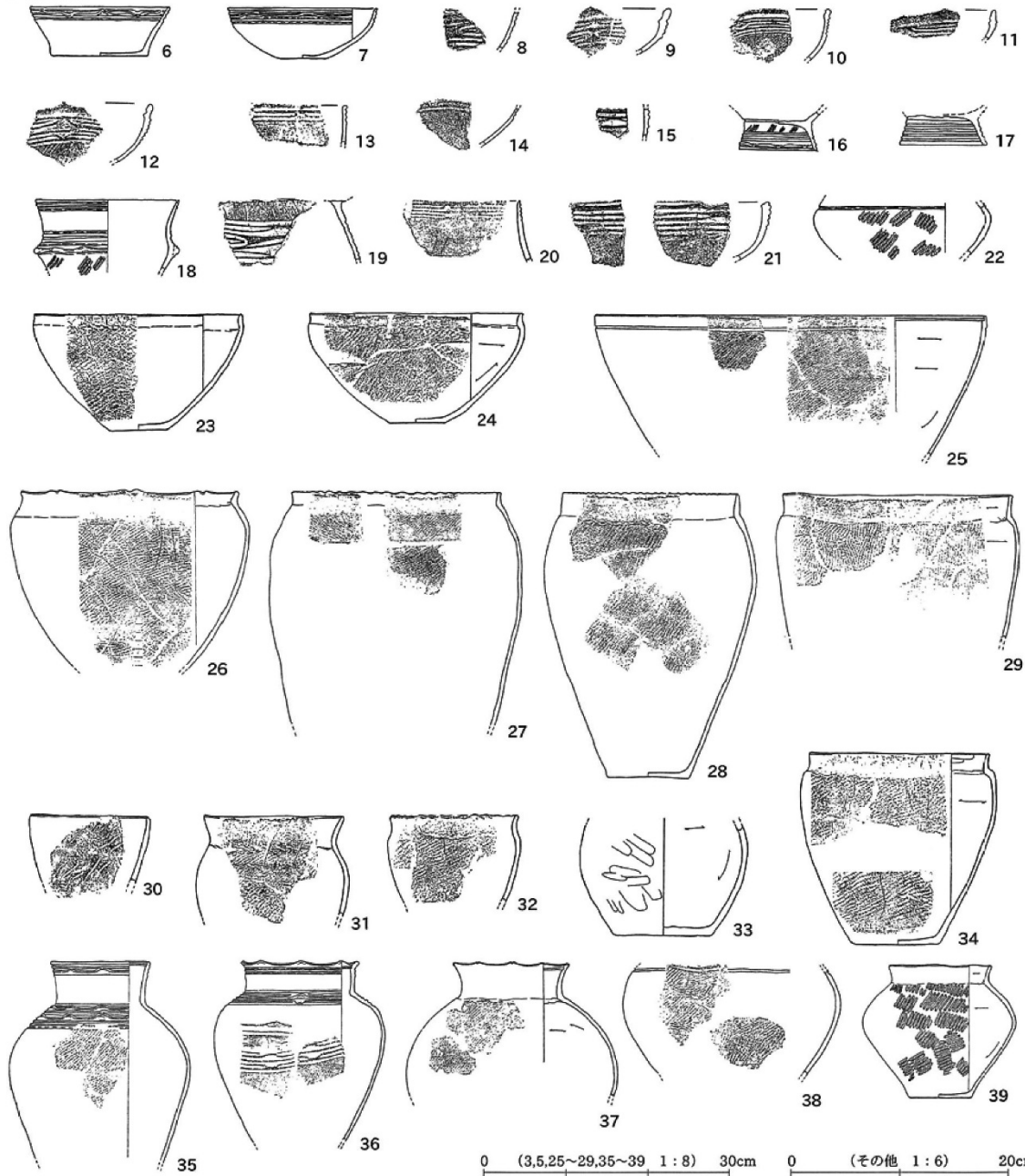
9号住居跡



13号住居跡



27号住居跡



0 (3,5,25~29,35~39 1:8) 30cm 0 (その他 1:6) 20cm

図48 HO地区の大洞A式土器集成図(2)

画するもの(47)と、無区画のもの(48~50・53)がある。地文はLR縄文が多く、その殆どに結節縄文が付加される(46・47・54)。この結節縄文が頸・胴部の区画線として機能していることが多く、本遺跡の特徴となっている。また、該期には地文を羽状縄文・網目状撚糸文とする粗製土器は確認されていない。

次に精製・半精製土器を見てみると、その文様の多くが大洞A式に代表される隆線文手法によって描出されている。精製土器には「変形匹字文」と「補助単位文」で構成される「特殊工字文」と呼ばれる文様(図47-1・27・28・34・35・37)が、半精製土器には「匹字文」が多く描かれている(2~5・20等)。

補助単位文に着目すると、特殊工字文は二つに分類することができる。補助単位文が匹字文化しているもの(図47-1、図48-19)と、単純な沈線で描かれているもの(図47-27・34・35)である。前者は東北地方南部、後者は東北地方北部に特徴的な文様構成であり、東北地方南部に位置する本遺跡において両特徴が共存していることは興味深い。図48-35・40~42のように、文様帯直上で口縁部が外反する深鉢も岩手県域(岩手県北上市九年橋遺跡で多くの出土例)を中心とした東北北部で多く出土しており、本遺跡には幾つか東北北部の特徴を持った要素が入り込んでいると見なすことができよう。

半精製土器の匹字文は、HO地区では上下対称に描かれるもの(図47-2~4)が多いのに対して、市調査区では匹字文が半単位ずれたもの(図486)や上下同一方向のもの(図4835)が出土している点で違いが見られる。しかし天童市砂子田遺跡ではこのような各種匹字文が遺跡内で共存しており、同一時期内のバリエーションとして捉えられよう。

問題となる文様は、沈線文手法で描かれている精製壺であろう(図47-32・33)。32は小破片のため文様の全体像は不明であるが、恐らく流水型変形工字文を描いており、単純に時期比定するならば大洞A式期よりも新しく位置付けられるであろう。しかし、HO地区からは明確な大洞A'式期の土器が出土していないことを考えると、大洞A'式期以前として捉える必要性がある。図47-33は、横長の楕円形文を3段半単位ずらしながら配置している。このような半単位ずらして沈線文手法で文様を描く精製壺は、文様構図は異なるが東北北部を中心として大洞A式後半(大洞A2式期)に見られ[品川2003]、大洞A式の範疇として問題ない。沈線文手法自体は、県内の北柳1遺跡[小林1997、森谷ほか2000]・砂子田遺跡[森谷2003]でも同様に出土しており、積極的に大洞A'式期まで下げて考える必要性がないことを証明している。

以上のような精製・半精製土器に描かれる文様(特殊工字文・匹字文)から高瀬山遺跡出土の大洞A式土器の編年的位置を考えると、主に鈴木正博氏が指摘する「大洞A2式」に位置付けられるであろう[鈴木正博1985]。「大洞A2式」については、その位置付けが研究者間で異なっているものの、山形県内では山形市北柳1遺跡(本遺跡の南東方10.5km)や天童市砂子田遺跡(本遺跡の南東方7km)で、該期の良好な資料が遺構・遺跡単位で出土しており、一時期を画することは間違いない状況となっている。前後型式である大洞A1式や大洞A'式が本遺跡で出土していないことも、大洞A2式の位置付けを積極的に認める根拠となり得るであろう。

以上のことをまとめると、高瀬山遺跡出土の大洞A式土器の編年的位置は、「大洞A2式」の範疇で捉えることができる。在地土器の特徴は天童市砂子田遺跡出土土器と極めて類似しており、山形盆地における該期の土器様相を知る上で非常に重要な土器群である。また市調査区で見られなかった東北地方北部の影響が、HO地区出土土器には顕著に見られる点も、今後該期における当地方と東北北部・山形県最北地方との地域的関係を知るための大きな役割を果たすものと期待される。